岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第692集

平成29年度発掘調査報告書

岩洞湖Ⅰ・Ⅱ遺跡　和野新墾神社遺跡
北野XⅡ遺跡　木戸場遺跡　中野城内遺跡
沼里遺跡　根井沢穴田Ⅳ遺跡　耳取Ⅰ遺跡
千厩城遺跡

ほか調査概報（23遺跡）

２０１８

（公財）岩手県文化振興事業団

平成29年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成29年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で33遺跡、約9.9万㎡が調査され、縄文時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成 30 年 3 月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　菅　野　洋　樹

目　　次

平成29年度発掘調査の概要について…… 1

Ⅰ　発掘調査報告

（１）岩洞湖Ⅰ・Ｈ遺跡（盛岡市）…… 5
（２）和野新墾神社遺跡（田野畑村）……21
（３）北野ⅩⅡ遺跡（久慈市）……29
（４）木戸場遺跡（久慈市）……41
（５）中野城内遺跡（洋野町）……49
（６）沼里遺跡（宮古市）…… 71
（７）根井沢穴田Ⅳ遺跡（宮古市）…… 95
（８）耳取Ⅰ遺跡（西和賀町）……105
（９）千厩城遺跡（一関市）……111

Ⅱ　発掘調査概報

(10) 町屋敷遺跡（奥州市）……125
(11) 伏津館跡（野田村）……126
(12) 田ノ端Ⅱ遺跡（洋野町）……127
(13) サンニヤⅢ遺跡（洋野町）……128
(14) 荒津内遺跡（洋野町）……129
(15) 宿戸遺跡（洋野町）……130
(16) 南八木遺跡（洋野町）……131
(17) 南鹿糠Ⅰ遺跡（洋野町）……132
(18) 鹿糠浜Ⅰ遺跡（洋野町）……133
(19) 鹿糠浜Ⅱ遺跡（洋野町）……134
(20) 北玉川遺跡（洋野町）……135
(21) 上のマッカ遺跡（洋野町）……136
(22) 北ノ沢Ⅰ遺跡（洋野町）……137
(23) 千徳城遺跡群（宮古市）……138
(24) 青猿Ⅰ遺跡（宮古市）……139
(25) 中平遺跡（野田村）……140
(26) 田屋遺跡（大槌町）……141
(27) 小白浜遺跡（釜石市）……142
(28) 挟田館跡（大槌町）……143
(29) 内田貝塚（大船渡市）……144
(30) 杉の堂遺跡（奥州市）……145
(31) 田鎖車堂前遺跡（宮古市）……146
(32) 長谷堂貝塚（大船渡市）……147

調査報告遺跡抄録 ……148

平成29年度発掘調査の概要について

平成29年度の発掘調査は、当初30遺跡、111,601㎡で開始し、最終的には33遺跡、99,543㎡の発掘調査を実施した。調査遺跡は、沿岸部を中心に７市３町２村に及んでいる。前年度の最終結果と比較すると２遺跡増、面積では39,524㎡の減となっている。調査面積については、徐々にではあるが減少傾向にある。通常開発事業の調査は８遺跡、約14千㎡、全受託面積の約14％程度である。ダム貯水池の護岸工事、道路改良事業、バイパス建設事業に伴う調査である。一方、復興関連調査は25遺跡、面積で約85千㎡、受託総面積の約86％を占めており、多くは三陸沿岸道路建設事業に伴う調査である。復興調査は平成25年度をピークとし、その後漸次減少してきている。

調査では縄文時代の遺構遺物が主体を占めている。洋野町の中野城内遺跡・宿戸遺跡で早期の土器や住居跡が見つかっている。宿戸遺跡は、海岸線から約450m内陸に入った標高35～53mの丘陵上に立地する遺跡である。昨年度からの継続調査で、主に縄文時代早期～後期の土器や石器、住居跡・焼土遺構・陥し穴状遺構・埋設土器などが見つかっている。小扁平礫に人の顔を線刻した特異な石製品も出土している。次年度も継続調査の予定である。同じく鹿糠浜Ⅰ遺跡では、列状に石を配した縄文時代後期の列石と前期の土器を中心とした捨て場が見つかった。沿岸南部の大船渡市では、前年度からの継続遺跡である長谷堂貝塚と新規調査の内田貝塚の調査が同一時期に行われた。内田貝塚の調査では、縄文時代前期の貝層が見つかり、貝殻（スガイ、レイシほか）・魚骨（マグロ）・獣骨（イルカ、アシカ、シカ、イノシシほか）・骨角器・貝輪などが出土している。一方、長谷堂貝塚では縄文時代中期から後期初頭と思われる配石遺構や縄文時代中期後半の貝層が確認され、シカ・イノシシの骨やカワウなどの鳥類、魚骨（サバ、マイワシ、アイナメ、サケほか）などが見つかっている。特異事例として、複数個体のイヌの骨がバラバラの状態でまとまって出土している。同一地内で時期を異にするそれぞれ特色のある貝塚調査が行われたことは非常に貴重な調査事例であった。学史に名を残す奥州市の杉の堂遺跡の調査では、縄文時代晩期の墓・住居跡・貯蔵穴が見つかり、集落の内部で墓域・貯蔵域・居住域というように使用目的別による空間利用の状況が確認された。墓と思われる一部の土坑には、赤色顔料が底面や壁面に付着している状況が確認された事例もあった。

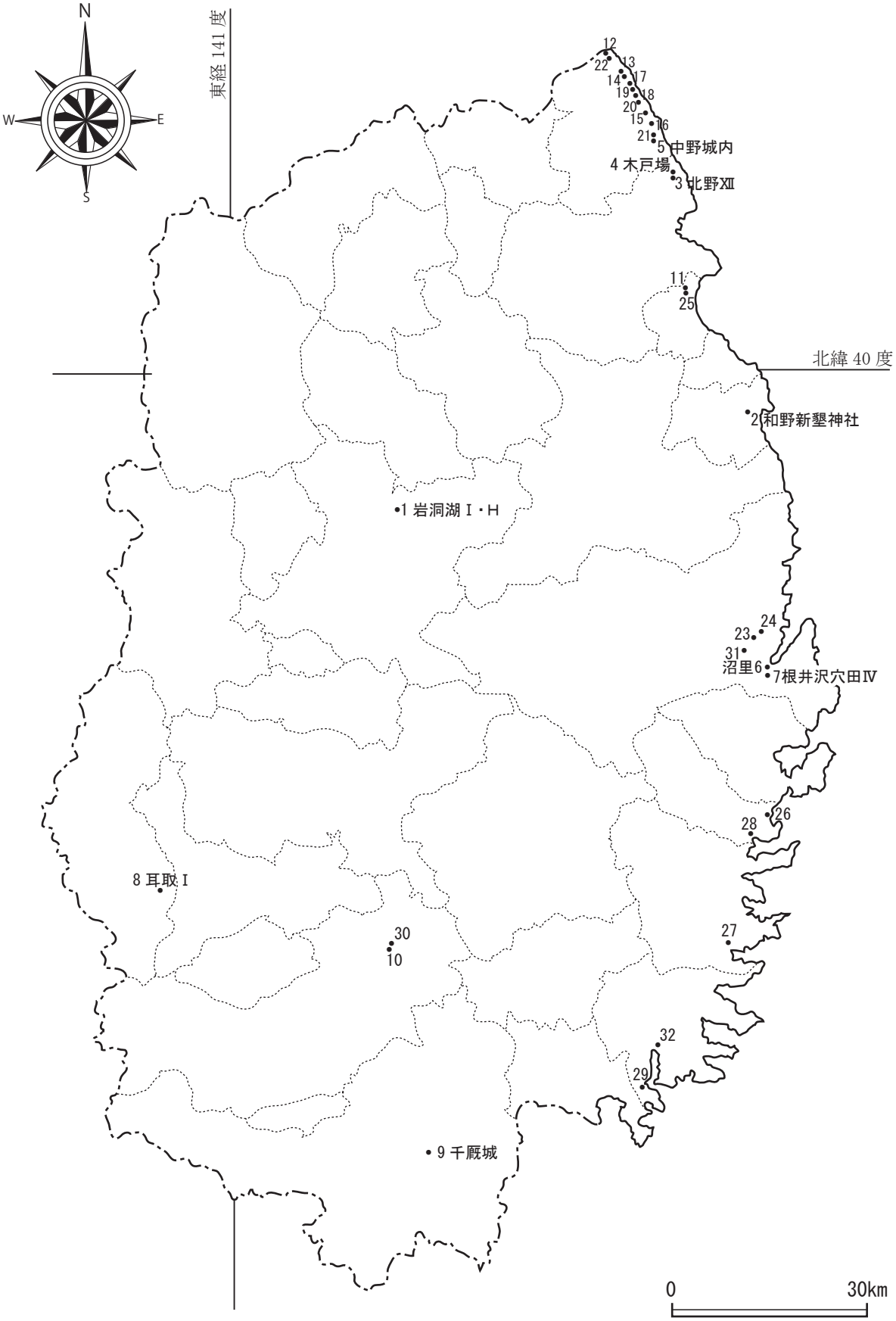
弥生時代では、宮古市の沼里遺跡で住居跡が１棟確認された。田鎖車堂前遺跡で弥生時代前半から中期の土器が出土している。

奈良・平安時代では、前出の杉の堂遺跡で奈良時代の住居跡２棟と平安時代の住居跡６棟が見つかっている。平安時代の遺構からは、緑釉陶器や多くの墨書土器が出土している。近隣に所在する町屋敷遺跡でも８世紀代の住居跡が３棟見つかっている。

中世では、大槌町の挟田館跡、一関市の千厩城遺跡、宮古市の千徳城遺跡群の調査が行われた。挟田館跡は、切岸・腰曲輪で構成された城館で、急峻な切岸ではさらに幅の狭い通路状の犬走りが確認された。15世紀代の中国産青磁碗、瀬戸窯産陶器の卸皿が見つかっている。

近世では、奥州市の町屋敷遺跡の調査で江戸時代の屋敷跡が50棟以上、近隣に存在していた御蔵場に続く道路側溝と思われる溝や屋敷を区画する溝のほか、陶磁器（肥前産・大堀相馬産・瀬戸産）、石製挽臼、硯、銭などが出土している。

今年度も多くの遺跡調査が行われた。特に、沿岸部では洋野町内で数多くの調査が行われた。平坦地・緩斜面が多くても大規模な集落の展開例が少ないなど、久慈市以南の野田村や田野畑村、宮古市、山田町などとは様相を異にする状況が見られた。　（調査課長　齋藤邦雄）



報告遺跡位置図　数字は発掘調査概報報告番号と共通

Ⅰ　発掘調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30㎝

中コンテナ：42×32×20㎝

小コンテナ：42×32×10㎝

本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。

（例）竪穴住居跡→竪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

（1）岩洞湖Ⅰ・H遺跡

所　在　地	盛岡市玉山区藪川字亀橋地内	**遺跡コード・略号**	KF61-0251・GDI-17／KF61-0029・GDH-17
事　業　名	岩洞ダム貯水池護岸工事	**調査対象面積**	Ⅰ：850㎡　H：1,360㎡
委　託　者	東北農政局岩手山麓農業水利事業所	**調査終了面積**	Ⅰ：850㎡　H：1,360㎡
発掘調査期間	平成29年9月19日～10月13日	**調査担当者**	西澤正晴・澤目雄大・佐々木昭太

1　調査に至る経過

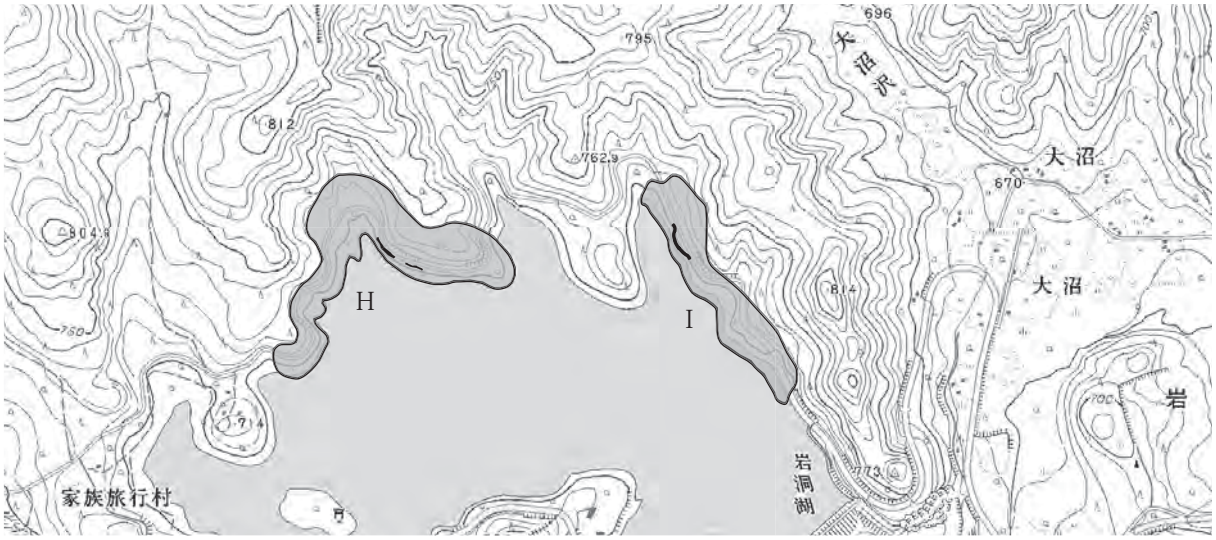
「国営岩手山麓農業水利事業岩洞ダム貯水池浸食防止対策（その３工事）」予定地が岩洞湖Ⅰ遺跡、岩洞湖H遺跡の一部に係ることから発掘調査をすることとなった。

国営岩手山麓農業水利事業は、国営岩手山麓土地改良事業（昭和16年度～昭和43年度）により造成された基幹的な農業水利施設が、経年的な施設の劣化及び寒冷な気象条件の影響により、岩洞ダム、導水路及び幹線用水路のコンクリート構造物の欠損や鋼構造物の腐食等が発生し、漏水等により農業用水の安定供給に支障を来しているとともに、維持管理に多大な費用を要していることから、本事業では施設の機能監視を行いつつダム、導水路等の改修を適時に行い、併せて関連事業において、用水路の改修を行うことにより、農業用水の安定供給と施設の維持管理の軽減を図り、農業生産の維持及び農業経営の安定に資するために平成26年８月１日に事業着工したものである。

なお、本工事は、岩洞ダムの波浪による湖岸浸食が西南西風の影響により進行している左岸側の湖岸について、倒木がダム管理に支障となることや、浸食による市道への影響や民地境界を侵す恐れがあると共に、周囲は県立自然公園に指定されており、環境へ与える影響も懸念されることから、浸食の著しい区間について今後計画的に浸食防止対策を進めるものである。

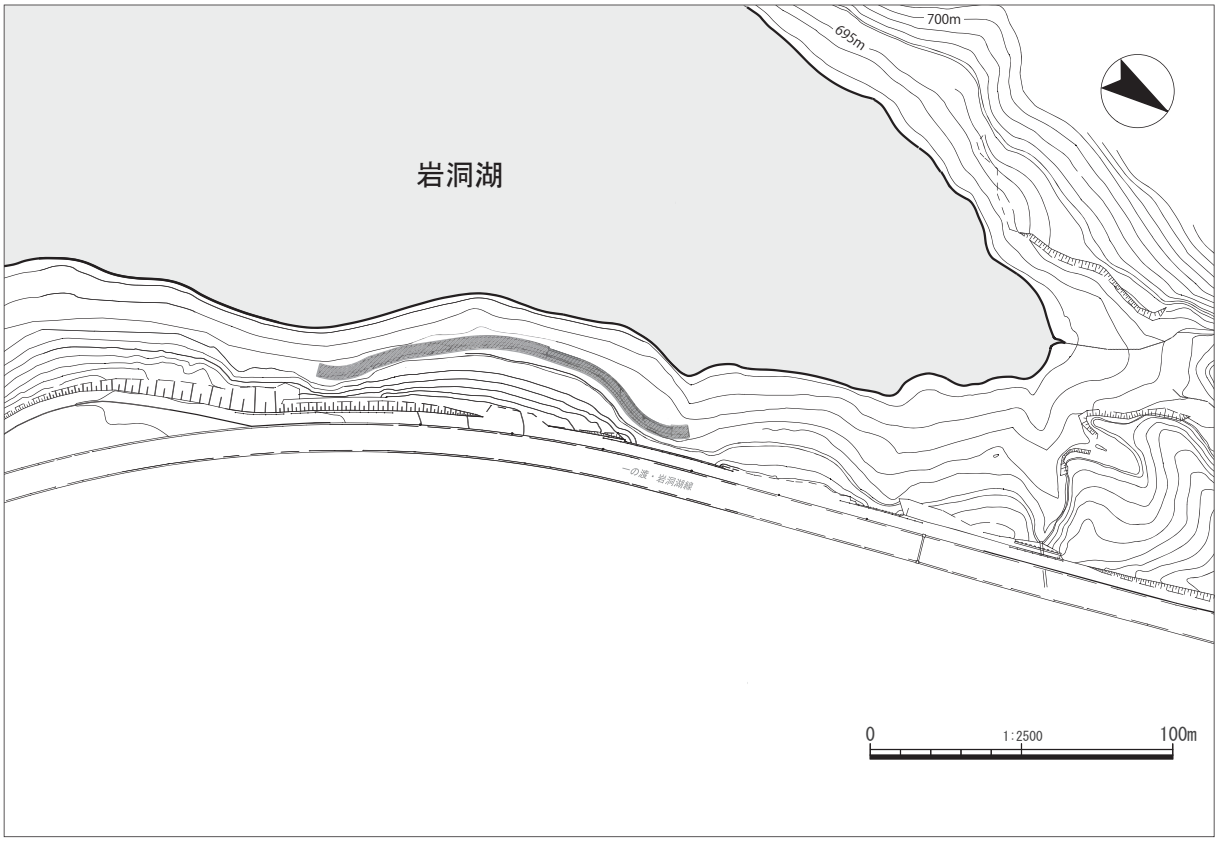
当事業の工事施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、平成27年10月28日付27北和岩第８号-７「埋蔵文化財包蔵地（岩洞湖Ⅰ遺跡）の分布調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼を行って以降、数度の協議を実施して、平成28年度に岩洞湖Ⅰ遺跡のうち970㎡の調査を行い、今年度は850㎡の調査を行った。岩洞湖H遺跡については、1,360㎡の調査を行ったものである。

（農林水産省東北農政局岩手山麓農業水利事業所）



1:25,000　外山・陸中南山形

第1図　遺跡の位置



第２図　岩洞湖Ⅰ遺跡

第３図　岩洞湖H遺跡

２　遺跡の位置と立地

遺跡は盛岡市玉山区藪川字亀橋地内に所在し、IGRいわて銀河鉄道渋民駅より東方約38kmに位置している。今回調査を行った遺跡は、岩洞湖Ⅰ遺跡、岩洞湖Ｈ遺跡の２つの遺跡であり、現在では岩洞湖の湖畔に相当する。

岩洞湖Ⅰ遺跡は、大きく２つの尾根斜面とその間にある２つの沢を含めた範囲が遺跡として設定されており、このうち今回の調査箇所は北側の尾根斜面に位置する。一方で岩洞湖Ｈ遺跡は、尾根の間にある大きな沢を中心とし、その両側の尾根斜面を範囲としている。そのうち今回の調査箇所は、東側の尾根斜面に位置する。いずれの遺跡においても現状では湖面方向に張り出す尾根斜面となっている。標高は695m前後であり、湖面に隣接する斜面は浸食により崖が形成されている。この崖付近が調査地の大部分となる。調査前の現況は白樺を主とする山林である。

３　岩洞湖とその周辺遺跡

岩洞湖は、昭和35年に竣工した岩洞ダムによってせき止められた人造湖である。規模は、面積約624ha、周囲40kmにも及ぶ。岩洞ダムは、国営岩手山麓開拓建設事業（昭和16年～43年度）によって導水路や幹線用水路などとあわせて整備されたもので、盛岡市北部から滝沢市にかけての「岩手山麓地区」が用水受益地区となる。また、岩洞ダムは県営（岩手県企業局）による発電事業も行っており、岩洞第１発電所、岩洞第２発電所の２つの水力発電所がある。湖岸周辺は白樺林に囲まれたキャンプ場などがあり、観光目的として訪れる人も多い。とくに冬期にはワカサギ釣りの名所となっている。

さて、こうした岩洞湖の周辺には、現在多くの遺跡が存在している。これらは高橋昭治氏による1981年頃より行われた分布調査を嚆矢とするようである（高橋・武田・熊谷1993）。現在、岩手県遺跡地図においては、岩洞湖Ａ～Ｎ遺跡、大橋遺跡、小石川遺跡の計16遺跡が確認されている（岩手県遺跡情報検索システム平成28年度データによる）。これらの遺跡は、岩洞湖が造成された以降に発見されたものである。そのため、ダム湖造成前の発掘調査は行われておらず、また遺跡範囲については一部が水中に含まれると想定される（現状での遺跡範囲は汀線まで）。

岩洞湖周辺の遺跡名称は、小石川・大橋遺跡を除いて、岩洞湖の西端付近を範囲とする遺跡をＡ遺跡とし、時計回りに名付けられている（第４図）。おおよそＡ～Ｃ遺跡が西岸に、Ｄ～Ｈ遺跡が北岸に（大橋遺跡を含む）、Ｉ～Ｋ遺跡が東岸に、Ｌ～Ｎ遺跡（小石川遺跡を含む）が南岸に位置する。

このなかで内容がある程度明らかにされている遺跡は小石川遺跡と大橋遺跡のみであり、岩洞湖Ａ遺跡～Ｎ遺跡については、本格的な調査は行われておらず、踏査が中心となる。これらのなかには、後述するように縄文土器のほかに弥生土器、土師器や近世遺物なども採集することができるものの内容が判明するものは少ない。

小石川遺跡は、1980年８月に旧玉山村が調査主体となり、小石川遺跡調査団が発掘調査を実施した。調査経緯は武田良夫氏による石器片の発見を契機とする。調査の結果、旧石器時代後期の石器製作跡（ユニット）が確認された。遺物は、尖頭器をはじめ、石核、剥片などが出土している。大橋遺跡は、発掘調査ではなく、採取された資料の検討が中心となるが、細石刃の発見は貴重な資料となる。そのほか岩洞湖Ｅ遺跡の中には、旧小本街道の一里塚があり、道路痕跡も一部が残存している。この大橋一里塚は岩手県指定文化財となっている。

昨年度（平成28年度）には、同一事業で、岩洞湖Ⅰ遺跡の調査を行っているところである。今回の調査は、この継続となる。

第４図　岩洞湖周辺の遺跡

４　基本層序

調査区は、湖水による浸食をうけた範囲が主となるため、ほぼすべての調査区では基本層序は露出していた。また、浮石を主とする火山砕屑物が各層に含まれていたが、分析を行うことができなかった。したがって、各層がどの年代を示すのか定かではない。いずれ周辺も含めた地質調査が必要である。なお、岩洞湖Ⅰ遺跡と岩洞湖Ｈ遺跡の基本層序については、両者の間で欠落する層があるものの層相は共通していることから、同一の層名を付している。

［岩洞湖Ⅰ遺跡］

Ⅰ層　10YR3/1　黒褐色シルト　表土（腐植土）層。層厚10～15cmである。

Ⅰ'層　10YR5/1　褐灰色砂礫　擁壁工事による盛土。層厚は約20cm程度である。

Ⅱ層　10YR2/1　黒色シルト　旧表土か沢の水成堆積層。沢部にのみ存在する。層厚10cmである。

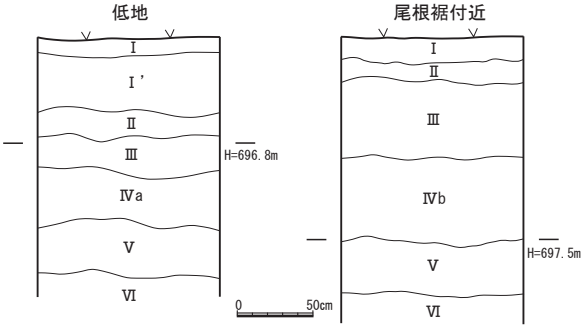
Ⅲ層　10YR5/4　にぶい黄褐色シルト　層厚は15cm前後である。

Ⅳa層　10YR3/2　黒褐色シルト　Ⅲ層のブロック（径２～３cm）を３％程度含む。低地部のみ存在する。層厚は40cmである。

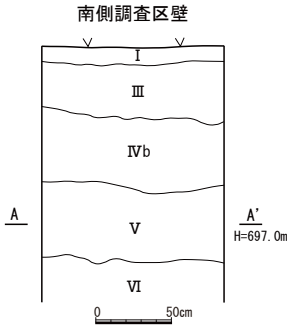
Ⅳb層　10YR5/6　黄褐色シルト　黄橙色（10YR8/8～8/7）の浮石状のブロック（径３～７mm）を10％含む。層厚は55cmである。

Ⅴ層　10YR6/8　明黄褐色シルト　木根、モグラ痕などの撹乱が多い。層厚は30～40cmである。

Ⅵ層　10YR6/6　明黄褐色礫混じりシルト～10YR7/4　にぶい黄橙色礫混じり砂　Ⅴ層との層界に厚さ２cmの褐灰色礫混じりシルト層が存在する。下端まで掘り下げて確認していないため層厚は不明である。



第５図　基本土層模式図（Ⅰ遺跡）



第６図　基本土層模式図（Ｈ遺跡）

［岩洞湖Ｈ遺跡］

Ⅰ層　10YR3/1　黒褐色シルト　層厚は10cm程度である。

Ⅲ層　10YR5/4　にぶい黄褐色シルト　層厚は30～40cmである。

Ⅳb層　10YR5/6　黄褐色シルト　浮石が混じる。層厚は40～50cmである。

Ⅴ層　10YR6/8　明黄褐色シルト　層厚は50cmである。

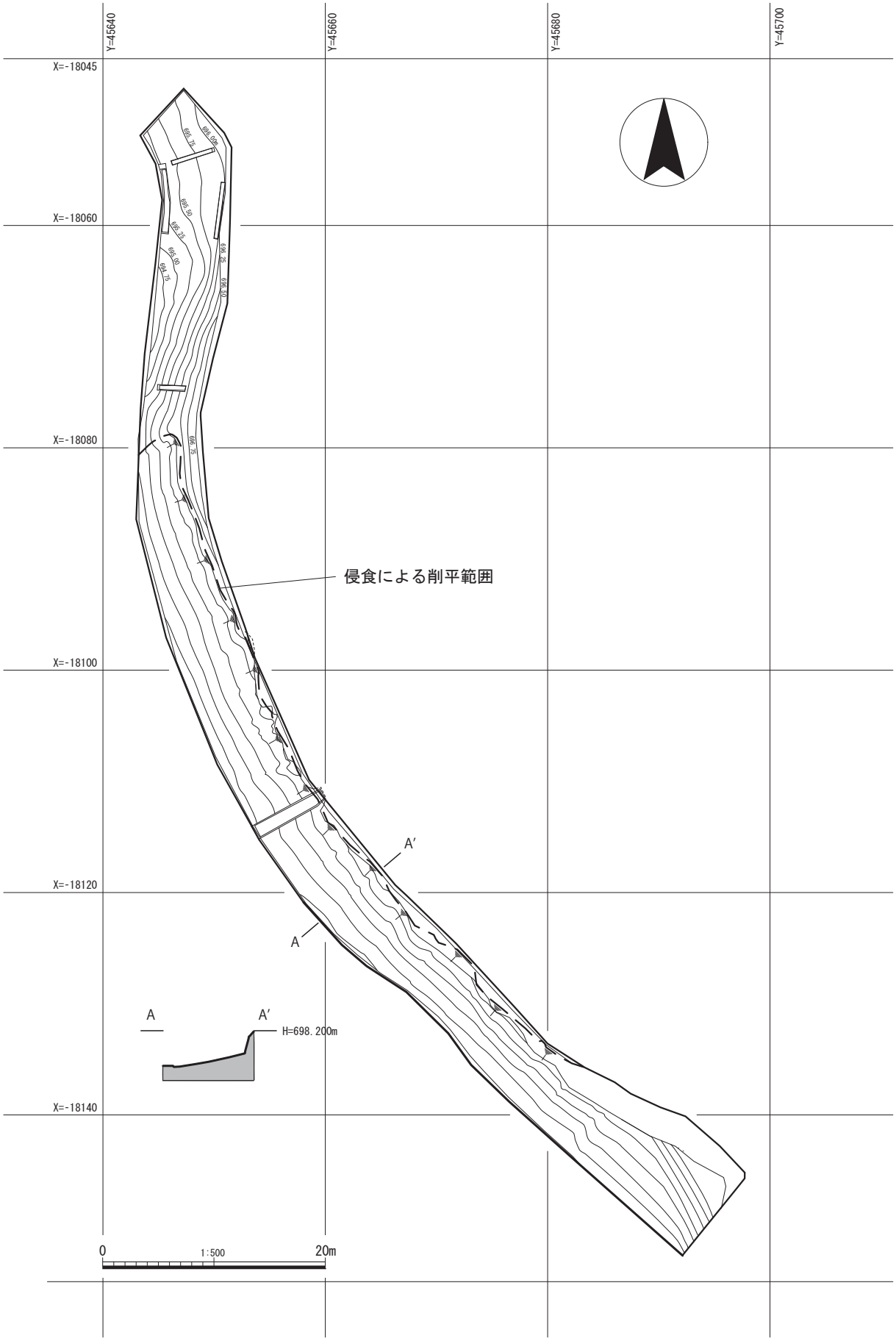
Ⅵ層　10YR6/6　明黄褐色～10YR7/4　にぶい黄橙色礫混じりシルト　層厚は不明である。

５　岩洞湖Ⅰ遺跡の調査

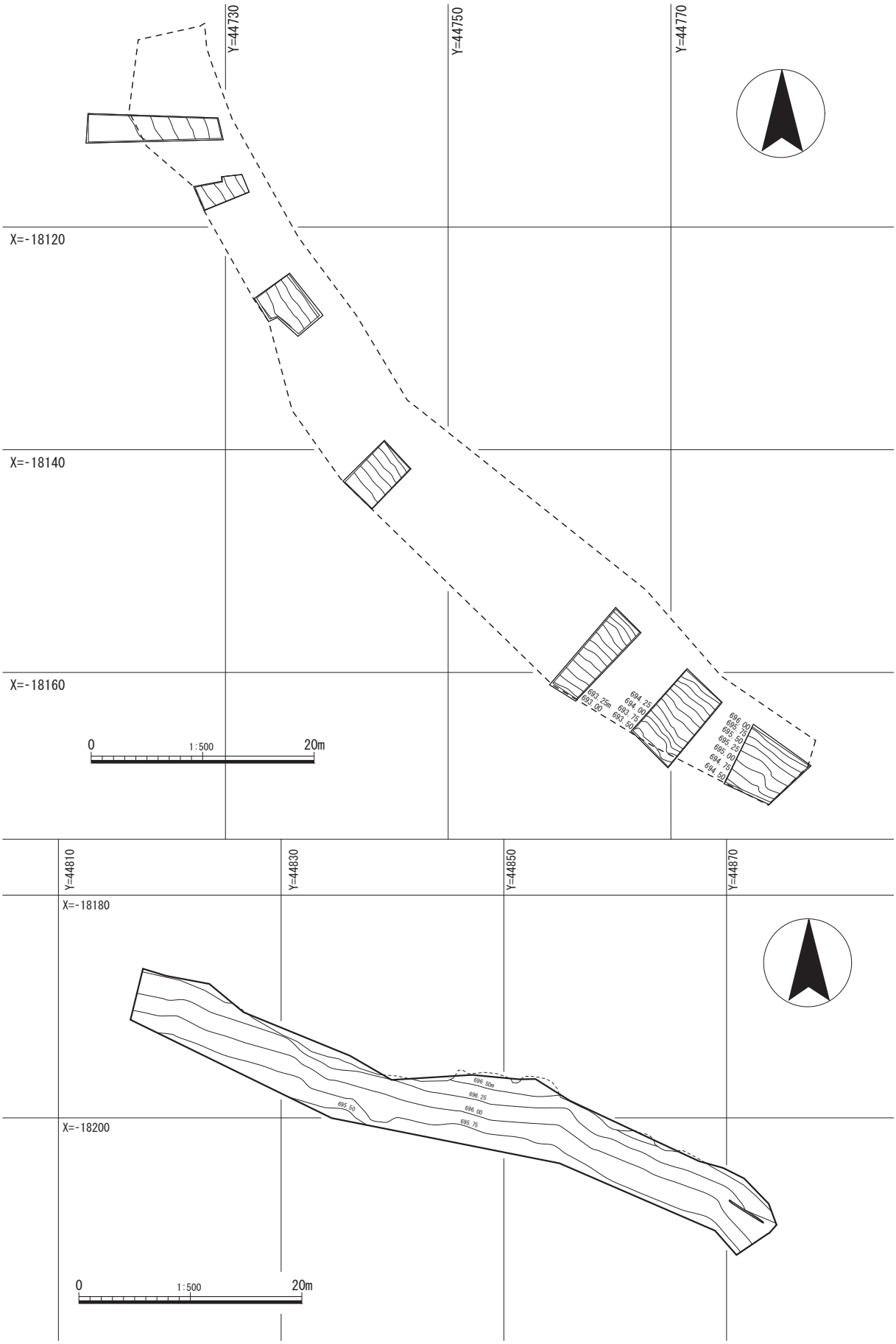
（１）概要（第７回）

遺跡は岩洞湖全体からみると、北東付近に位置している。昨年度は、今回の調査区の北側と南側を調査している。

今年度の調査区は、南に向かって張り出す尾根の西側斜面とその尾根の北側にある沢から構成される。この北端の沢以外は、湖水による浸食によって、各層が削平されている状況がうかがえた。とくに、調査区の中央部から南側にかけては、調査区内ではほぼⅤ層の下位からⅥ層の礫層が露出している状況であった。したがって、本来遺構があると想定されるⅡ～Ⅴ層で検出を行えたのはこの部分のみとなる。



第７図　岩洞湖Ⅰ遺跡遺構配置図



第８図　岩洞湖H遺跡遺構配置図

（2）遺構と遺物

調査区内からは遺構や遺物は出土しなかった。調査区外では遺跡範囲内においては、目視できる状態で土坑等が確認できる地点がある。

6　岩洞湖H遺跡の調査

（1）概要（第８図）

遺跡は、岩洞湖Ⅰ遺跡より直線距離で西に約１km離れた湖岸に位置する。遺跡範囲は、湖側に張り出す２つの尾根とその間の沢を含む。調査地はこのうち右側（東側）の尾根から続く斜面に相当する。調査区は大きく西側と東側の２箇所に分かれている。便宜的に西側調査区と東側調査区と呼称する。岩洞湖Ⅰ遺跡と同様に湖水による浸食のためほとんどの地点で削平が及んでいる。

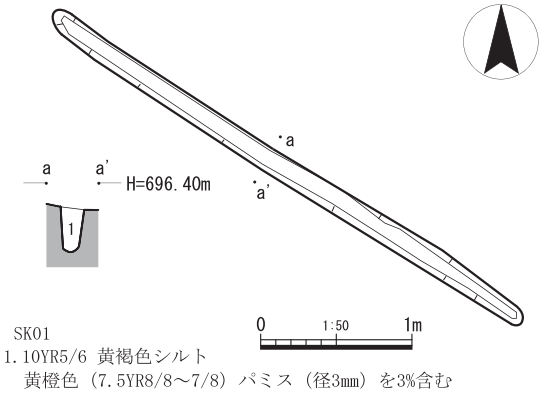
西側調査区は、すべての範囲が浸食された崖となる。調査する面と崖上との比高は２～３ｍであり、遺構の存在は無いであろうと予想された。そのためこの調査区では、全面的な調査ではなくトレンチ調査に切り替えて内容を把握することとしている。計７箇所のトレンチを設定し、その結果ほとんどのトレンチで、表層直下が礫層となった。これは岩洞湖Ⅰ遺跡との対比ではⅥ層かそれ以下の層となるため、大きく削平が及んでいたことが明らかとなった。したがって、遺構・遺物は発見できなかった。

東側調査区も浸食が及んでいるが、西側ほど落差があるわけではないため、念のため調査区内の表土を剥ぐ全面調査とした。その結果、Ⅵ層が露出するまで削平されている部分（中央付近）があるが、Ⅳｂ層～Ⅴ層（検出面）が両端に残存していた。このうち東端では、削平が及んでいるものの陥し穴状遺構が１基確認できた。

（2）遺構

ＳＫ０１（第９図）

東側調査区東端のⅤ層面で検出した陥し穴状遺構である。平面形は細い溝状を呈し、規模は長さ3.7m、幅18cm、検出面からの深さは30cmである。陥し穴状遺構としては浅いが、これは削平によるものの可能性が高い。また、平面形が直線的な点も陥し穴状遺構の底面付近の状況であれば整合する。そのため、この遺構は、わずかな痕跡が残存しているのみであり、詳細は不明となる。したがって時期も不明である。



第9図　SK01

（3）遺物（第10図）

検出した遺構や調査区内からは遺物の出土はなかったが、周辺には数多くの遺構が目視でき、遺物も散在している状況であった。波にさらわれているため本来の位置は不明であるが、これらを採集している。

今回は157点の遺物を採集した。内訳は、縄文土器が詳細不明分もあわせて63点、弥生土器が10点、土師器が90点である。このうち図示したのは30点である（第10図）。また、土器のほかに石器が２点（剥片を除く）、銭貨が１点、土製品１点がある。そのうち石器１点と銭貨１点を図示している。

１～６、17～24は縄文土器である。前者は縄文時代晩期に属すると考えられる破片である。特徴的な文様は、１の匹字文、３の口縁部の突起などがある。小破片のため型式を判断することが難しいが、晩期でも後半のものが多い傾向がある。17～24については、地文のみの胴部破片のため詳細は不

第10図　岩洞湖H遺跡採集遺物実測図

明である。７～16は弥生土器である。いずれも小破片であり、詳細は不明であるが、文様の特徴から前期に属する可能性がある。25～31は土師器で、うち27のみが須恵器である。25・26は、土師器・杯で口径16.5㎝、器高5.5㎝とやや大型である。調整は、外面がロクロナデ、内面が横位のミガキであるが、湖水に洗われているためか摩滅が激しい。黒色処理も施されていたと考えられるが、色は落ちている。底部切り離し技法は糸切りである。26も杯であるが、口径が13.4㎝とやや小さめである。調整方法は25と同様である。27は須恵器瓶類の底部片である。台形状の高台が貼付される。28～31は、土師器ロクロ調整の甕である。28は底部片、29・30は胴部片、31は口縁部片である。胴部下半部はヘラケズリが施される。32は、スクレイパーである。時期は不明である。33は、寛永通宝である。銅製で、いわゆる新寛永である。そのほか、図示していないが、台石や羽口片と想定される土製品も採集している。

７　総括

[岩洞湖Ⅰ遺跡]

２箇年に渡る岩洞湖Ⅰ遺跡においては、遺構や遺物ともに発見することができなかった。しかし、調査区外（とくに湖岸）においては、削平されているもののおおよそⅤ層からは土坑をはじめとする遺構を目視で確認することができる。これらは、遺構検出面から表土までが浸食によって削平されたため、露出したものである。この点とH遺跡の成果を考慮すると、今回の調査では本来遺構があった可能性があるが、湖水の浸食によって削平された可能性が高いと考えられる。

[岩洞湖H遺跡]

H遺跡としては初めての調査となるが、Ⅰ遺跡と同様に湖水による浸食された場所であった。しかし、東側調査区からは陥し穴状遺構の痕跡がわずかに確認できた。痕跡のみであるが、遺構を確認できた点は遺跡としての認識をする上では重要な成果といえる。

そのほか、調査区周辺の踏査を行ったところ、直径４ｍ程で円形を呈する遺構（住居跡か）が数棟、方形を呈する竪穴建物10等前後などが露出した状況で確認できた。そのほか陥し穴状遺構や土坑類なども確認できる。この面は、基本層序でみると、Ⅳa層かⅤ層に相当する面と考えられる。また、遺物も比較的豊富に表面採集できる。このように、大きく浸食された地点以外では遺構や遺物が存在することが判明した。この点は今後周辺の調査を行う上では貴重な情報となろう。

今回の調査においては、遺構・遺物ともわずかであったが、両遺跡とも調査区外には良好に遺構が残存していることが確認できた。これまであまり調査が行われていない地域であるが、採集された遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、寛永通宝などがある。かつて調査や採集された旧石器時代の遺物も含めると、各時代の遺物が確認できたことになる。現在では、本州一の厳寒な土地と称されるこの場所で、様々な時代の痕跡が確認できたことは貴重な発見といえ、これらの地域に注意を向ける必要があることを認識させる上では重要な調査となった。また一方で毎年湖水による浸食によって遺構が少しずつ失われている。いずれ何らかの対処が必要と思われる。

なお、本遺跡に関わる報告はこれを以てすべてとする。

引用・参考文献

高橋昭治・武田良夫・熊谷常正　1993「岩手県岩洞湖大橋遺跡の石器群－北上山地の細石刃資料」『岩手考古学』第５号
小石川遺跡調査団　1982『小石川遺跡』文化財調査報告書第９集
村木　敬　2016「（1）岩洞湖Ⅰ遺跡」『平成28年度埋蔵文化財調査報告書』（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第676集

第１表　岩洞湖Ｈ遺跡採集遺物観察表

掲載No.	登録番号	種類	器種	部位	特徴	時期
1	A001	縄文土器	鉢	口縁部	匹字文、LR縄文、内面にコゲ	晩期（大洞Ａ式）
2	A002	縄文土器	鉢	胴部	三叉文、LR縄文	晩期（大洞BC式）
3	A005	縄文土器	鉢	口縁部	突起	晩期（大洞C2式）
4	A004	縄文土器	鉢	口縁部	１と同一破片か	晩期（大洞Ａ式）
5	A037	縄文土器	壺	胴部	LR縄文	晩期
6	A018	縄文土器	深鉢	胴部	LR縄文	晩期
7	A008	弥生土器	壺	胴部	平行沈線	前期
8	A014	弥生土器	鉢	胴部	平行沈線	前期
9	A013	弥生土器	鉢	胴部	２条の平行沈線	前期
10	A012	弥生土器	鉢	胴部	２条の平行沈線	前期
11	A009	弥生土器	壺	胴部	沈線	前期
12	A010	弥生土器	壺	胴部	２条の平行沈線	前期
13	A017	弥生土器	甕	胴部	LR縄文	前期
14	A019	弥生土器	甕	胴部	撚糸L	前期
15	A038	弥生土器	甕	胴部	LR縄文	前期か
16	A007	弥生土器	鉢	底部	LR縄文	前期か
17	A030	縄文土器	深鉢	口縁部	LR縄文	－
18	A035	縄文土器	深鉢	胴部	沈線による楕円文	後期初頭
19	A041	縄文土器	深鉢	胴部	LR縄文	－
20	A003	縄文土器	深鉢	口縁部	LR縄文	－
21	A006	縄文土器	深鉢	底部	LR縄文	－
22	A011	縄文土器	深鉢	口縁部	波状口縁	－
23	A023	縄文土器	深鉢	胴部	LR縄文	－
24	A036	縄文土器	深鉢	胴部	LR縄文	－
25	A001	土師器	杯	口縁～底部	外面：ロクロナデ、内面：横位ミガキ 内面の黒色処理は消失	9世紀後半～10世紀
26	A003	土師器	杯	口縁部	外面：ロクロナデ、内面：横位ミガキ	9世紀後半～10世紀
27	A008	須恵器	瓶類	底部	外面：ロクロナデ、高台貼付け	9世紀後半～10世紀
28	A009	土師器	甕	底部	外面：ロクロナデ、底部：糸切り	9世紀後半～10世紀
29	A012	土師器	甕	胴部	外面：縦位ヘラケズリ 内面：横位ヘラナデ	9世紀後半～10世紀
30	A011	土師器	甕	胴部	外面：縦位ヘラケズリ 内面：横位ヘラナデ	9世紀後半～10世紀
31	A007	土師器	甕	口縁部	外面：ロクロナデ	9世紀後半～10世紀
32	D001	石器	スクレイパー		長さ:7.5cm　幅:3.8cm　厚:1.2cm	縄文時代か
33	G001	銭貨	寛永通宝		径2.4cm　孔径0.6cm(方形)	近世

岩洞湖Ⅰ遺跡　遠景　（西から）

岩洞湖Ⅰ遺跡　調査区北端　全景1　（北から）

写真図版１　調査区遠景・全景(1)

岩洞湖Ⅰ遺跡　調査区中央　全景2　（北から）

岩洞湖Ⅰ遺跡　調査区南端　全景3　（南西から）

写真図版２　調査区全景（2）

岩洞湖H遺跡 東側全景（北西から）

岩洞湖H遺跡　西側全景　（北西から）

写真図版３　調査区全景（３）

SK01　平面　（西から）

SK01　断面　（西から）

調査区外住居確認状況　（南西から）

岩洞湖H遺跡周辺の状況1　（北東から）

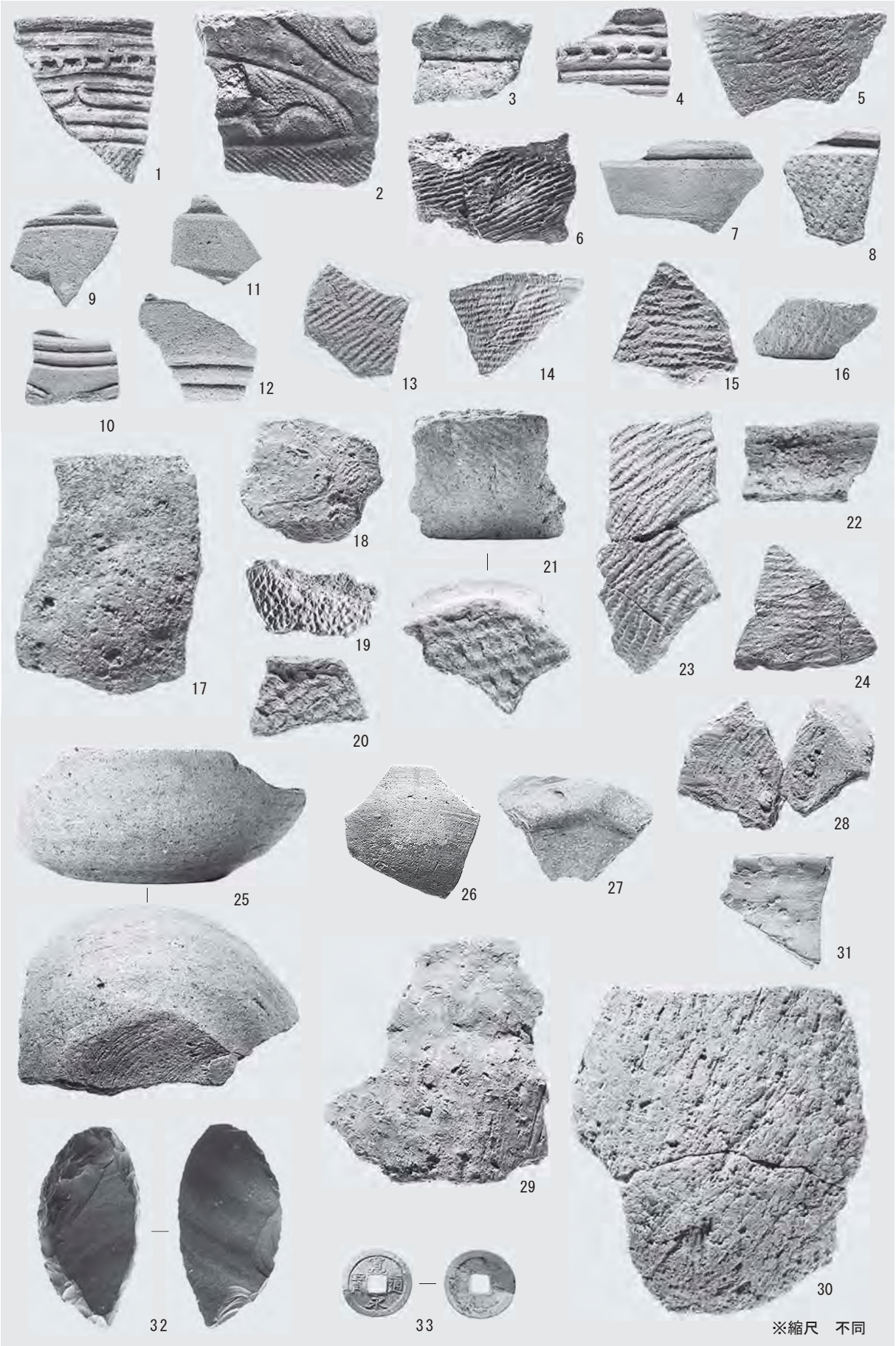
岩洞湖H遺跡周辺の状況2　（東から）

岩洞湖H遺跡周辺の状況3　（南から）

岩洞湖H遺跡周辺の状況4　（東から）

岩洞湖H遺跡周辺の状況5　（北東から）

写真図版４　土坑・周辺の状況


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
※縮尺　不同

写真図版５　採集遺物

（２）和野新墾神社遺跡

所　在　地	下閉伊郡田野畑村和野502-7ほか	**遺跡コード・略号**	KG22-1262・WNJ-17
委　託　者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	**調査対象面積**	1,000㎡
事　業　名	三陸沿岸道路	**調査終了面積**	1,000㎡
発掘調査期間	平成29年４月10日～４月27日	**調 査 担 当 者**	杉沢昭太郎・趙　哲済・河村美佳

１　調査に至る経過

和野新墾神社遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（田野畑南～尾肝要）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成28年11月21日付け国東整陸一調第49号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成28年11月28日～30日にわたり試掘調査を行い、平成28年12月９日付け教生第1321号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

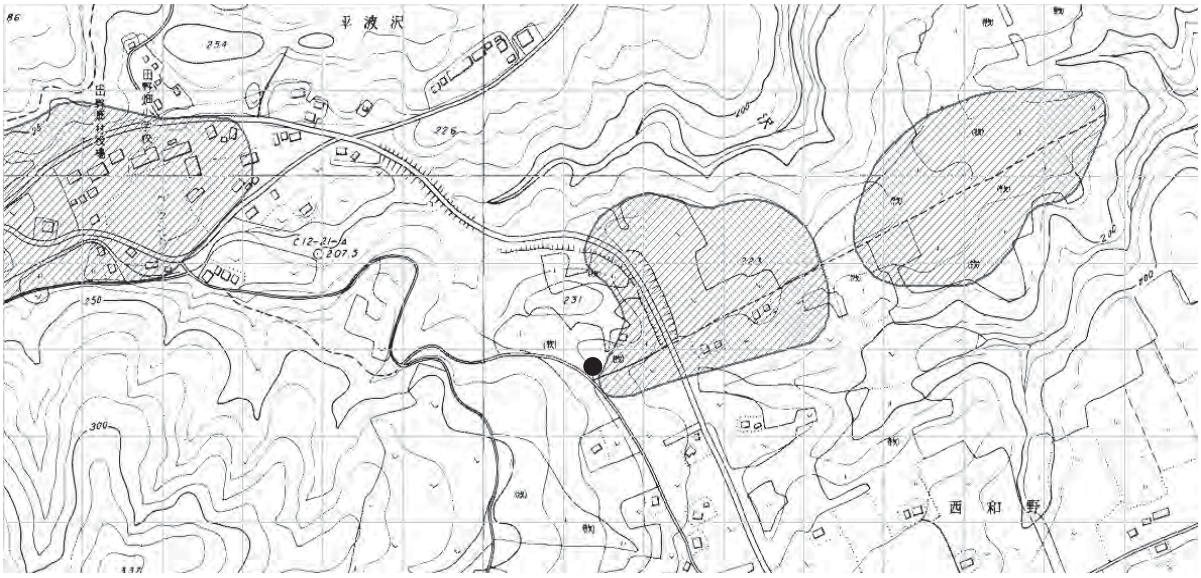
その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成29年４月３日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

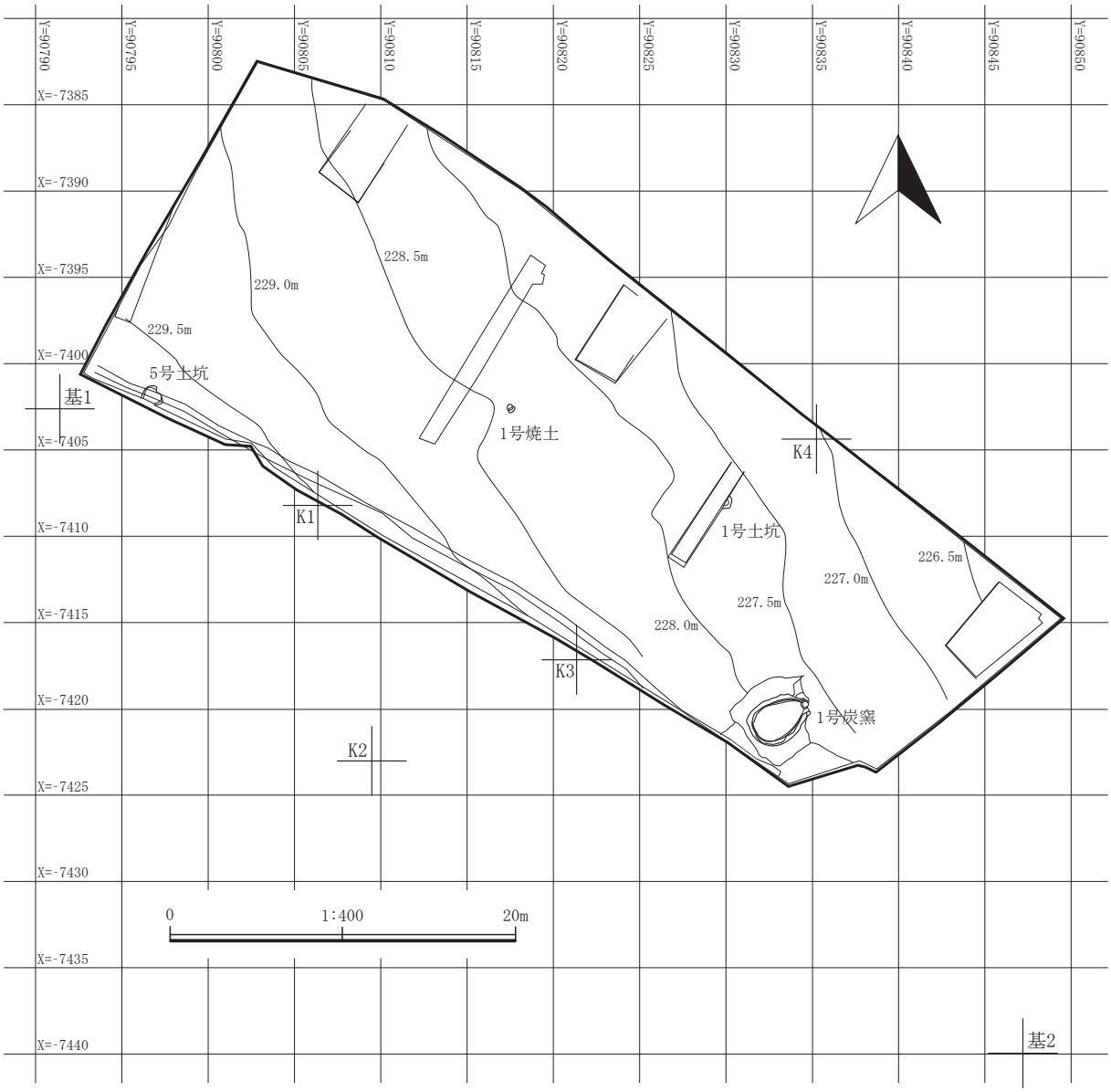
1：25,000　田野畑・小本

第1図　遺跡位置図

（２）和野新墾神社遺跡



第２図　調査地点（1/10,000　上が北）



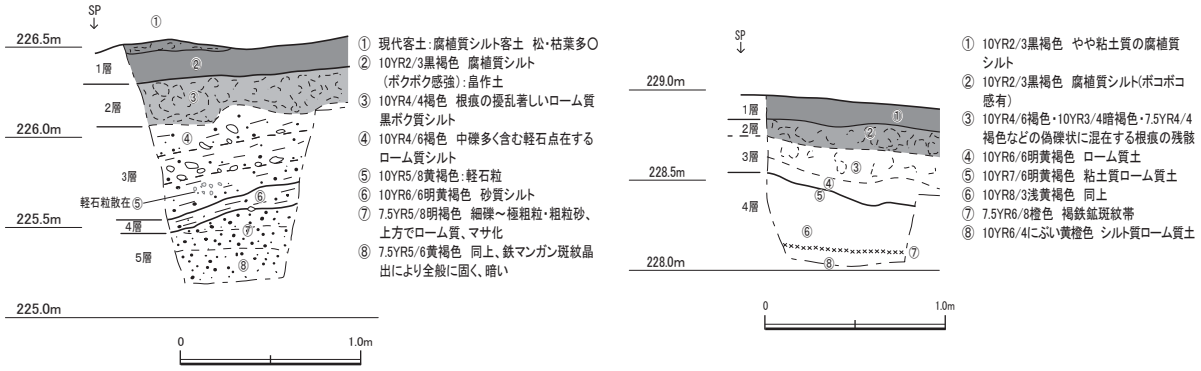
第３図　遺構配置図

２　遺跡の位置と立地

調査地は最上位の海成段丘である水無面のなだらかな丘陵斜面にあり（米倉1966）、北西隅が高く海抜230.3m、南東隅が低く海抜226.5mである。

３　基本層序

本調査区の南・東・北の３壁面に沿って深さ50～60cmのトレンチを入れ、要所で0.9～1.3mの深掘りを行い、壁面で地層を観察して５層に大別した。以下、遺跡の地名を冠して本調査の地層番号とし、上位より述べる。



第4図　基本土層

和野１層（または和野17-1層、または和野新墾神社前17-1層）は、現代の畠作土層である。黒褐色（10YR2/3）腐植質シルトからなり、黒ボクの特徴であるボクボク感がある。層厚は15～20cmで、東側道路沿いでは30cmと厚くなる。

下限には明瞭な加工痕がある。北東部の加工痕である線状の耕作痕跡の方向は、緩く弧を描くN79°～52°W方向が１条と、これにほぼ直交し、かつ南東側へ放射するように伸びるN69°～79°E方向のものが多数と、N17°W方向が１条あり、北東部にはN89°W方向で幅約50cmの溝状のものある。これらは、調査地の東側に隣接する畠の畝方向とほぼ一致する。１層の岩相は、本来、黒ボクとして分布していたものが、後世に耕起されたことにより、作土層に転化したものであることを示唆する。

東側道路沿いでは１層の上位に現代客土が最大15cm程度載る。現代客土は根、枯葉、枯枝、粘土偽礫を含む腐植質シルトの、いわゆる腐葉土からなる。東側の道路整備時に、残土として積み上げられたと考えられる。

和野２層は黒ボク質ローム質シルトからなるが、本層を特徴づけるのは根痕などによる著しい生物擾乱である。層厚は10～30cmで、下限は不明確であり、著しい生物擾乱の下限をもって暫定的に区分する。したがって、２層は本来、下位層に由来する。倒木痕などでは40cmを超える厚さのところもある。

和野３層は礫を多く含み、軽石が散在～点在するローム質シルトからなり、地形に平行する弱いラミナが認められる。土色は上半が褐色（10YR4/6）、下半が黄褐色（10YR5/8）である。礫は中礫の角礫が主体で、ラミナに沿って並ぶものもある。この岩相および２層との関係から、和野３層は丘陵緩斜面の斜面流出した堆積物が徐々に風成相に変化したものと推定できる。礫種は花崗岩、花崗閃緑岩、ホルンフェルスなどである。本地域の複雑な中生代基盤層を反映しているのであろう。

調査区北部の３層は、腐植質のローム質土に岩相変化し、根痕により攪拌され、腐植で汚れた上半（褐色10YR4/6・暗褐色10YR3/4・褐色7.5YR4/4が混在）と根痕の少ない下半（明黄褐色10YR6/6）に分けられる。軽石粒や白色物質（長石や火山豆石か？）を散在～点在するほか、花崗岩類の大～巨礫の亜角礫を少なからず含んでいる。

以上の特徴と層序関係から、３層は八戸浮石層の相当層であり、堆積期に斜面流出が並行して発生していたと考えられる。

和野４層は、明黄褐色～浅黄褐色（10YR7/6-8/3）粘土質ローム質土からなる。層厚は50cm以上である。確認できる最下位層準では、にぶい黄橙色（10YR6/4）でシルト質になる。下半部に鉄・マンガン斑紋の薄い集積帯がある。東南部では薄く、層厚10cm前後の明黄褐色（10YR6/6）砂質シルトとなり、下位層を不整合で覆うが、東北隅では尖滅する。

和野５層は、明褐色（7.5YR5/8）～黄褐色（7.5YR5/6）細礫～極粗粒・粗粒砂からなる真砂土であり、上方細粒化してローム質～シルト質となる。層厚は40cm以上であり、基盤の花崗岩類が風化し真砂化したものと考えられる。

４　調査の概要

（１）　遺構

縄文時代の土坑が１基、時期不明の土坑１基、焼土１基と現代の炭窯１基が見つかっている。

１号土坑

［位置］調査区のほぼ中央に位置する。［検出面］３層上位の１層基底面。［規模（断面情報のみ）］南北幅（開口部）0.8m、長さ1.3m、深さ0.3mで、２～３層を掘り下げている。［形状］平面楕円形。［覆土・堆積状況］基底にある３層（２層？）由来の粗粒～中粒火山砂質泥からなる加工時層を覆って、中掫浮石層が降下堆積する。

中掫浮石層は、下部の粗粒火山灰（火山砂）と上部の細粒火山灰からなる。下部は中粒～粗粒火山砂で上方に細粒化し、上部のシルトサイズの細粒火山灰に連続移化する。層相の移化は比較的明瞭である。［壁・底面の形状］壁面は緩く傾き、底は少し傾くも平坦である。［重複関係］無し。［（検出面・覆土から）帰属時期］中掫浮石降灰期直前の縄文時代前期（6200年前）［その他の所見］並行ラミナが認められず、ワン掛け法による鉱物の抽出時に濁りが強い（風化している）などの特徴から、風成の降下テフラとみられる。遺物は出土せず。

５号土坑

［位置］調査区北側に位置する。［検出面］３層上位。［規模］幅0.9m、長さ1.2m、深さ0.2mで南側は調査区外へ延びている。［形状］平面不整円形。［覆土･堆積状況］炭粒や明黄褐色シルトブロック、暗褐色シルトブロックを不規則に含む人為堆積。［壁･底面の形状］概ね平坦な底面から外傾して立ち上がっている。［重複関係］現在の水道管よりも古い。［帰属時期］不明である。［その他の所見］無し。

１号焼土

［位置］調査区中央やや北側に位置する。［検出面］２層。［規模］20×22㎝。焼土の厚さ２㎝。［形状］平面は不整な円形である。［覆土・堆積状況］黒褐色シルトの中に焼土粒が含まれる状態。［重複関係］無し。［帰属時期］検出された地層面から縄文時代と考えている。［その他の所見］無し。

１号炭窯

現代（戦後）の炭窯である。埋蔵文化財の対象時期ではないが、本県の主要な産業でありながら詳細な記録が残されないままとなっているため図と写真だけは記載することとした。

（２）　遺物

１・２は縄文土器の体部片、３は底部の破片である。特徴については観察表にまとめた。

５　まとめ

本遺跡は西から東へとのびる丘陵（標高228m前後）に立地し、遺跡北側には深い谷が形成されている。現況は多くを畑地が占め、他に草地、道路に沿って樹木が立ち並んでいた。

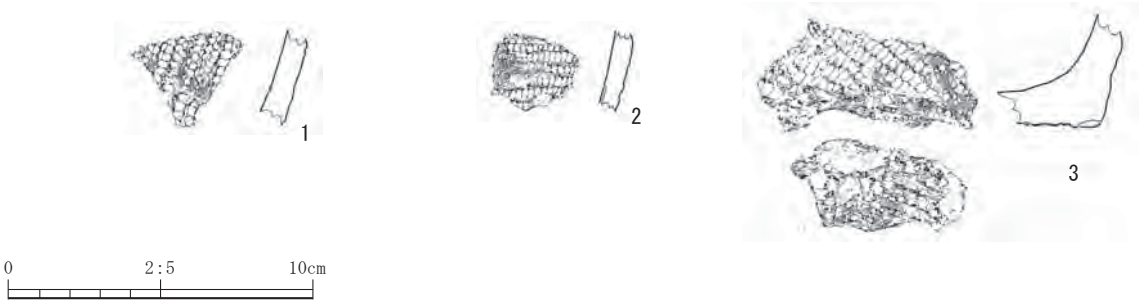
検出された縄文時代の土坑からは、中掫火山灰とみられる火山灰が堆積していたことから縄文時代前期に位置付けられる。焼土もこの土坑の近くから見つかっているが火山灰は含んでいない。出土遺物は縄文土器が調査区西側から少量出土しただけであった。

今回の調査区は遺跡の西端部にあたる。遺構遺物が多くなかったのも遺跡縁辺部という立地によるものと考えている。

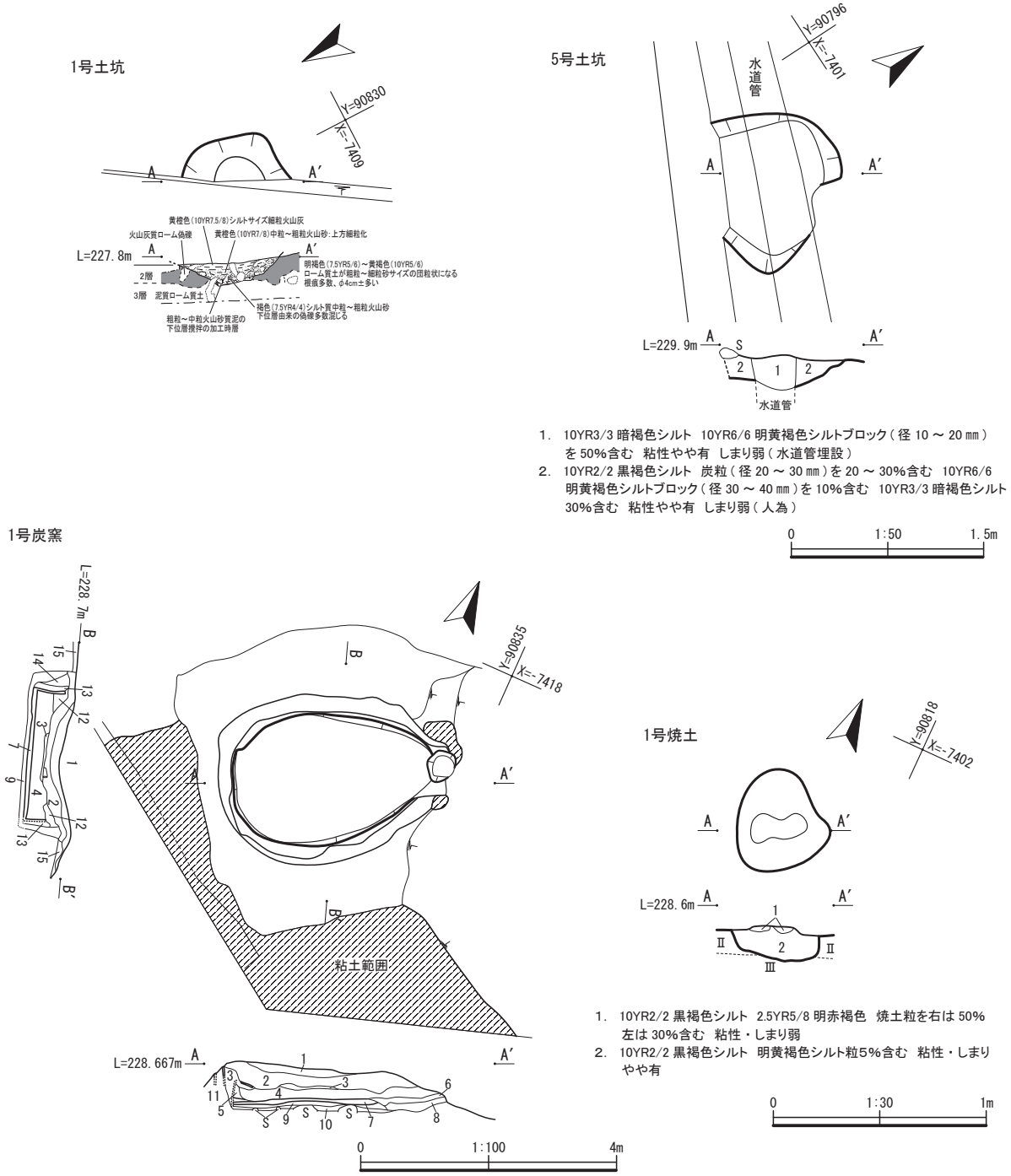
なお、和野新墾神社遺跡平成29年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。

第１表　縄文土器観察表

掲載番号	出土地点・層位	器種	残存部位	文様・装飾・原体・付着物など	胎土	その他
1	調査区中央の北側　１～２層	深鉢	胴部	ＲＬ	砂微量	
2	調査区中央　１層	深鉢	胴部	ＬＲ		
3	調査区南側の西　１層	深鉢	底部	ＲＬ、網代底か	小石多	



第５図　出土遺物


1号土坑
Y=90830
X=-7409
A
A′
黄橙色(10YR7.5/8)シルトサイズ細粒火山灰
火山灰質ローム偽礫
黄橙色(10YR7/8)中粒～粗粒火山砂:上方細粒化
L=227.8m
明褐色(7.5YR5/6)～黄褐色(10YR5/6)
ローム質土が粗粒～細粒砂サイズの団粒状になる
根痕多数、φ4cm±多い
2層
3層 泥質ローム質土
褐色(7.5YR4/4)シルト質中粒～粗粒火山砂
下位層由来の偽礫多数混じる
粗粒～中粒火山砂質泥の
下位層攪拌の加工時層
5号土坑
水道管
Y=90796
X=-7401
L=229.9m
S
1
2
水道管
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック（径 10 ～ 20 ㎜）を 50%含む 粘性やや有 しまり弱（水道管埋設）
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 炭粒（径 20 ～ 30 ㎜）を 20 ～ 30%含む 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック（径 30 ～ 40 ㎜）を 10%含む 10YR3/3 暗褐色シルト 30%含む 粘性やや有 しまり弱（人為）
0
1:50
1.5m
1号炭窯
L=228.7m
B
B′
Y=90835
X=-7418
粘土範囲
L=228.667m
0
1:100
4m
1号焼土
Y=90818
X=-7402
L=228.6m
Ⅱ
Ⅲ
0
1:30
1m
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 2.5YR5/8 明赤褐色 焼土粒を右は 50% 左は 30%含む 粘性・しまり弱
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 明黄褐色シルト粒5%含む 粘性・しまりやや有
1. 10YR3/2黒褐色シルト 草木根80%含む 粘性やや有 しまり弱(自然堆積)
2. 10YR3/3暗褐色シルト 焼土粒5% 炭粒5% 空き缶含む 粘性・しまりやや有(人為)
3. 10YR2/1黒色 炭粒径2～5㎜が主体 粘性・しまり弱
4. 5YR5/8明赤褐色焼土 にぶい黄橙色(10YR7/4)粘土ブロック30%含む 粘性弱 しまりやや有
5. 10YR5/1褐灰色シルト 炭粒30%含む
6. 10YR6/1褐灰色土質不明 小石10%含む 粘性弱 しまり強
7. 10YR2/1黒色土質不明 中小石70%含む 粘性弱 非常に硬くしまっている(床面) 土ではない素材かもしれない
8. 2.5YR5/8明赤褐色焼土 粘性弱 しまり強
9. 10YR2/2黒褐色シルト 炭粒50%含む 粘性・しまりやや有
10. 10YR4/4褐色シルト 粘性・しまりやや有 中小石の礫を5%含む
11. 10YR3/4暗褐色シルト 焼土20% 炭粒5%含む 粘性・しまりやや有
12. 10BG6/1青灰色シルト 暗褐色シルト40%含む 炭粒5%含む 粘性弱 しまり強
13. 5G4/1暗緑灰色シルト粘土 7層に接する部分は黒色となっている 粘性弱 しまり強
14. 2.5YR4/8赤褐色焼土 粘性弱 しまり強 壁を焼いたもの
15. 10YR3/2暗褐色シルト 粘性・しまりやや有

第６図　土坑、焼土、炭窯

調査区全景（南西から）

基本土層断面調査区北端（西から）

1号土坑平面

1号土坑断面（東から）

5号土坑断面（南から）

写真図版１　調査区全景、基本土層、土坑

1号炭窯平面（東から）

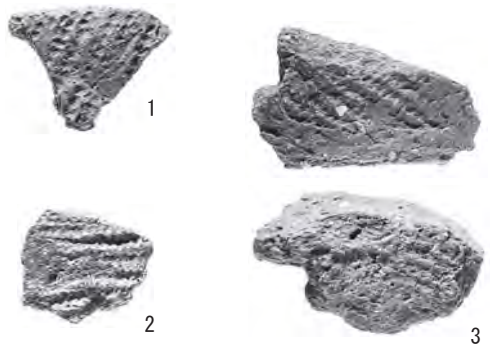
1号炭窯断面（西から）

1号焼土平面（南から）

調査区全景（南から）

1号焼土断面（南から）

調査前現況（南西から）



写真図版２　炭窯、焼土、出土遺物ほか

（３）北野（きたの）Ⅻ遺跡

所　在　地	久慈市侍浜町堀切第10地割、 久慈市夏井町鳥谷第４地割ほか	遺跡コード・略号	JG00-1088・KNⅫ-17
		調査対象面積	1,120㎡
委　託　者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査終了面積	1,120㎡
事　業　名	三陸沿岸道路	調査担当者	福島正和・舩渡耕己
発掘調査期間	平成29年９月19日～10月13日		

１　調査に至る経過

北野Ⅻ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（久慈北道路）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年５月27日付け国東整陸二工第1023号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年４月10日～11日に試掘調査を行い、平成25年５月27日付け教生第314号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成29年４月３日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

２　遺跡の位置と立地

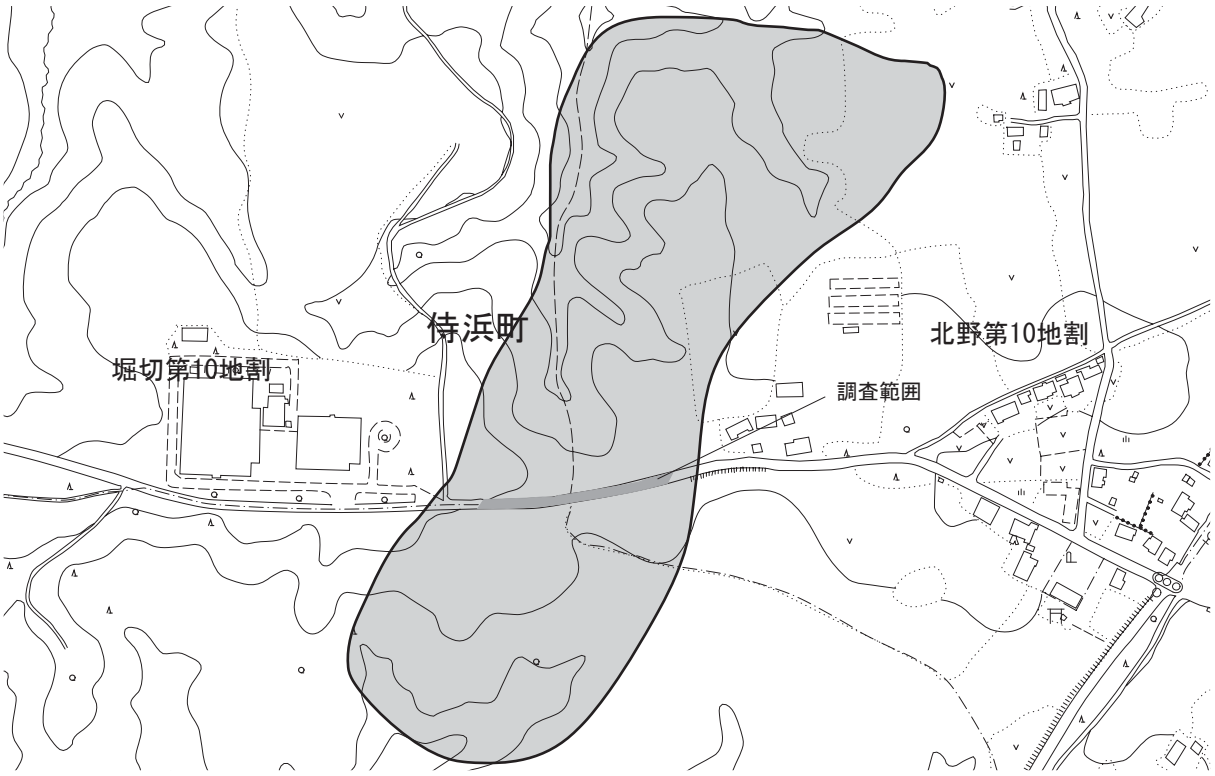
北野Ⅻ遺跡の所在する久慈市は岩手県北東部に位置し、東側は太平洋に面する。遺跡は現在のJR八戸線侍浜駅東約３km、侍浜町と夏井町の地区境に所在する。遺跡は標高170～180mの段丘上に立地しており、周りを山林や牧草地で囲まれている。今回の調査範囲は侍浜地区から洋野町大野地区へと続く久慈市道北野線の道路と直交する三陸沿岸道路の事業用地が重なる箇所である。この調査範囲の北側および南側の隣接地については平成24・25年度、久慈市教育委員会によって発掘調査がおこなわれており、縄文時代の陥し穴等の遺構が検出され、縄文土器等が出土している。

３　基本層序

調査範囲内における基本層序は図示（第３図）したとおりである。調査前まで道路として利用されていたため、調査直前の現況地盤はアスファルト路面敷きである。旧地形において標高のやや高かっ

1：25,000　陸中中野・久慈

第１図　遺跡の位置



第２図　調査位置（1：12,000）

たと推測される調査区東西両端部が大きく削平を受けている。しかし、調査区中央部は微地形において比較的窪んでいたようで、攪乱を一部で受けているもののⅡ層以下の地層が良好に残存する。Ⅱ・Ⅲ層は黒ボクで、Ⅳ層はこれらの漸移層である。Ⅲ層では弥生土器片が認められ、Ⅳ～Ⅵa層では縄文時代早期～前期の遺物が出土した。Ⅵb層は数点の遺物は認められたが、それより下層は遺物出土はなく地山である。Ⅶ層で十和田南部火山灰を確認した。

４　調査の概要

（１）遺構

今回の調査では縄文時代の陥し穴状遺構３基、土坑１基、焼土遺構１基、時期不明の柱穴状土坑３個を検出した。陥し穴状遺構は調査区中央の谷部に偏在し、いずれも細長い平面形態のものである。Ⅱ層より上位からの掘り込みであると推測するが、調査ではⅤ層上面で検出した。

陥し穴状遺構１（第４図、写真図版３）

３基の陥し穴状遺構のうち最も西に位置する。概ね東西方向に長く伸びる。短軸の断面形態は漏斗状で、底面に向けて先細りする。埋土は、上位に暗褐～黒褐色シルトが堆積しており、中～下位は暗い色調のシルトと明るい色調のシルトが概ね互層となっている。遺構壁面の崩落や遺構外からの自然流入が繰り返された自然堆積による埋没であると判断できる。埋土上層の黒褐色シルトより縄文土器の細片が出土したが、縄文時代早期末～前期初頭の所産であり、埋没過程で混入したと思われる。遺構の規模や形態から縄文時代中期以降の陥し穴であるとみられる。

陥し穴状遺構２（第４図、写真図版３）

３基の陥し穴状遺構のうち中央に位置する。概ね東西方向に長く伸びる。短軸の断面形態は逆三角形で、底面に向けて先細りする。埋土は最下層に黒褐色シルトの堆積が認められ、それより上位は締まりの無い遺構壁の崩落土によって自然埋没したと判断した。遺物は出土しなかったが、規模や形態

から縄文時代中期以降の陥し穴であるとみられる。

陥し穴状遺構３（第５図、写真図版３）

３基の陥し穴状遺構のうち最も北東に位置し、土坑２に切られる。調査区北端の南北方向の層序確認トレンチ内で検出した。概ね東西方向に長く伸びる。短軸の断面形態は逆三角形で、底面に向けて先細りする。埋土は上位に黒褐色や暗褐色シルトの堆積が認められ、それより下位は締まりの無い灰黄褐色シルトが主体である。比較的早い段階で周囲の遺構壁面が崩落して埋没に至ったと考えられる。遺物は出土しなかったが、規模や形態から縄文時代中期以降の陥し穴であるとみられる。

土坑１（第５図、写真図版３）

調査区の東側に位置する。Ⅵ層以下の褐色ローム面で平面形を確認した。周辺には攪乱も多く、遺構上面も幾分かの攪乱を受けている。平面形態は概ね南北方向に長軸を有する楕円形を呈し、底面に向かって窄まる。埋土は上下２層に区分でき、暗褐色シルトを主体とする。下層には褐色ローム起源の小ブロックが少量混じっている。埋土最上層より縄文土器片が出土したが、遺構に伴わない可能性が高い。詳細な時期・性格ともに不明だが、埋土の特徴から縄文時代の遺構であると考えられる。

焼土遺構１（第５図、写真図版３）

調査区中央の谷部の遺物包含層（Ⅵ層）を除去した面で検出した。竪穴住居等に伴う地床炉も想定したが、床面は確認できなかった。検出層位より縄文時代早期の可能性が考えられる。

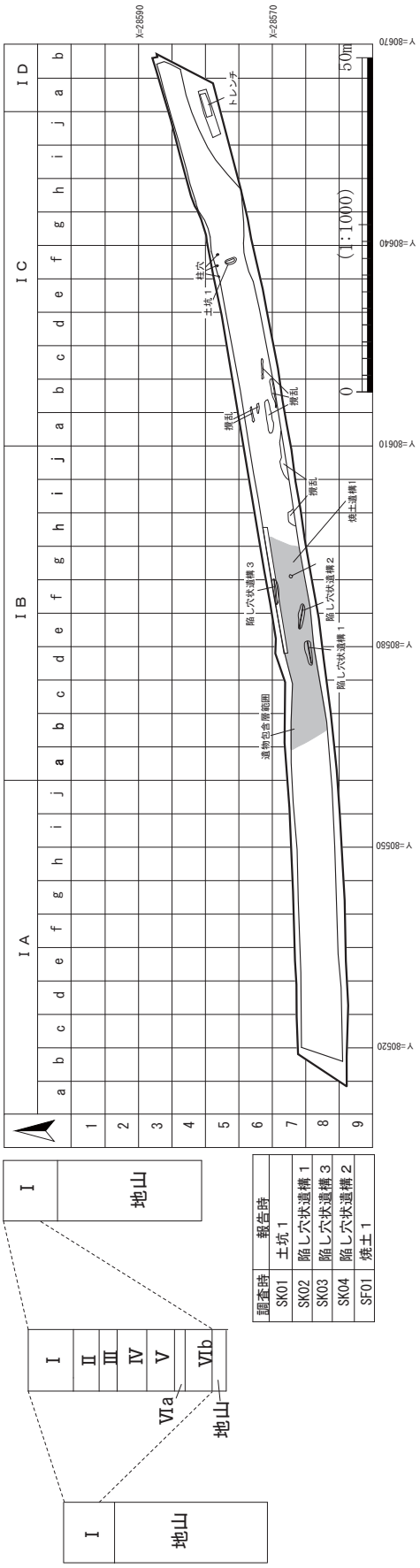
柱穴１～３（第３図）

調査区東側に位置する時期不明の柱穴３個で、底面付近のみ残存する。いずれも直径20～30cm、深さ12～20cm、埋土は暗褐色シルトあるいは黒褐色シルトである。

（２）遺物

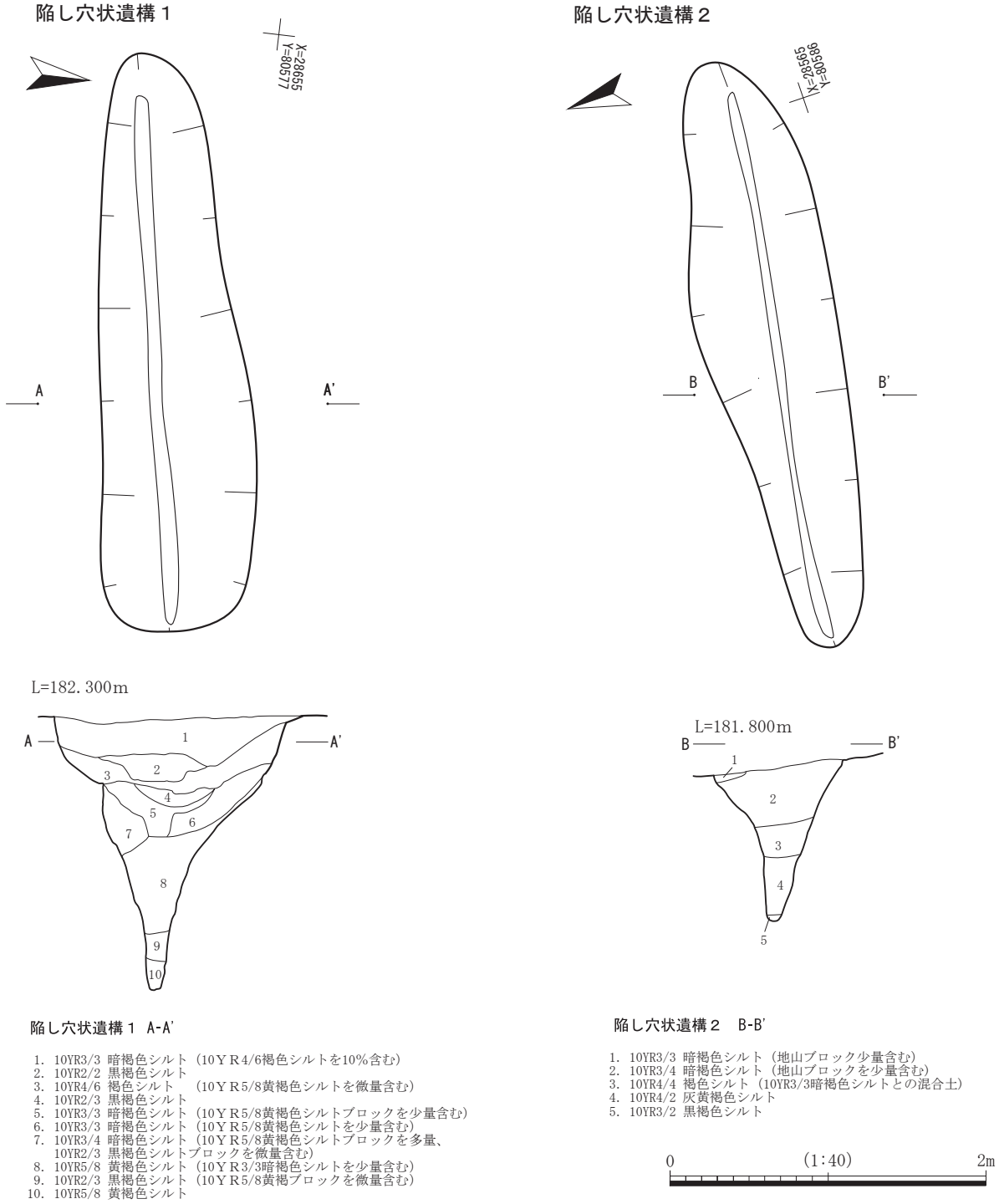
土器（第６図、写真図版４・５）

出土した土器は総量で小コンテナ１箱、1510.5gである。１～20は縄文土器、21～34は弥生土器である。１は縄文時代早期中葉の口縁部の極細片である。端部に連続する縦位の貝殻腹縁文が認められる。２も縄文時代早期中葉の土器口縁部細片である。口端部には斜位に刻みが連続し、口縁部外面には角棒状の工具端部による刺突が横向きに施されている。さらにその文様の下には微かに貝殻腹縁文が横位に認められる。３～５は外面に貝殻条痕を施され、４・５は同一個体の可能性がある。縄文時代早期後葉のムシリⅠ式相当の土器であると考えられる。３は微隆起線文が横位に１条認められる。６・７は同一個体の口縁部片である。胎土には繊維を多く含む。８は横方向に平行



第３図　遺構配置･基本層序模式図

する幅広の凹線が認められる体部片である。９は器表面が丁寧にミガキ調整されている。10は外面に貝殻条痕が施された体部片である。これら８～10は縄文時代早期の土器片であるとみられる。11～13は同一個体の土器片である。11・12は口縁部片で、外方へ折り返した口縁部は肥厚し、端部は端面を有する。口縁端部やや内面側に撚糸の圧痕が認められる。14～16は地文のみの口縁部片である。17～19は早期末～前期初頭の土器片で縄の束を回転させた地文を有する。胎土に少量の繊維を含む。20は羽状縄文が認められる前期初頭頃の土器であると考えられる。21～26は器表面に沈線や刺突による文様を有する弥生土器片である。21は２条の平行する直線の沈線の下位に山形あるいは波状に連続する複数の沈線が認められ、22は水平方向の沈線と山形の沈線が認められる。23・24は交互刺突文がみら



陷し穴状遺構１ A-A'

1. 10YR3/3 暗褐色シルト（10ＹＲ4/6褐色シルトを10％含む）
2. 10YR2/2 黒褐色シルト
3. 10YR4/6 褐色シルト　（10ＹＲ5/8黄褐色シルトを微量含む）
4. 10YR2/3 黒褐色シルト
5. 10YR3/3 暗褐色シルト（10ＹＲ5/8黄褐色シルトブロックを少量含む）
6. 10YR3/3 暗褐色シルト（10ＹＲ5/8黄褐色シルトを少量含む）
7. 10YR3/4 暗褐色シルト（10ＹＲ5/8黄褐色シルトブロックを多量、10YR2/3 黒褐色シルトブロックを微量含む）
8. 10YR5/8 黄褐色シルト（10ＹＲ3/3暗褐色シルトを少量含む）
9. 10YR2/3 黒褐色シルト（10ＹＲ5/8黄褐ブロックを微量含む）
10. 10YR5/8 黄褐色シルト

陷し穴状遺構２ B-B'

1. 10YR3/3 暗褐色シルト（地山ブロック少量含む）
2. 10YR3/4 暗褐色シルト（地山ブロックを少量含む）
3. 10YR4/4 褐色シルト（10YR3/3暗褐色シルトとの混合土）
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
5. 10YR3/2 黒褐色シルト

第４図　陷し穴状遺構１・２

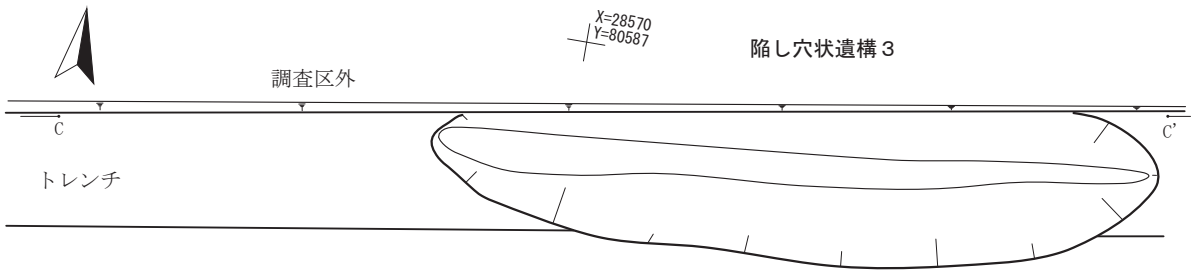
れ、天王山～赤穴式相当の土器であると思われる。27～34は地文に単節の縄文が施文された天王山～赤穴式相当の土器と考えられる。

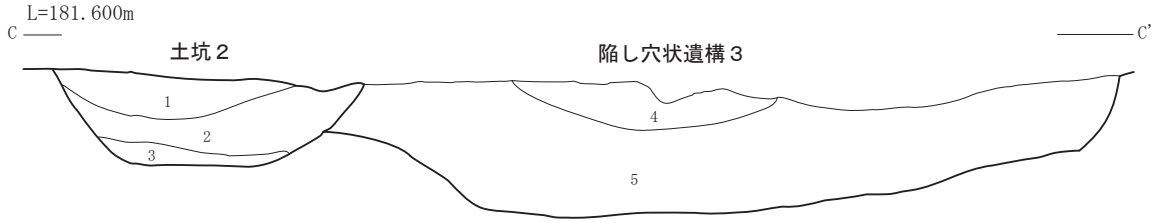
石器（第６図、写真図版５）

35は有茎石鏃、36は無茎石鏃、37は石匙、38・39は削掻器類であり、いずれの剥片石器も頁岩製である。40は円形扁平な敲磨器である。側面片側に明瞭な敲打痕が認められる。

５　まとめ

今回の発掘調査で、縄文時代中期以降の狩猟域であることが再確認された。さらに、出土遺物を概観すると、弥生土器、縄文時代早期～前期の土器が出土している。今回の調査では、これらの時代に



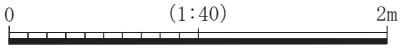


土坑２ C-C'

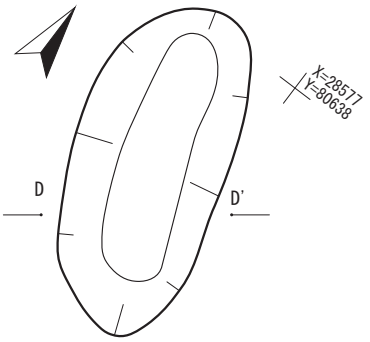
1. 10YR3/1 黒褐色シルト　（地山ブロックを少量、炭化物を少量含む）
2. 10YR3/3 暗褐色シルト　（地山ブロックを多量含む）
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（地山ブロックを少量含む）

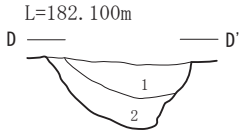
陥し穴状遺構３ C-C'

4. 10YR3/2 黒褐色シルト
5. 10YR3/3 暗褐色シルト



土坑１

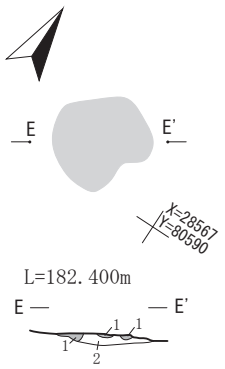




土坑１ D-D'

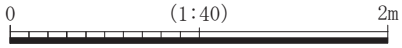
1. 10YR3/3 暗褐色シルト
2. 10YR3/3 暗褐色シルト（黄褐色ブロックを少量含む）

焼土１

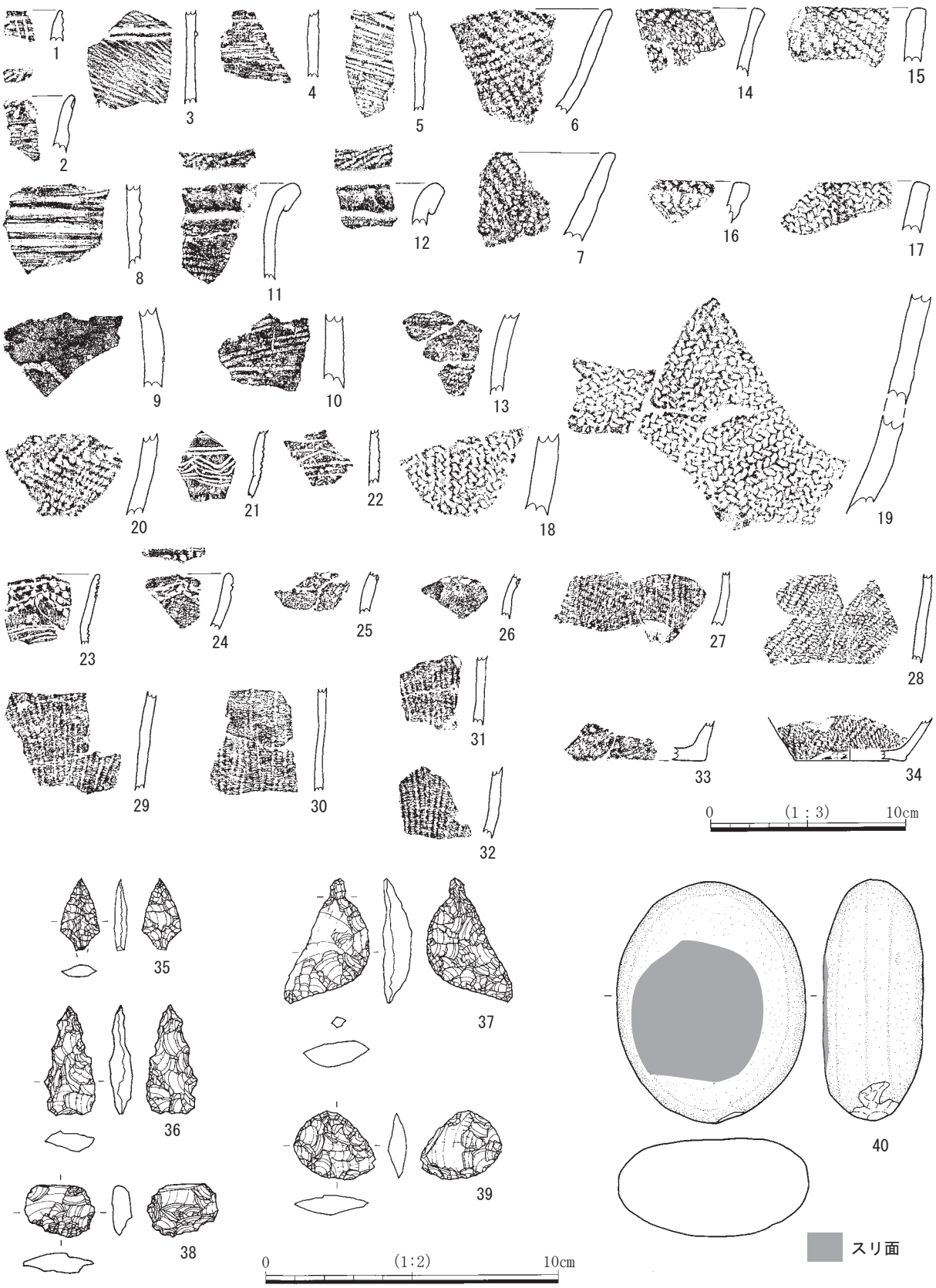


焼土遺構１ E-E'

1. 5YR5/8　明赤褐色焼土（現地性）
2. 10YR3/4 暗褐色シルト（黒褐色シルトブロックを微量含む）



第５図　陥し穴状遺構３・土坑１・焼土遺構１


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0 (1：3) 10cm
35
36
37
38
39
40
0 (1:2) 10cm
スリ面

第６図　出土遺物

合致する遺構はみられないが、この時代の活動拠点が近在することを示唆している。

なお、北野Ⅻ遺跡平成29年度調査に関する報告は、これをもって全てとする。

参考文献

久慈市教育委員会　2014　『北野Ⅻ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　久慈市埋蔵文化財調査報告書　第３集
久慈市教育委員会　2015　『北野Ⅻ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　久慈市埋蔵文化財調査報告書　第５集
海峡土器編年研究会　2006　『第４回縄文時代早期中葉土器群の再検討－資料集－』

表１　北野Ⅻ遺跡掲載遺物一覧（土器）

掲載No.	種別	出土状況	胎土	焼成	文様・調整など	備考
1	縄文土器	ⅠB地区・Ⅳ層	精良	良好	貝殻腹縁文、内面条痕	早期中葉
2	縄文土器	ⅠB地区・Ⅳ層	精良	良好	刺突・腹縁文、内面条痕	早期中葉
3	縄文土器	ⅠB地区・Ⅴ層	精良	良好	微隆起線・条痕文	早期後葉（ムシリⅠ式相当）
4	縄文土器	ⅠB地区・Ⅳ～Ⅴ層	精良	良好	内外面条痕	早期後葉（ムシリⅠ式相当？）
5	縄文土器	ⅠB地区・Ⅳ～Ⅴ層	精良	良好	内外面条痕	早期後葉（ムシリⅠ式相当？）
6	縄文土器	ⅠB地区・Ⅳ層	繊維	不良	縄文	早期末（赤御堂式相当）
7	縄文土器	ⅠB地区・Ⅳ層	繊維	不良	縄文	早期末（赤御堂式相当）
8	縄文土器	ⅠB地区・Ⅴ層下位	精良	良好	凹線文	
9	縄文土器	ⅠB地区・Ⅵb層	精良	良好	条痕（ミガキ）	早期中葉？
10	縄文土器	ⅠB地区・Ⅳ層	精良	良好	条痕	早期中葉？
11	縄文土器	ⅠB地区・Ⅴ層下位	精良	良好	縄文・絡条体圧痕文	
12	縄文土器	陥し穴状遺構１埋土上層	精良	良好	縄文・絡条体圧痕文	
13	縄文土器	ⅠB地区・Ⅴ層	精良	良好	縄文	
14	縄文土器	ⅠA地区・Ⅰ層	精良	良好	縄文（LR）	中期以降？
15	縄文土器	ⅠA地区・Ⅰ層	繊維	良好	縄文（RL）	前期前葉（大木１～２a式相当）
16	縄文土器	ⅠA地区・Ⅰ層	繊維	不良	縄文	前期前葉（大木１～２a式相当）
17	縄文土器	ⅠB地区・Ⅳ～Ⅴ層	繊維	良好	縄文（縄の束）	早期末～前期初頭
18	縄文土器	ⅠA地区・Ⅰ層	繊維	良好	縄文（縄の束）	早期末～前期初頭
19	縄文土器	ⅠB地区・Ⅳ～Ⅴ層	繊維	良好	縄文（縄の束）	早期末～前期初頭
20	縄文土器	土坑１埋土最上層	繊維	不良	縄文（羽状）	前期前葉（大木１～２a式相当）
21	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	沈線文	後期（天王山～赤穴式）
22	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	沈線文	後期（天王山～赤穴式）
23	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	沈線・交互刺突文	後期（天王山～赤穴式）
24	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	沈線・交互刺突文	後期（天王山～赤穴式）
25	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	刺突文	後期（天王山～赤穴式）
26	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	刺突文	後期（天王山～赤穴式）
27	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	縄文（LR）	後期（天王山～赤穴式）
28	弥生土器	ⅠB地区・攪乱	精良	良好	縄文（LR）	後期（天王山～赤穴式）
29	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	縄文（LR）	後期（天王山～赤穴式）
30	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	縄文（LR）	後期（天王山～赤穴式）
31	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	縄文（LR）	後期（天王山～赤穴式）
32	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	縄文（LR）	後期（天王山～赤穴式）
33	弥生土器	ⅠB地区・攪乱	精良	良好	縄文（LR）	後期（天王山～赤穴式）
34	弥生土器	ⅠA地区・Ⅲ層	精良	良好	縄文（LR）	後期（天王山～赤穴式）

表２　北野Ⅻ遺跡掲載遺物一覧（石器）

掲載No.	器種	出土状況	寸法（cm）			重さ（g）	備考
			長さ	幅	厚さ		
35	石鏃	ⅠB地区・攪乱	(2.45)	1.4	0.45	1.1	有茎・頁岩製
36	石鏃	ⅠB地区・攪乱	3.75	1.75	0.8	3.3	無茎・頁岩製
37	石匙	ⅠB地区・Ⅲ層	4.25	2.9	1.0	7.6	頁岩製
38	削掻器	ⅠB地区・Ⅳ層	1.8	2.4	0.7	3.2	頁岩製
39	削掻器	ⅠB地区・Ⅳ層	2.4	2.8	0.7	3.9	頁岩製
40	敲磨器	ⅠB地区・Ⅳ～Ⅴ層	8.3	6.5	3.4	452.4	側縁部に敲打痕あり。

調査区全景（西から）

谷部全景（南西から）

写真図版1　調査区の様子

谷部縦断面（東から）

谷部北西部断面（南から）

谷部北端断面（南から）

写真図版2　谷部断面

陥し穴状遺構1（東から）

陥し穴状遺構1断面（東から）

陥し穴状遺構2（東から）

陥し穴状遺構2断面（西から）

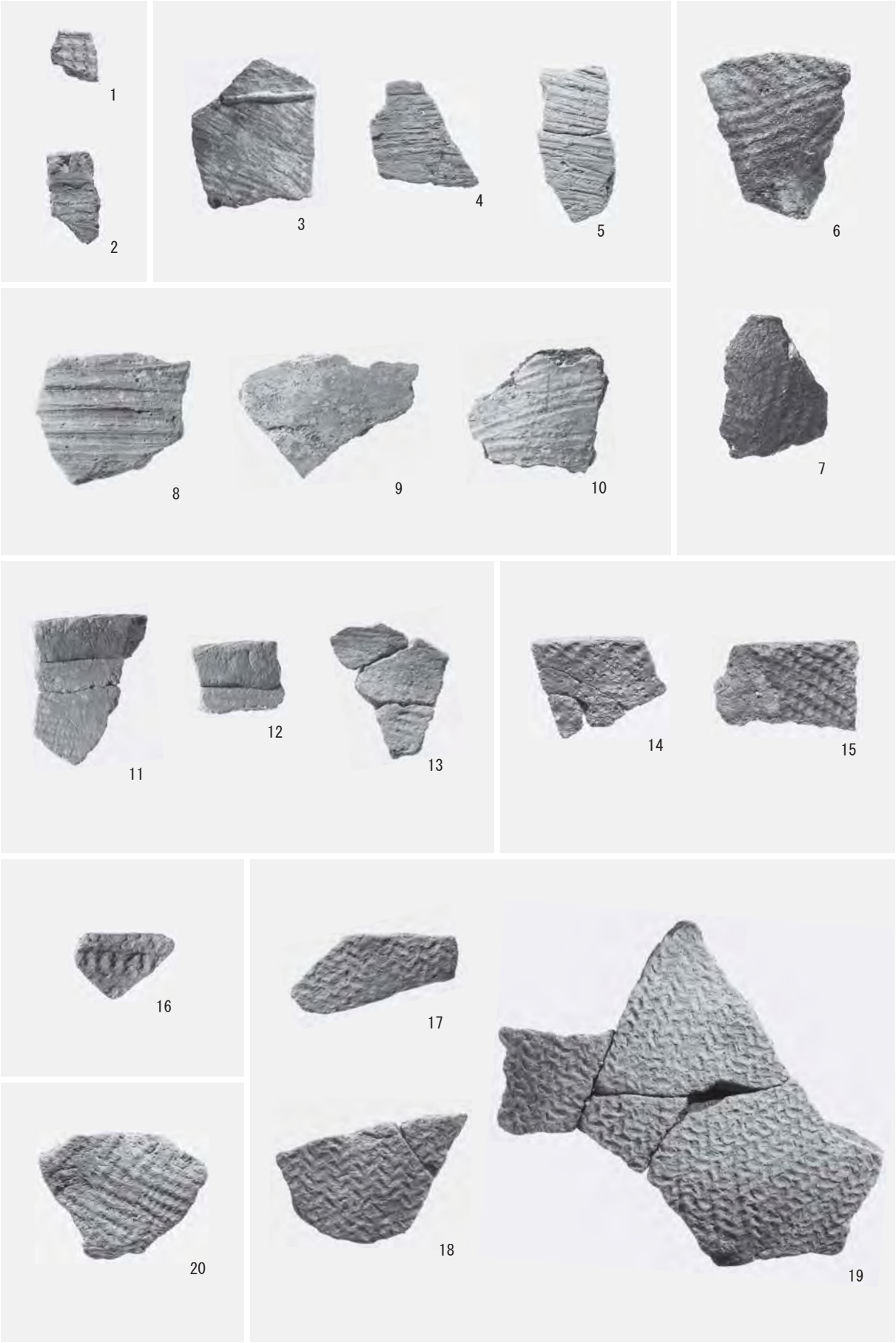
陥し穴状遺構3（東から）

陥し穴状遺構3上半断面（南東から）

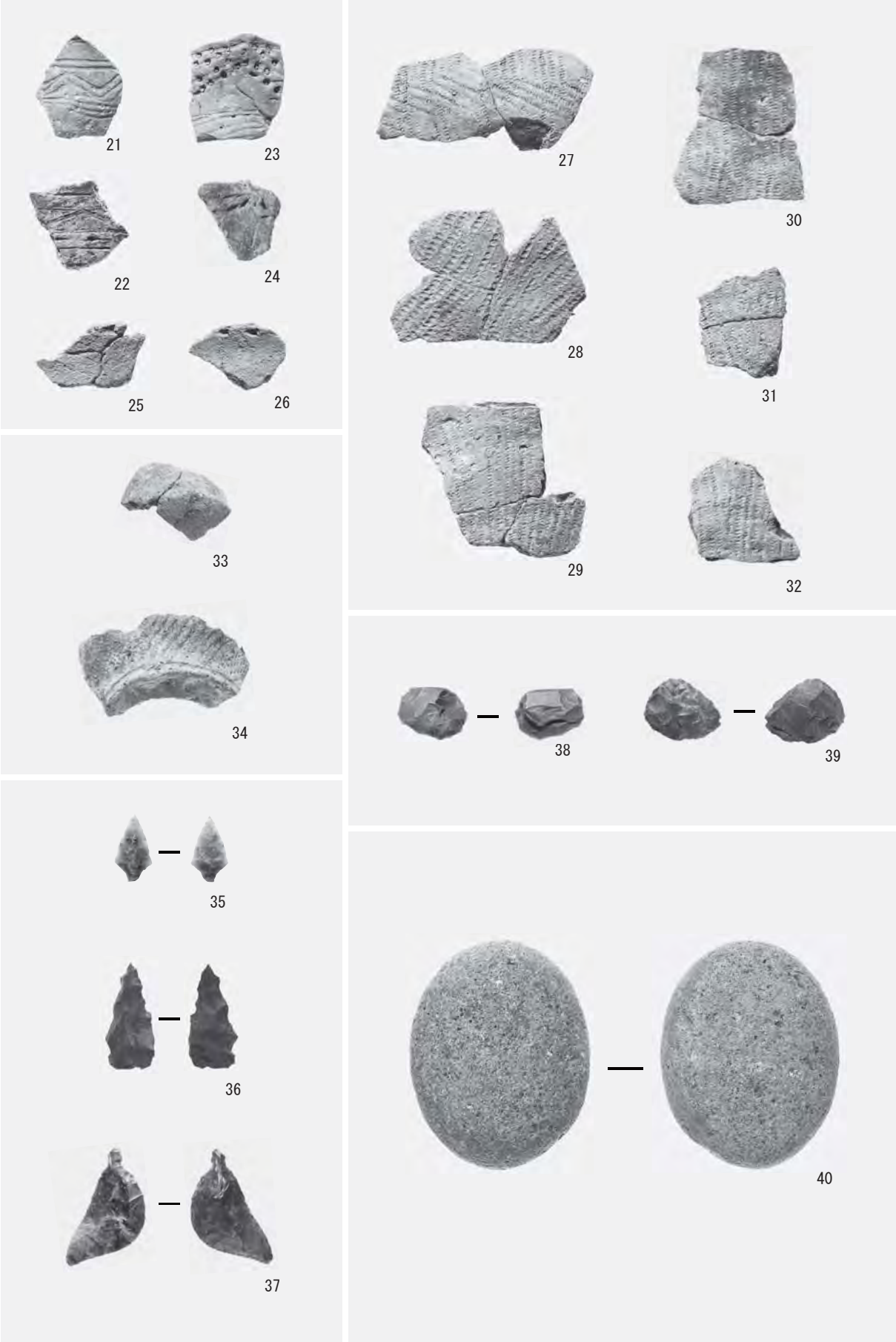
土坑1断面（南から）

焼土遺構1断面（南から）

写真図版3　検出遺構



写真図版4　出土遺物



写真図版5　出土遺物

（4）木戸場（きどば）遺跡

所在地	久慈市侍浜町本町第９地割内	**遺跡コード・略号**	JG00-0135・KB-17
委託者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	**調査対象面積**	580㎡
事業名	三陸沿岸道路	**調査終了面積**	580㎡
発掘調査期間	平成29年５月１日～５月31日	**調査担当者**	杉沢昭太郎・趙　哲済・河村美佳

１　調査に至る経過

木戸場遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（久慈北道路）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成28年12月１日付け国東整陸一調第50号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成28年12月6日にわたり試掘調査を行い、平成28年12月7日付け教生第1423号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

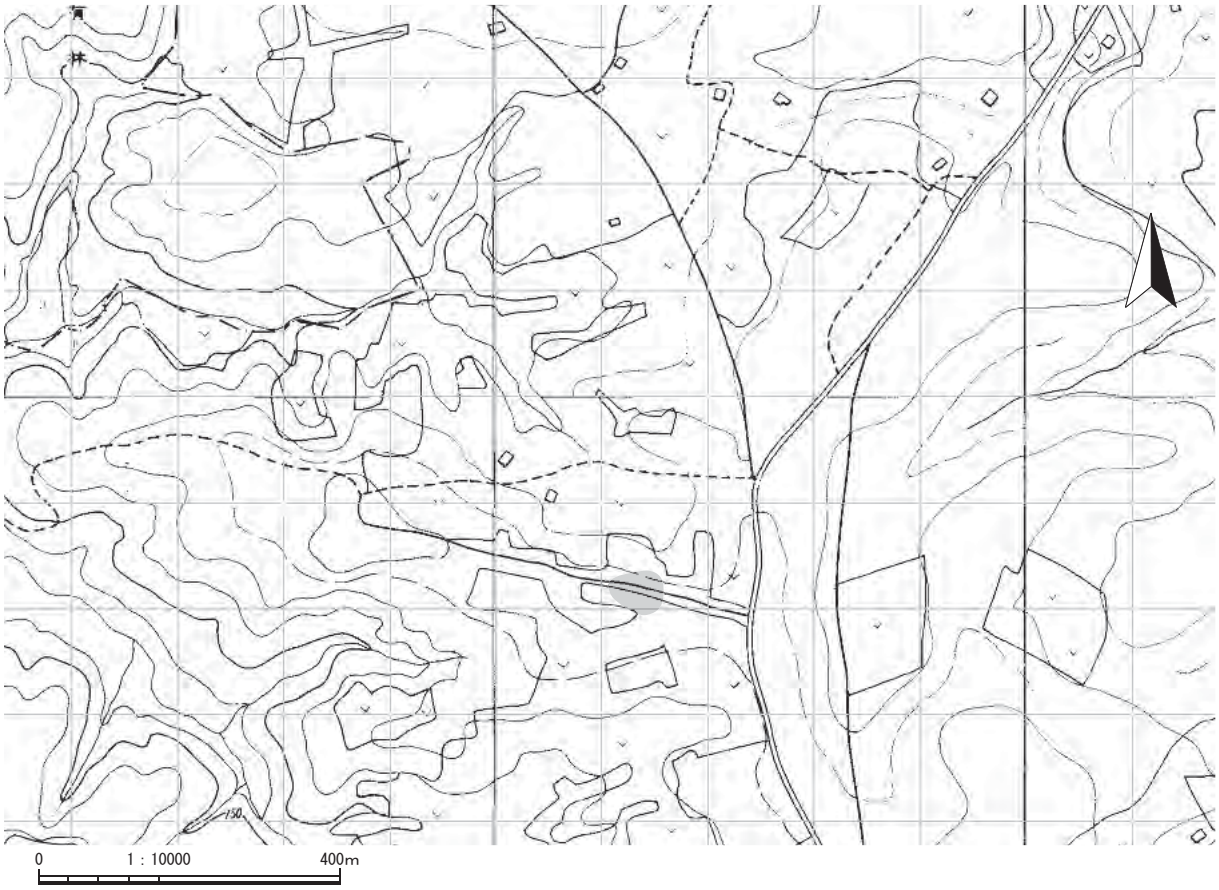
その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成29年４月３日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

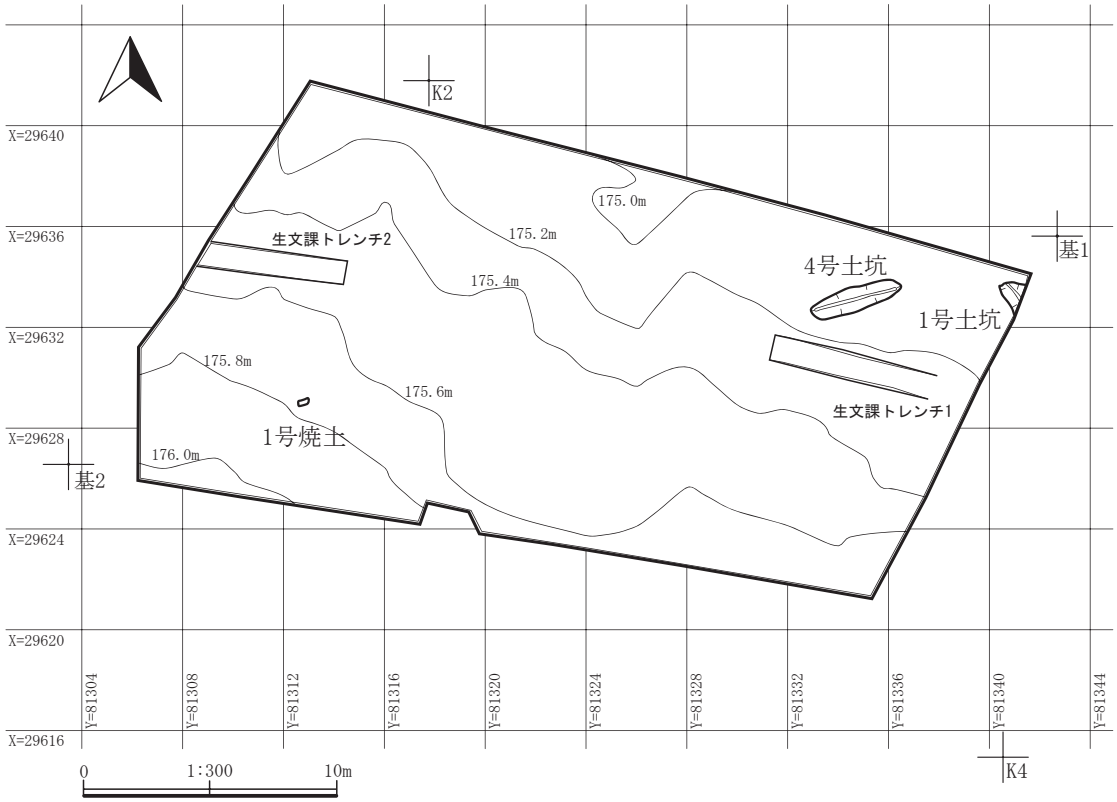
1：50,000　久慈

第１図　遺跡位置図

（4）木戸場遺跡



第２図　調査地点



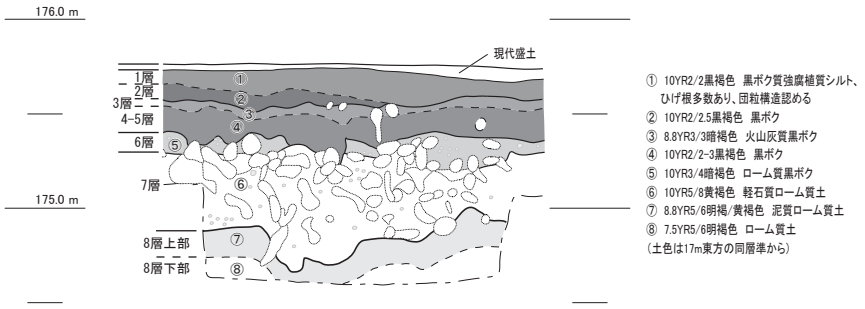
第３図　遺構配置図

２　遺跡の位置と立地

木戸場遺跡は侍浜以北に発達する上位段丘群のひとつ、三崎面と呼ばれる海抜200～160mの丘陵面に位置する（米倉1966）。その中にあって、調査地は陸中中野の南で太平洋に注ぎ入る高家川の支流に沿う東西尾根の北縁、海抜176m付近にある小さな平坦面にある。

３　基本層序

調査地の東、北、西の３壁面に沿って深さ60～90cmのトレンチを掘り、要所で1.2～1.3mの深掘りを行い、壁面で地層を観察して８層に区分した。以下、遺跡の地名を冠して、上位より地層を説明する。



第４図　基本土層

木戸場１層は、黒褐色（7.5YR2/2-10YR2/2）強腐植質黒ボク質シルトからなり、根が密に入り、団粒も顕著に認められる。層厚は10～20cm程度で、下限は不明確であり、根が急に少なくなるあたりで暫定的に区分する。調査地北辺沿いには、道路建設に係る現代盛土層が覆う。

木戸場２層は、黒褐色（10YR2/2-2.5）黒ボク（強腐植質シルト）からなる。層厚は10cm以下で、調査地西部で断続的になる。下限は明瞭である。

木戸場３層は、暗褐色（8.8YR3/2-3）黒褐色～暗褐色火山灰質黒ボクからなる。５～15cmで、下限は不明瞭である。中掫浮石の降灰層準を含むとみられるが、比較的明瞭に火山灰質の黒ボクが判別できる範囲は狭く、ほとんどが漠然と明るみが残る程度である。

木戸場４層は、黒褐色（10YR2/2-2/3）強腐植質黒ボクからなる。層厚は10cm前後で、下限は漸移であり、調査区中央から西では、下位の５層とは区別できず、根などによる擾乱が著しい黒ボク～黒ボク質シルトとなる。

木戸場５層は、黒褐色（10YR2/3）黒ボク～黒ボク質シルトからなる。層厚は５～10cm程度で、下限は漸移である。調査区中央から西では、上述のように下位の５層とは区別できず、擾乱が著しい。

木戸場６層は、暗褐色（8.8YR3/3-10YR3/4）ローム質黒ボク～黒ボク質ローム質シルトからなり、風化してローム質の細礫サイズ軽石粒を多く含む。層厚は20～50cmで、下限は比較的明瞭であるが、凹凸が大きく、根による擾乱が著しい。攪拌の著しい部分では下位の７層が分断されて島状（窓状）に残る。

木戸場７層は八戸浮石層の層準にあたり、明褐色/橙色～黄褐色（7.5YR5.5/8-10YR5/8）軽石質ローム質土からなる。層厚は20～50cm程度で、下限は明瞭であり、凹凸がある。軽石が散在するが、層状の降下ユニットは認められない。

木戸場８層は高舘火山灰層の層準に当たり、上下に２区分できる。

木戸場８層上部は、明褐色（7.5YR5/6）～褐色（10YR4/6）泥質ローム質土からなる。層厚は15～30cmで、下限は漸移～不明瞭である。

木戸場８層下部は明褐色（10YR5/6）やや泥質なローム質土からなる。層厚は135cm以上で、下限は未確認である。最下部30cmは明褐色（10YR5/6）～褐色（10YR4/6）でやや締まりの良いローム質土である。

４　調査の概要

（１）遺構

１号土坑

［位置］調査区北東隅。［検出面］地層断面から、遺構面は３層上面と読めるが、埋土に２層に由来するとみられる黒味の強い黒ボクが偽礫で多量に混じることから、２層内に遺構面があったと推定できる。［規模（断面情報のみ）］南北幅（開口部）1.3m、長さ1.1m以上、深さ2.3mで、８層を1.7m掘り下げている。底から35cmで最も狭く幅13cm、底から上10cmで幅16cmとなる。［形状］平面長円形（溝状）。［覆土・堆積状況］基底にローム質土混じり黒ボク⑨が厚さ約10cm堆積する。これと明確な境界を挟んで上位は、偽礫の集合堆積物としての客土または崩落土が厚く重なる。覆土下部から上部へ、８層堆積物が黒ボクより優勢な客土（⑧、厚さ約25cm）、８層堆積物主体の客土（⑦、厚さ約55m）、６層堆積物主体で7層の偽礫が混じる客土（⑥、厚さ約45～60cm）、５層堆積物主体の客土（⑤、厚さ約40cm）、４層堆積物主体で黒味の強い2層の偽礫を多く含む客土（④、厚さ約40cm）である。その上位は、層厚10～15cmのやや火山灰質の腐植質シルト層③であり、主として３層の再堆積層とみられる。さらに上位に２層上部にあたる黒ボク②が層厚５cm内外で覆う。［壁・底面の形状］壁面は最下部で少し水滴状に膨らむが、下半部1.1m余りは垂直に近く、北側83°、南側87°である。上半部の1.2mは開き気味で、黒ボクやローム質土の土質の違いで凹凸ができ、特に南側は不規則な階段状である。［重複関係］なし。［（検出面・覆土から）帰属時期］縄文時代後期ごろ。［その他の所見］陥し穴とみられる。

４号土坑

［位置（グリッド）］調査区の東側。［検出面］３層上位の１層基底面、遺構面は２層内か。［規模（断面情報のみ）］開口部で南北幅0.9m、深さ1.3m以上。［形状］平面は長円形（溝状）、断面は細いロート状。［覆土・堆積状況］下部0.5mは主として８層由来の細かな偽礫からなる客土で、最下部0.05mに黒ボクを挟み、斜に２分できる。中部0.5mは主として７～６層堆積物主体の偽礫客土である。上部30cmは主として５層以上の堆積物の偽礫状客土からなる。［壁・底面の形状］壁面は下底から0.45mはほぼ垂直、下底から0.45mより上は、細いラッパ状に開く。底は平坦でやや丸みを帯びる。［重複関係］無し。［（検出面・覆土から）帰属時期］縄文時代。［その他の所見］陥し穴であろう。

１号焼土

［位置（グリッド）］調査区のやや西側。［検出面］６層上位の１層基底面。［規模（断面情報のみ）］開口部62cm以上、深さ17cm以上の小土坑中に焼土塊が混じる。［覆土・堆積状況］焼土塊（偽礫）と焼土粒（微細な偽礫）が混じる腐植質シルト偽礫を含む黒ボク～腐植質シルト。［壁・底面の形状］壁片は比較的面状、底面は起伏有。［重複関係］無し。［（検出面・覆土から）帰属時期］不明。［その他の所見］なし。

文献

米倉伸之　1966　『陸中北部沿岸地域の地形発達史』地理学評論39、p 311-323.

（2）遺物

何れも遺構外出土である。１は石鏃、２・３は寛永通宝である。詳細は観察表に記している。

5　まとめ

本遺跡は西から東へひろがる丘陵（標高176～160m）に立地し、調査区はその遺跡の南端部にある尾根上の張り出した部分（標高176m前後）にあたる。現況は未舗装の道路及び雑木林であった。検出された縄文時代の陥し穴は、中掫火山灰層の上面から掘り込まれており、縄文時代前期よりも新しい。焼土はその場で火を炊いた炉跡ではないようで、時期も不明である。出土遺物は調査区東側から少量出土している。縄文時代の土器であるが地文のみで詳細は不明である。

今回の調査区周辺は陥し穴が散在する狩猟の場であったことが明らかとなった。

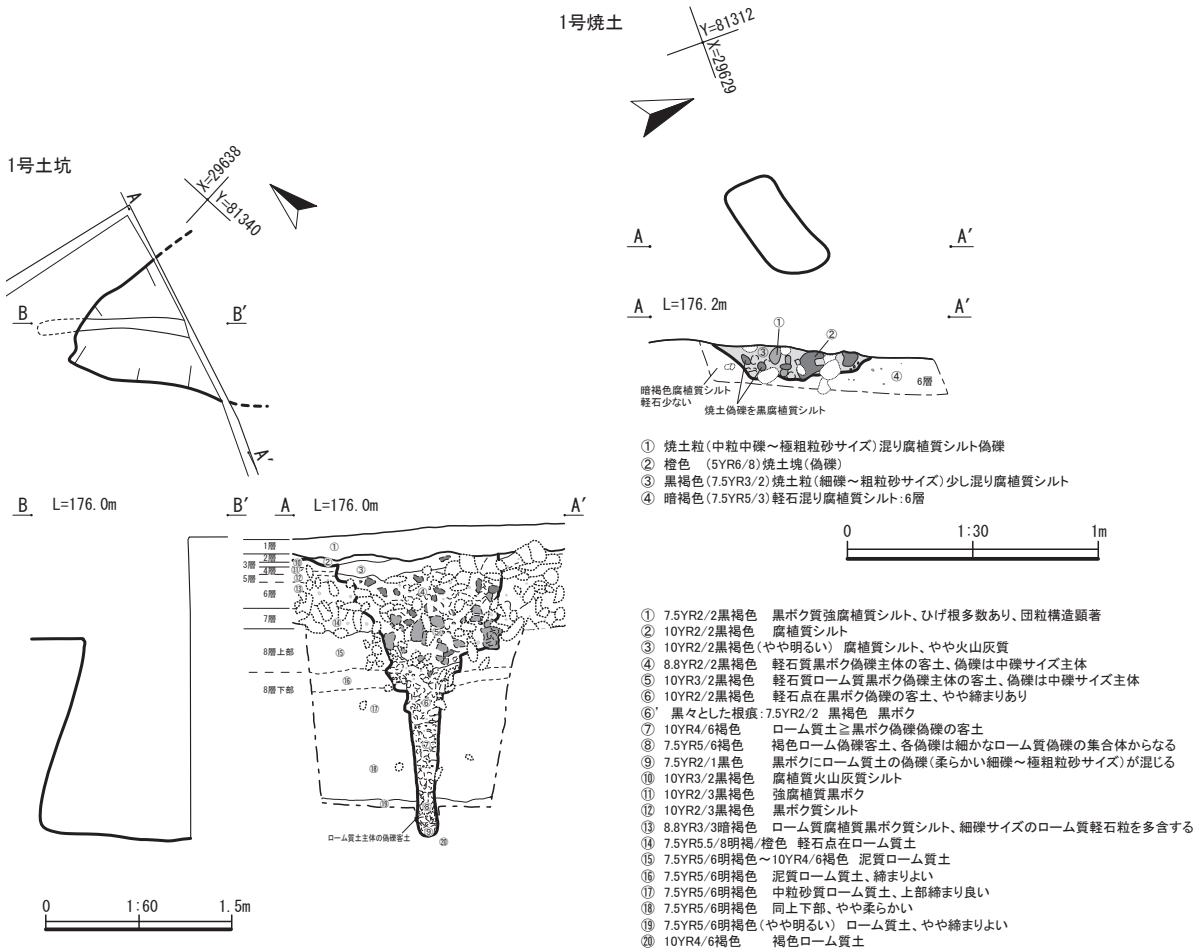
なお、木戸場遺跡の平成29年度の報告はこれをもって全てとする。

第１表　石器類観察表

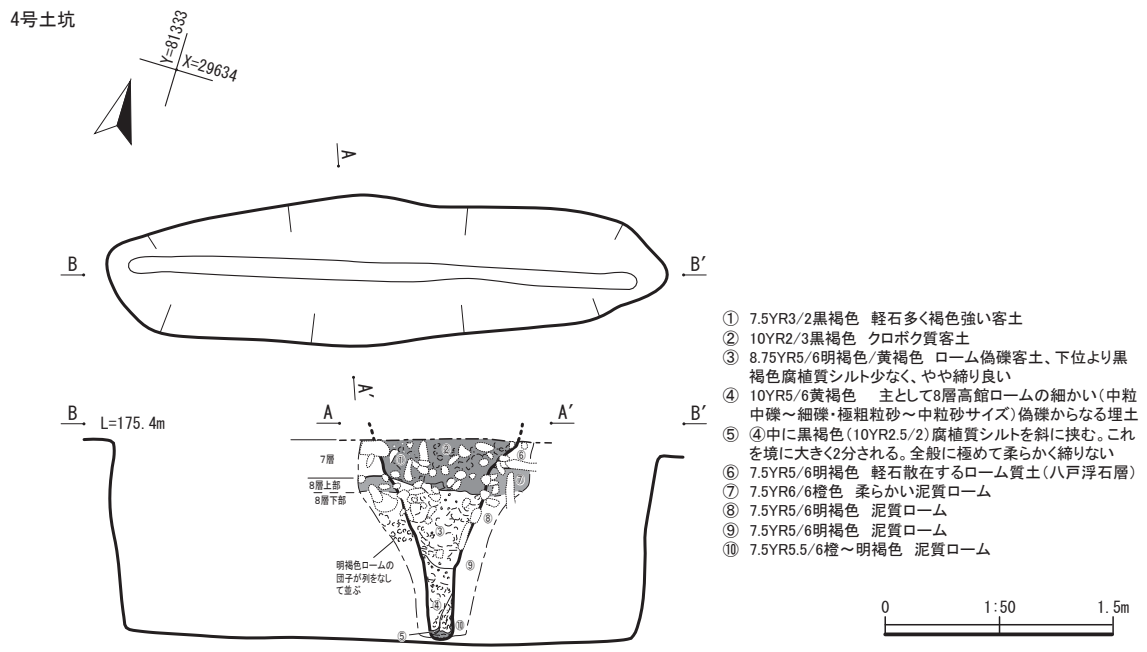
掲載番号	出土地点・層位	器種	計測値（cm、g）				石材	その他
			長さ	幅	厚さ	重量		
1	遺構外・1～2	石鏃	1.9	1.5	0.3	0.5	頁岩　中生代　北上山地	なし

第２表　銭貨観察表

掲載番号	出土地点	層位	銭貨名	種類	初鋳年 鋳造年	材質	厚さ（mm）	重量g	その他
2	遺構外	1～2	寛永通宝	新寛永	1697	銅	1.1	2.30	背名あるが読めない
3	遺構外	1～2	寛永通宝	新寛永	1697	銅	1.2	2.70	なし



第５図　1号土坑、1号焼土



第６図　４号土坑

調査区全景（北から）

写真図版１　調査区全景

調査区全景（西から）

調査前の状況（東から）

土層断面（南から）

北壁地層断面（南西から）

1号土坑平面（西から）

1号土坑断面（西から）

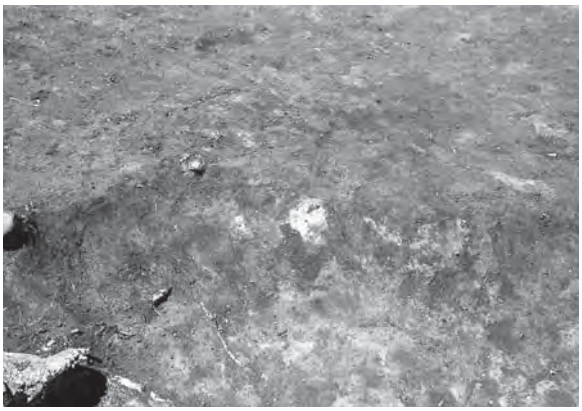
4号土坑平面（西から）

4号土坑断面（西から）

写真図版2　基本土層、土坑ほか

4号土坑作業中

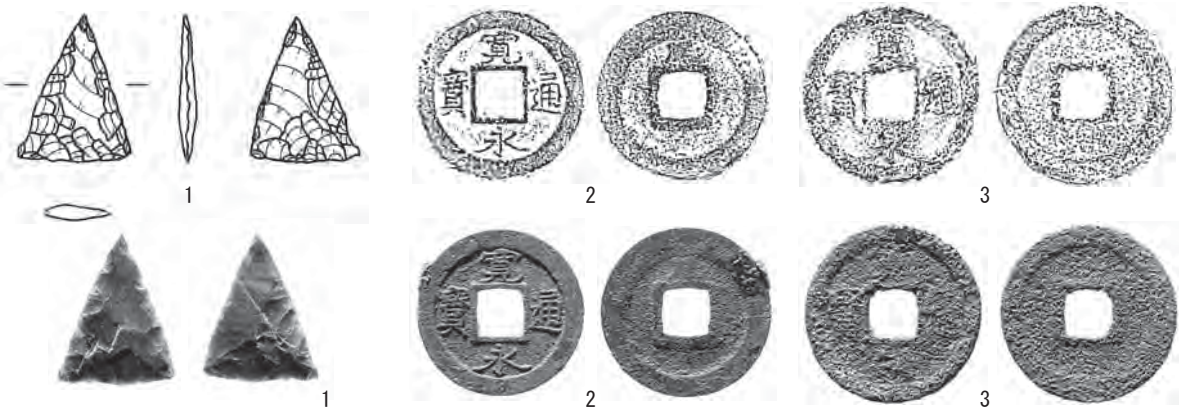
1号焼土断面（東から）



1号焼土平面（東から）

調査風景

調査区全景（南東から）



S=1/1（図・写真）

写真図版3　焼土、調査風景、出土遺物ほか

（5）中野城内遺跡（なかのじょうない）

所在地	九戸郡洋野町中野第１地割下向	**遺跡コード・略号**	IF89-2323・NJN-17
委託者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	**調査対象面積**	700㎡
事業名	三陸沿岸道路	**調査終了面積**	700㎡
発掘調査期間	平成29年10月16日～11月29日	**調査担当者**	福島正和・白戸このみ・舩渡耕己

１　調査に至る経過

中野城内遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（侍浜～階上）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年９月５日付け国東整陸二調第30号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年10月24日～25日にわたり試掘調査を行い、平成24年10月26日付け教生第1326号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成29年４月３日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

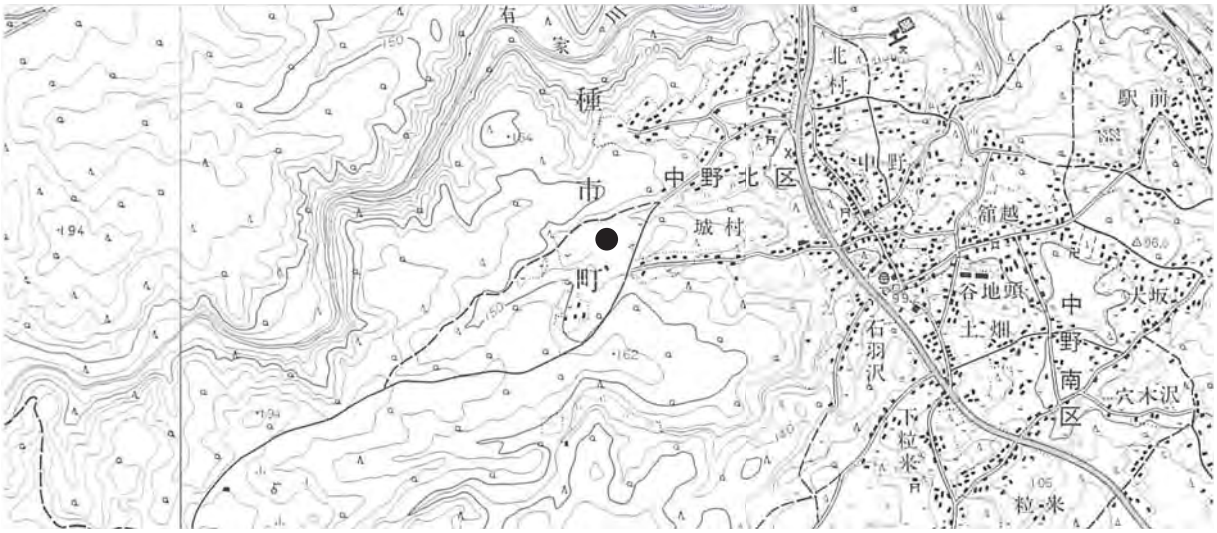
（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

２　遺跡の位置と立地

中野城内遺跡は九戸郡洋野町中野に所在する。洋野町は岩手県北東部に位置し、北は青森県と接し、東側は太平洋に面する。遺跡は現在のJR八戸線陸中中野駅より西約1.5kmの場所に位置する。西の山間部から東へ流れる小河川北岸の段丘に立地する。遺跡の標高は約130mであり、調査前は宅地跡地を利用した畑であった。調査区は西から東へ下る緩斜面である。なお、調査区東側小河川沿いのエリアは三陸沿岸道路の用地予定地だが、用地未取得であったため今回は調査をおこなっていない。

３　基本層序

調査範囲内における基本層序は図示した通りである。調査区西側は本来の地形では高位面であるた



1：25,000　陸中大野・陸中中野

第１図　遺跡の位置

第２図　調査位置（1:3,000）

め、収斂現象あるいは現代の削平によってⅡ～Ⅵ層は認められない。Ⅱ～Ⅵ層が残存するのは標高130mよりも低地である。なお、調査区外の北側エリアは、現代に一段低い水田として造成、Ⅶ層以下の地山がその削平によって露出しており、試掘調査の結果により本調査範囲から事前に除外されている。鍵層として十和田中掫火山灰（以下、中掫火山灰）、十和田南部浮石火山灰（以下、南部浮石）などの火山灰が認められる。調査ではⅠ層およびⅡ層上半を重機により掘削し、Ⅱ層では遺構の把握が困難であると判断したためⅢ層上面において遺構検出をおこなった。Ⅲ層以下はトレンチにより適宜遺構および遺物の有無を確認した。その結果、Ⅴ層およびⅥ層から遺物の出土する区域が広がることが判明したため、その範囲を人力により掘り下げた。Ⅴ層は南部浮石の２次堆積層であると考えられ、わずかながら土器の出土が認められる。Ⅵ層は土器等を含む遺物包含層であることが確認できた。Ⅶ層以下は遺物の出土は認められず、南部浮石より古相の火山灰層であると推測される。

４　調査の概要

（１）遺構

今回の調査では縄文時代の陥し穴状遺構８基、土坑２基を検出した。８基の陥し穴状遺構は、いずれも調査区内の比較的標高が高い位置に偏在するが、相互に切り合わない。これら陥し穴状遺構は、Ⅲ層上面で検出をおこなったが、純然たる遺構検出面はⅡ層中あるいはⅡ層上面であると推測され、縄文時代中期以降の陥し穴として機能したと考えられる。２基の土坑は、調査区内の北東側低地部分に位置し、Ⅵ層の遺物包含層直下のⅦ層上面で検出した。

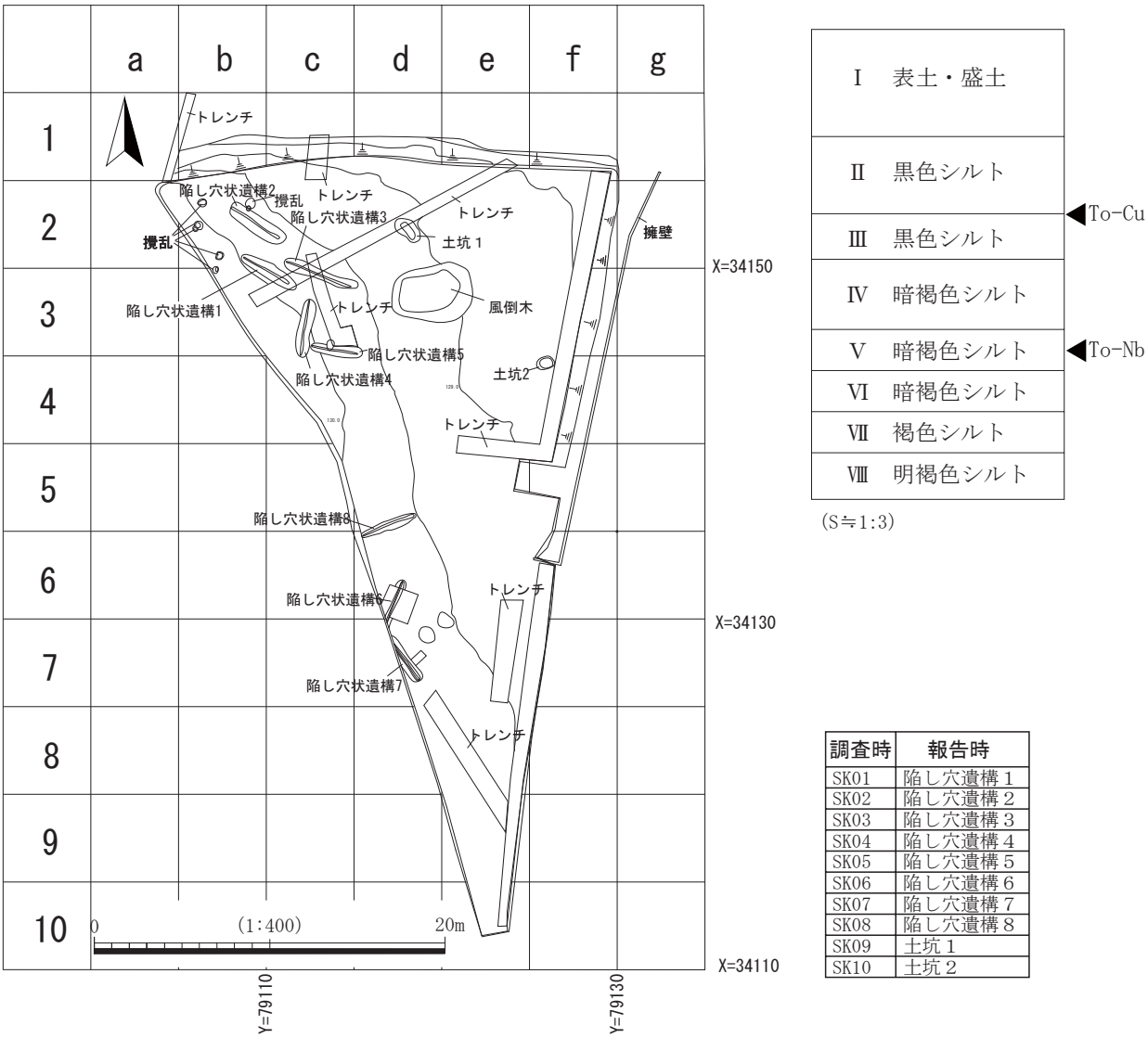
陥し穴状遺構１（第４図、写真図版１）

調査区北西側２b区に位置する。平面形態は細長い溝状で、長軸が等高線に平行する。この軸方向は北に隣接する陥し穴状遺構２とほぼ同一である。壁下半は垂直に立ち上がるが、壁上半は開口部に向けてやや広がる形態である。埋土は上位に黒色シルト主体の堆積がみられ、中～下位は壁面の崩落土による堆積であると考えられる。

陥し穴状遺構２（第４図、写真図版１）

調査区北西隅２b区に位置する。平面形態は細長い溝状で、長軸が概ね等高線に平行する。壁下半は垂直に立ち上がるが、壁上半は開口部に向けてやや広がる形態である。埋土上半は濃い色調のシルトで下半は明るい色調のシルトが主体である。下半は地山の壁が崩落して堆積したものと推測される。

陥し穴状遺構３（第５図、写真図版１）



調査時	報告時
SK01	陥し穴遺構１
SK02	陥し穴遺構２
SK03	陥し穴遺構３
SK04	陥し穴遺構４
SK05	陥し穴遺構５
SK06	陥し穴遺構６
SK07	陥し穴遺構７
SK08	陥し穴遺構８
SK09	土坑１
SK10	土坑２

第3図　調査区全体図および基本層序模式図

３c区に位置し、調査で掘削した試掘トレンチで確認した。平面形態は細長い溝状で、中央部の幅が狭くやや窄まっている。長軸は概ね等高線に平行するが、最も近い位置にある陥し穴状遺構１とはわずかに角度を異にしている。遺構下部の側壁は直線的に立ち上がるが、最上部壁は外方に開く形態である。埋土は上半が黒・黒褐色シルト、下半は黒色あるいは黒褐色シルトと黄褐色シルトが互層を成す。下半は地山の自然崩落土が堆積していると推測される。

陥し穴状遺構４（第５図、写真図版１）

調査区西端３c区に位置する。長い溝状の平面形態で、近接する遺構とは概ね直交する軸方向である。遺構壁面は急角度であるが斜めに立ち上がり、短軸断面形態は「V」字形を呈する。埋土上位は黒色シルト、下位は南部浮石のブロックを含む黒褐色シルトであり、壁面の崩落土が遺構内部に堆積したものとみられる。

陥し穴状遺構５（第６図、写真図版２）

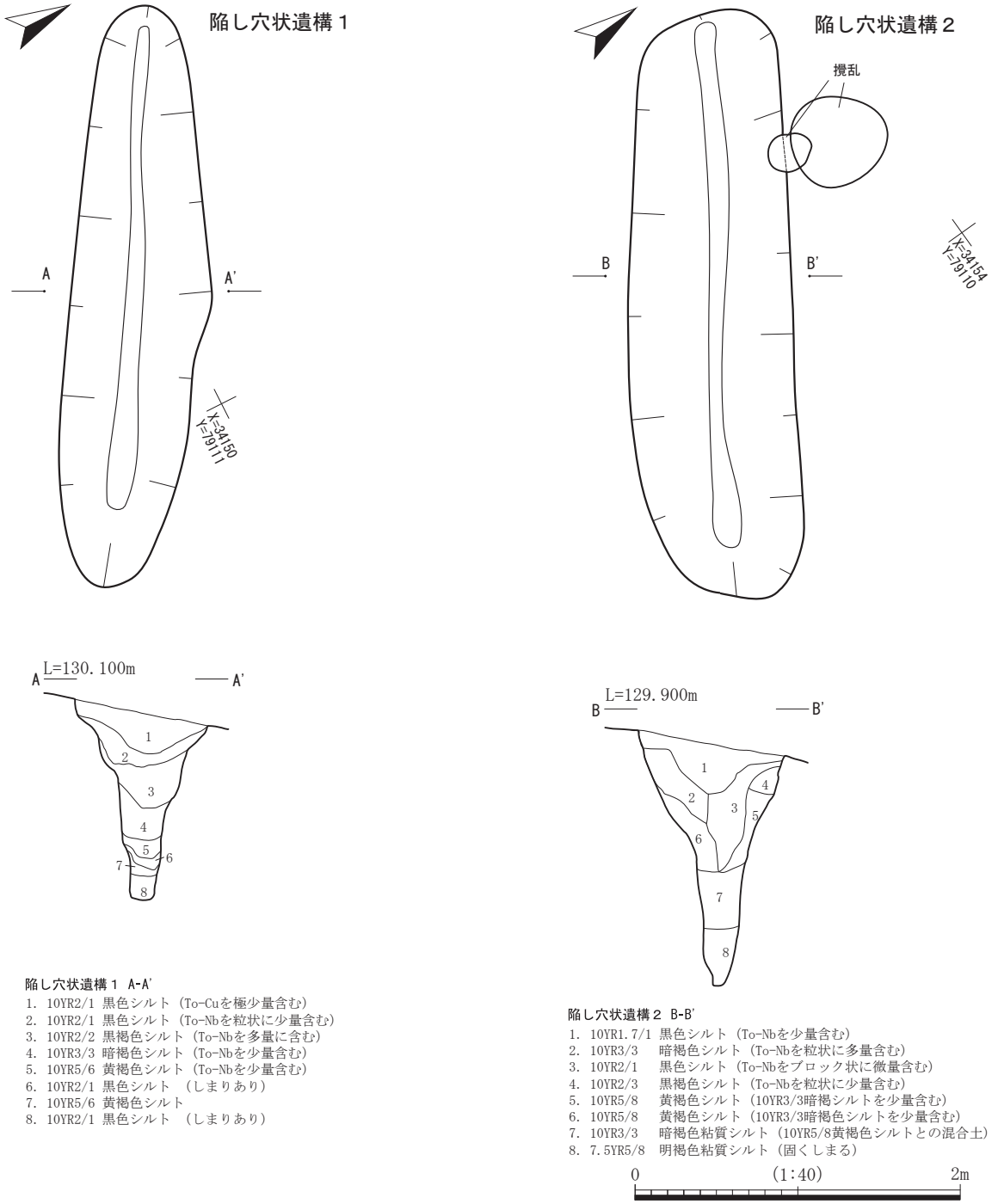
調査区西端３c区に位置する。長い溝状の平面形態で、近接する陥し穴状遺構４とは概ね直交する軸方向である。遺構壁面は急角度であるが斜めに立ち上がり、上部は外方へ開く。埋土は火山灰ブロックを含む黒色シルトおよび黒褐色シルトであり、壁面の崩落によって堆積したものとみられる。

陥し穴状遺構６（第６図、写真図版２）

県教委による試掘トレンチで確認された遺構である。調査区南西側６d区に位置する。遺構南西部は調査区外へ延びるが、南北よりやや軸を振った長い溝状の平面形態を呈する。埋土は黒褐色あるいは黒色シルトで上位には中掫火山灰、下位には南部浮石が斑状に含まれる。このことからいずれも壁面の崩落土が堆積したものとみられる。

陥し穴状遺構７（第７図、写真図版２）

調査区南西の７d区に位置する。遺構北西部は調査区外へ続くが、長い溝状の平面形態を呈する。概ね等高線に平行する軸方向である。埋土は黒色あるいは黒褐色シルトが互層となり、上位には中掫火山灰、下位には南部浮石細粒が含まれる。いずれも壁面の崩落土が堆積したものとみられる。



陥し穴状遺構１ A-A'
1. 10YR2/1 黒色シルト（To-Cuを極少量含む）
2. 10YR2/1 黒色シルト（To-Nbを粒状に少量含む）
3. 10YR2/2 黒褐色シルト（To-Nbを多量に含む）
4. 10YR3/3 暗褐色シルト（To-Nbを少量含む）
5. 10YR5/6 黄褐色シルト（To-Nbを少量含む）
6. 10YR2/1 黒色シルト （しまりあり）
7. 10YR5/6 黄褐色シルト
8. 10YR2/1 黒色シルト （しまりあり）

陥し穴状遺構２ B-B'
1. 10YR1.7/1 黒色シルト（To-Nbを少量含む）
2. 10YR3/3 暗褐色シルト（To-Nbを粒状に多量含む）
3. 10YR2/1 黒色シルト（To-Nbをブロック状に微量含む）
4. 10YR2/3 黒褐色シルト（To-Nbを粒状に少量含む）
5. 10YR5/8 黄褐色シルト（10YR3/3暗褐シルトを少量含む）
6. 10YR5/8 黄褐色シルト（10YR3/3暗褐色シルトを少量含む）
7. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト（10YR5/8黄褐色シルトとの混合土）
8. 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト（固くしまる）

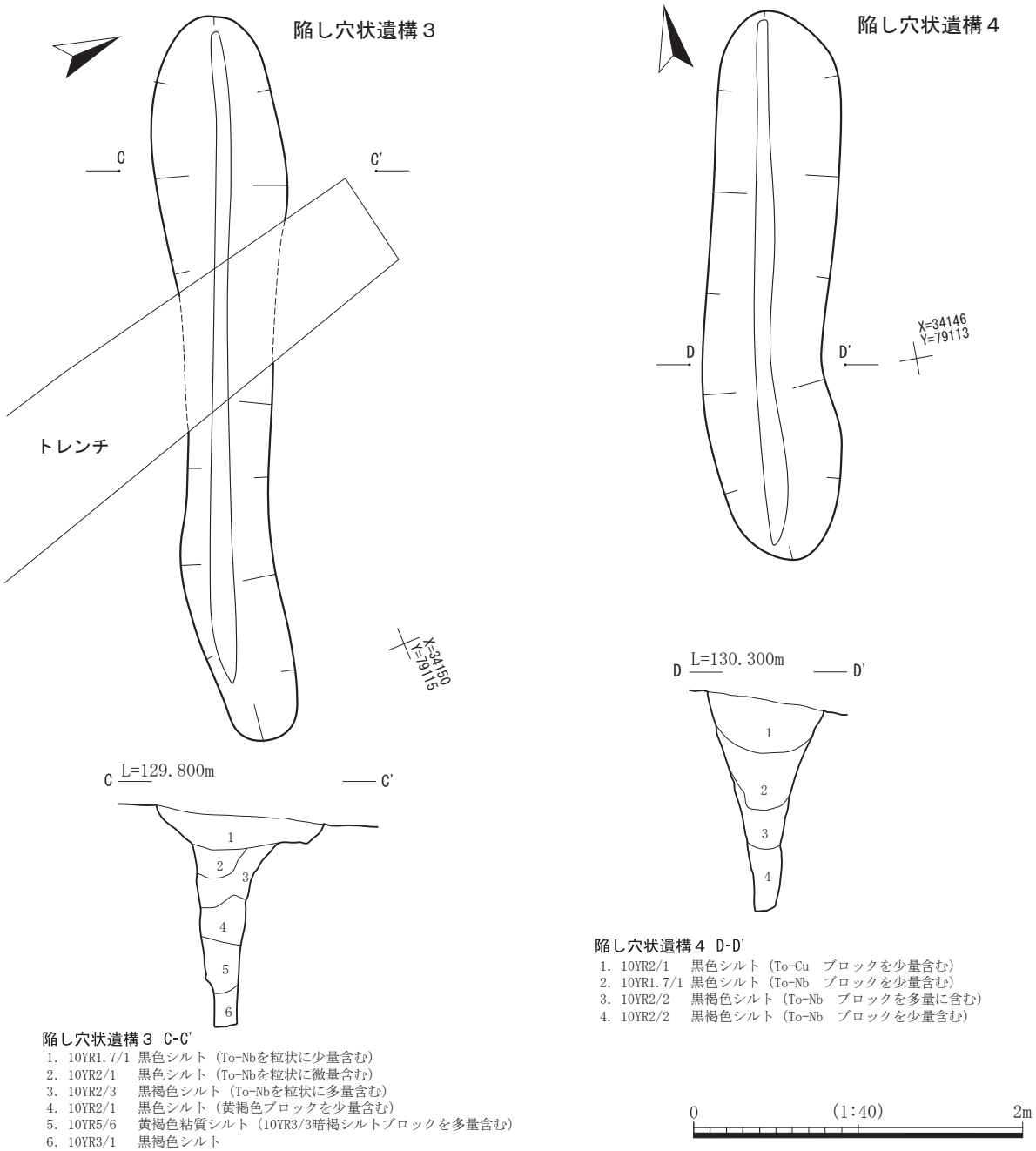
第４図　陥し穴状遺構１・２

陥し穴状遺構８（第７図、写真図版２）

調査区南西の５d区に位置する。長い溝状の平面形態を呈し、概ね等高線に直交する軸方向である。埋土は黒色シルトが主体となり、上位には中掫火山灰、下位には南部浮石の細粒が含まれる。いずれも壁面の崩落土が堆積したものとみられる。

土坑１（第８図、写真図版２）

調査区北東側の遺物包含層分布域内に位置する。平面長楕円形で、長軸は概ね南北方向である。埋土最上位に遺物包含層であるⅥ層が流入し、被覆する。埋土は上下２層に区分可能である。上層は固く締まった暗褐色シルトであり、遺物包含層のⅥ層に酷似する。この層の下位より縄文時代早期の土器片が出土した。下層は褐色シルトにややそれより暗色のシルトが斑状に混じり、上層同様に固く締まっている。堆積状況から自然に埋没したものと考えられる。性格不明ながら検出層位より縄文時代早期の遺構である可能性が高い。



陥し穴状遺構３ C-C'
1. 10YR1.7/1 黒色シルト（To-Nbを粒状に少量含む）
2. 10YR2/1　黒色シルト（To-Nbを粒状に微量含む）
3. 10YR2/3　黒褐色シルト（To-Nbを粒状に多量含む）
4. 10YR2/1　黒色シルト（黄褐色ブロックを少量含む）
5. 10YR5/6　黄褐色粘質シルト（10YR3/3暗褐シルトブロックを多量含む）
6. 10YR3/1　黒褐色シルト

陥し穴状遺構４ D-D'
1. 10YR2/1　黒色シルト（To-Cu　ブロックを少量含む）
2. 10YR1.7/1 黒色シルト（To-Nb　ブロックを少量含む）
3. 10YR2/2　黒褐色シルト（To-Nb　ブロックを多量に含む）
4. 10YR2/2　黒褐色シルト（To-Nb　ブロックを少量含む）

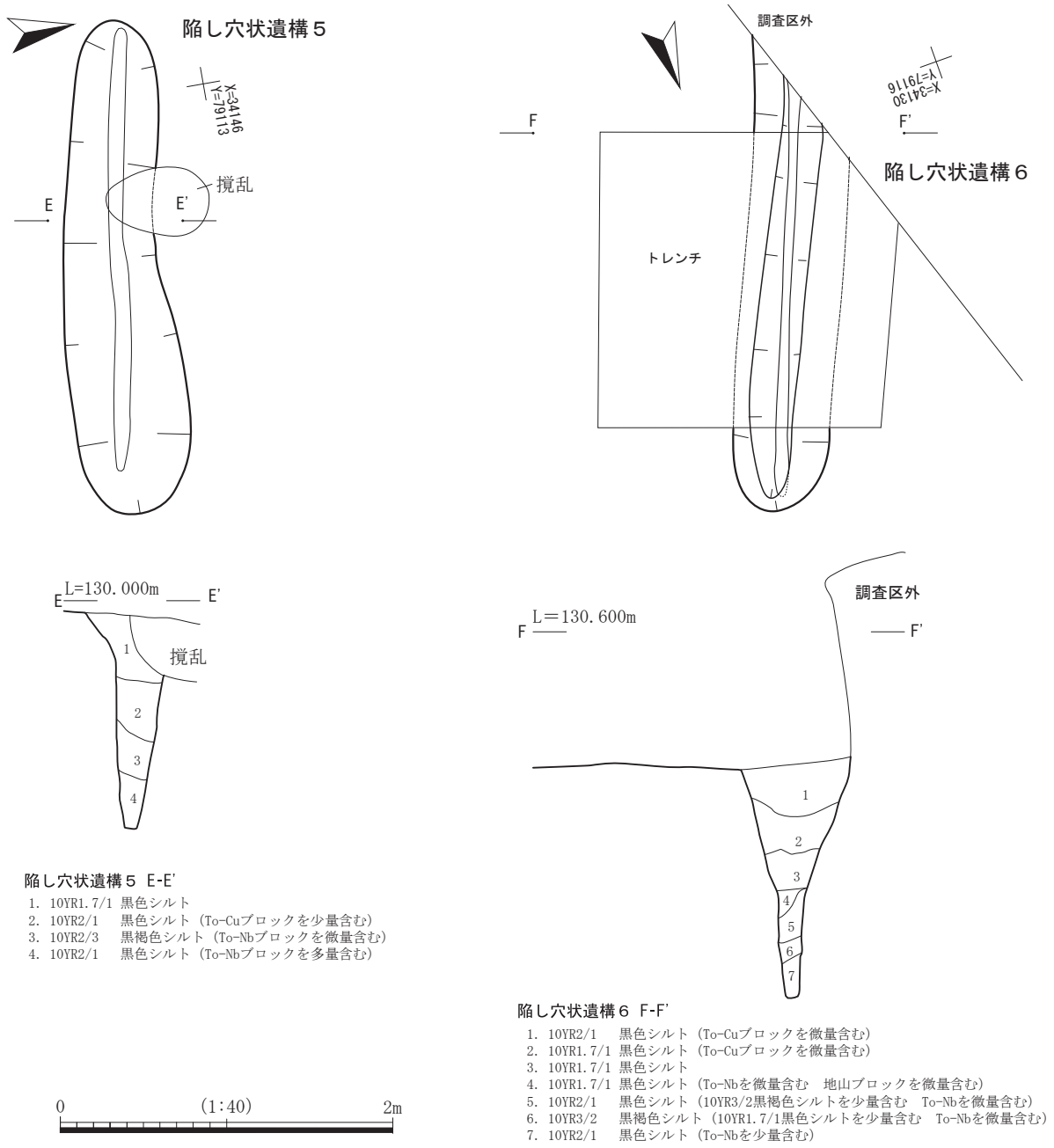
第５図　陥し穴状遺構３・４

土坑２（第８図、写真図版２）

調査区東端に位置する。平面楕円形で長軸は東西方向である。浅い皿形の土坑である。埋土は上下２層に区分可能である。上層は、遺構の中央にわずかな堆積が認められる黒褐色シルトである。下層は固く締まった暗褐色シルトであり、遺物包含層のⅥ層に酷似する。上下層ともわずかに南部浮石の粒が少量含まれている。堆積状況から自然に埋没したものと考えられる。性格不明ながら検出層位より縄文時代早期の遺構である可能性が高い。

遺物包含層（第９・10図、写真図版３）

遺物包含層（Ⅵ層）は調査区北東側に分布する。このⅥ層は土壌化していると考えられ、直上を南部浮石の再堆積層であるⅤ層に覆われている。Ⅵ層にも南部浮石の小粒子がわずかに認められる。Ⅴ層中にはシルトがわずかに混じっており、このシルトに土器片が少量含まれる。これら土器片はⅥ層出土のものと大きな型式差はないものと考えられる。遺物の分布範囲は図示（第９図）したが、この



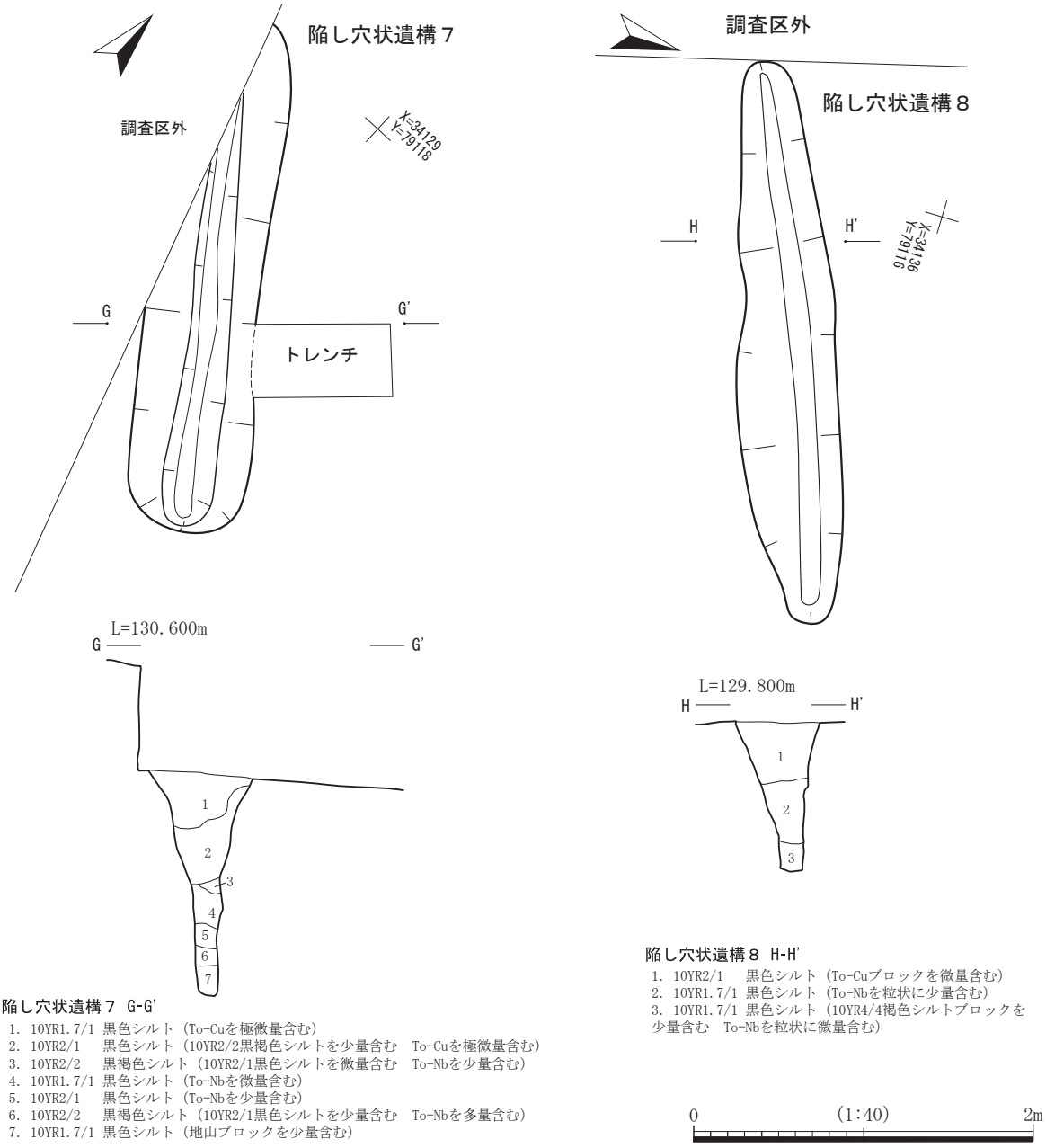
第６図　陥し穴状遺構５・６

Ⅵ層はもう少し広がりを有している。Ⅵ層における遺物の分布密度は１ｄ～１e、２ｄ～２e区付近が最も高い。遺物包含層範囲内に位置する風倒木痕はⅢ層上面で確認できたが、根によって上部へ巻き上げられたと思われるⅤ・Ⅵ層より土器片が出土した。

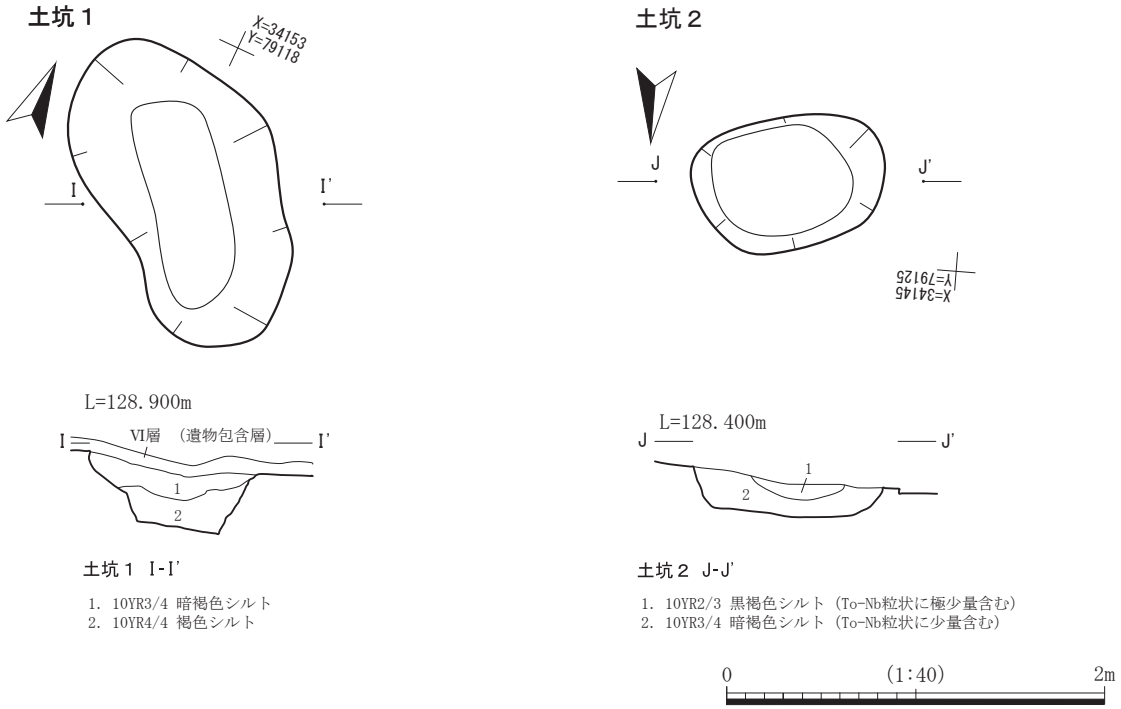
（２）遺物

土器（第11～14図、写真図版４～７）

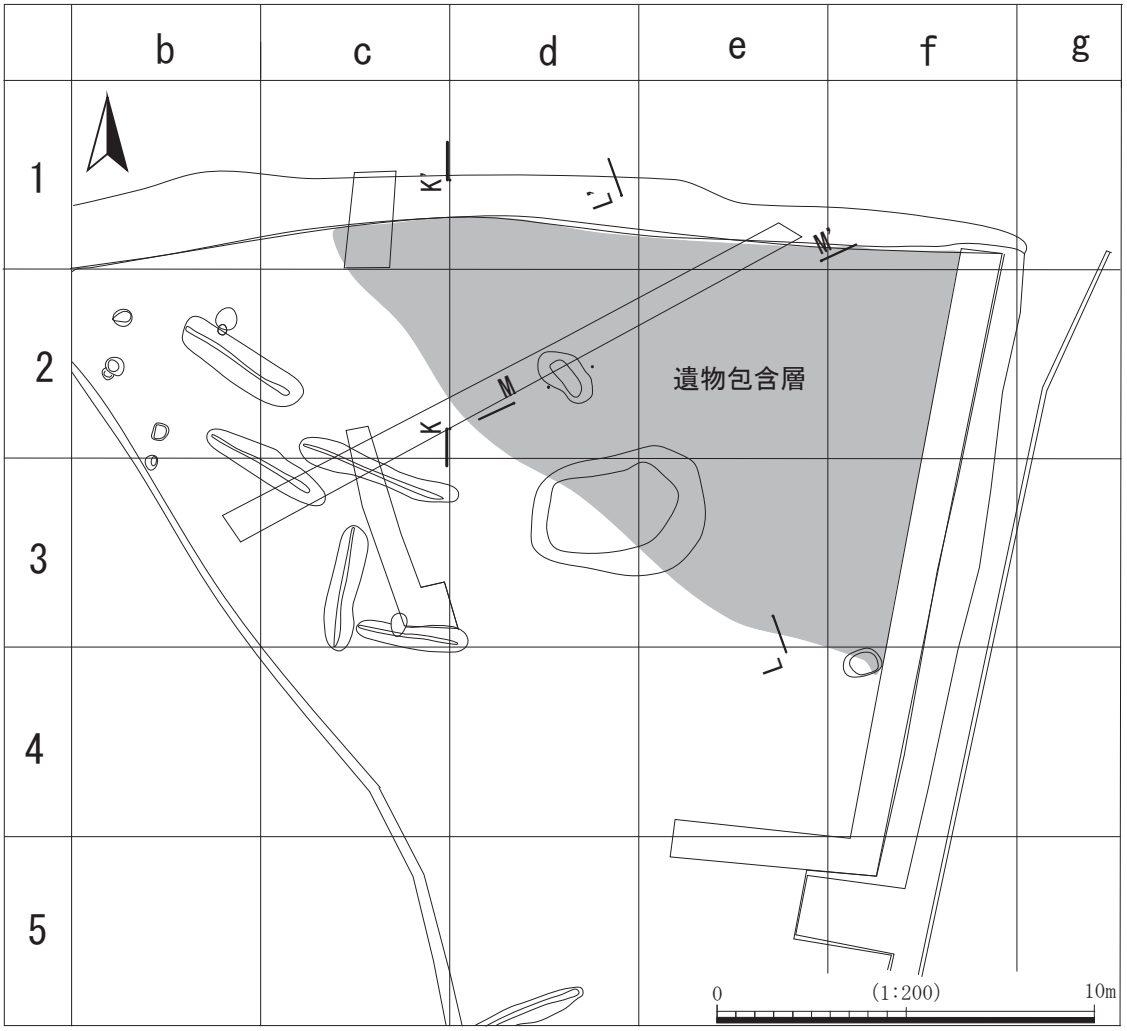
出土した土器は、逆三角形・尖底の器形で貝殻腹縁文や爪の押捺による刺突列、貝殻条痕による器面調整などが特徴として挙げられる。これらは縄文時代早期中葉の白浜式の特徴と一致する。なお、７・９・10・15など無文の口縁部片もあるが、出土状況に差異がなく同様の土器型式に該当すると想定する。１は口縁から体部上半片で、端部は棒状工具の押圧によって波形を形成している。この波形には細かな筋が横方向にみられるため絡条体工具を用いている可能性がある。口縁外面には２段縦位爪状刺突列、体部は斜位貝殻腹縁文で充填されている。２は上部に３段縦位爪状刺突列、下部は斜位沈線文が無数に認められる。３は外反する口縁部片で、端部に工具刺突列、その直下に２段縦位爪状



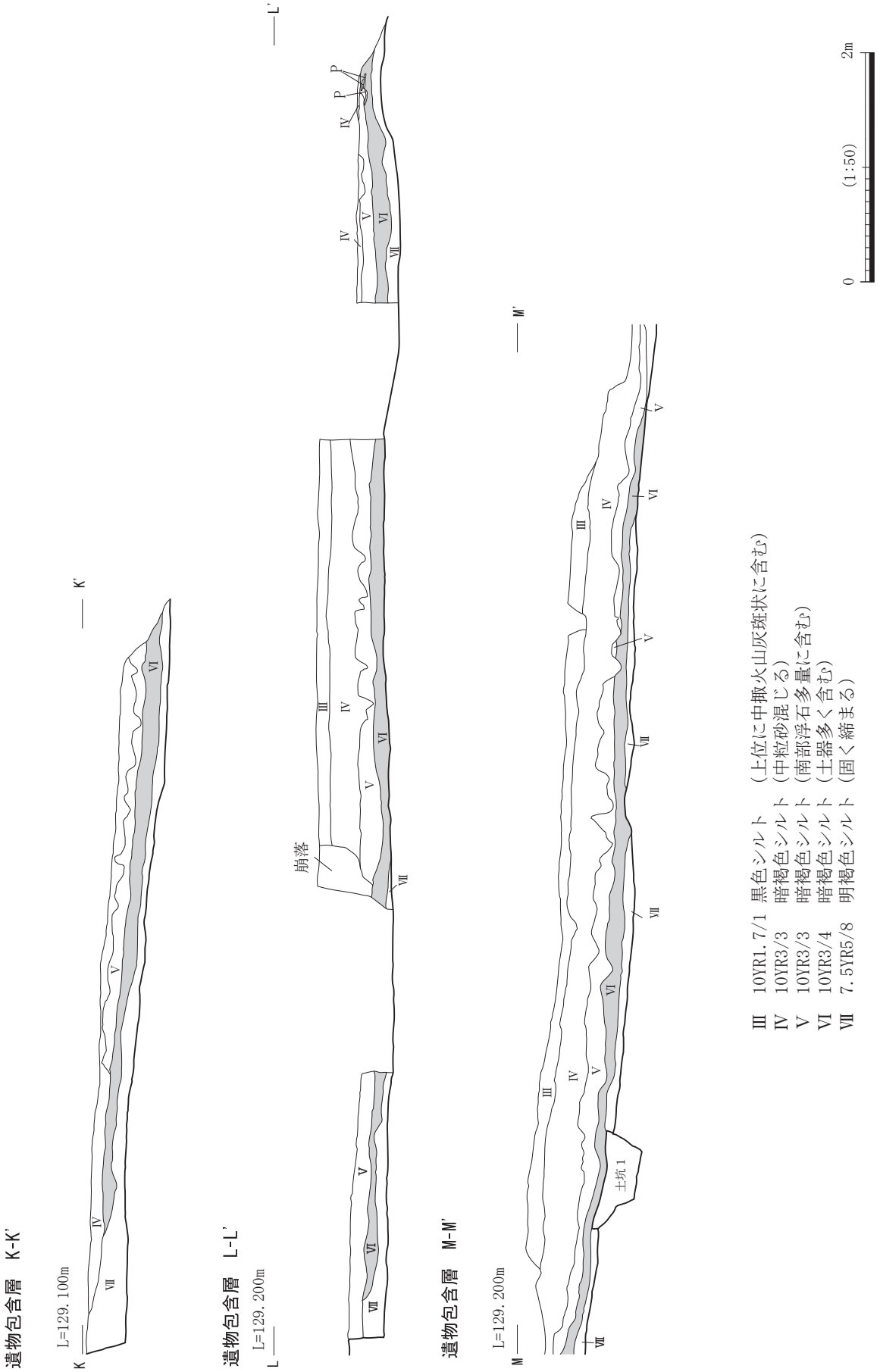
第７図　陷し穴状遺構７・８



第８図　土坑１・２



第９図　遺物包含層平面



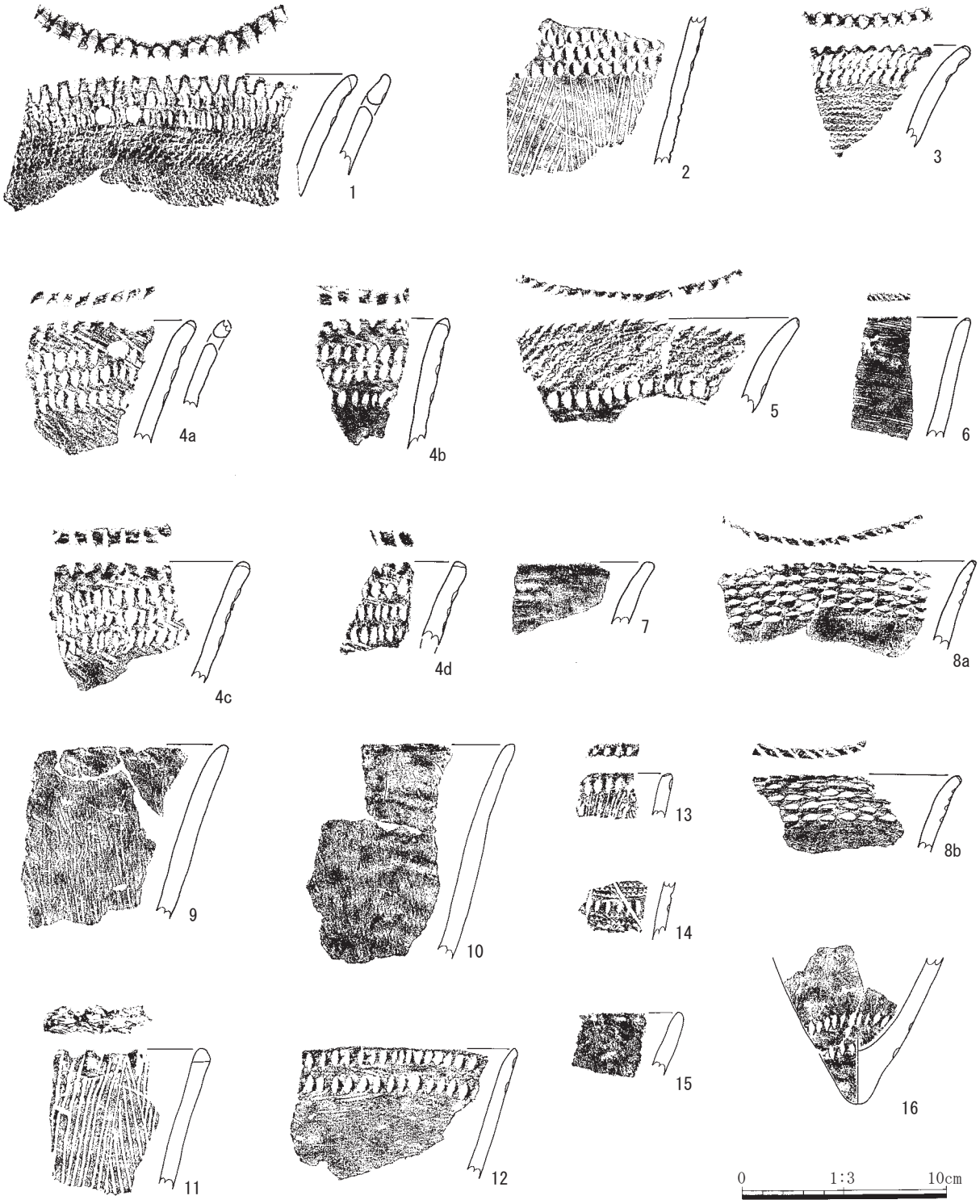
第10図　遺物包含層断面

刺突列、さらに下位は横位貝殻腹縁文が多数整然と配置されている。４は口縁端部に刻みが連続し、外面は３段縦位爪状刺突列が巡る。５は口縁端部に工具刺突列、口縁外面には斜位貝殻腹縁文、その直下には縦位爪状刺突列がそれぞれ巡る。６は外面に条痕がみられ、口縁部に爪による刻みが連続する口縁部片である。８は口縁端部に連続する刻み、口縁外面には４段横位爪状刺突列が巡る。11は端部絡条体工具の刻み、外面は絡条体縦位回転文で構成されている。12は口縁部外面に２段縦位爪状刺突列が巡る。13は口縁端部に連続工具圧痕、口縁外面は絡条体縦位回転文である。14は縦位爪状刺突列の上下が横位貝殻腹縁文で充填され、最後に斜位沈線が施された体部細片である。16は尖底の底部片である。底部より上位に２段斜位爪状刺突列がみられる。17は口縁から体部片である。口縁端部は貝殻腹縁文が連続し、口縁部外面は斜位貝殻腹縁文が巡る。その直下に縦位爪状刺突列が認められ、口縁部文様帯の下端を区画している。18は体部下半片である。19は口縁端部に工具による刻みが連続し、口縁外面には斜格子の沈線が展開し、その下部には先端の丸い工具による微かな刺突列が認められる。その下部は水平方向の沈線で上下が区分され、斜位沈線が規則的に並ぶ。20は口縁から体部片である。口縁端部は棒状工具側面の押圧によって凹凸がある。その直下の口縁外面には２段斜位爪状刺突列が巡る。体部下半の破片には細かな擦痕文が横位や斜位に認められる。21は半身のみ口縁から底部付近まで残存する。口縁端部には貝殻腹縁文が施されている。22は口縁から底部まで残存する。口縁部外面には貝殻腹縁文が斜位に連続し全周する。その直下には４段横位貝殻腹縁文が配列される。23は口縁端部に貝殻腹縁文が一定間隔で連続し、口縁部外面には３段縦位爪状刺突列が全周する。器表面を観察すると胎土に細かな繊維状の痕跡が認められ、混和材の可能性が高い。24は体部下半から底部が残存する。上位には20と似る細かな擦痕文が認められ、20・24が同一個体の可能性も考えられる。25は口縁から底部まで良好に残存する。口縁端部を俯瞰すると貝殻腹縁文が斜位に一定間隔で連続する。口縁部外面には３段斜位爪状刺突列が施されているが、その下地には体部から連続する横位貝殻条痕が認められる。同様に口縁部内面には横位、体部内面は縦位の内面にも貝殻条痕による器面調整がみられる。26は口縁から底部までの半身が残存する。口縁端部には俯瞰すると爪状刺突列が巡る。口縁部外面には上から順に２段斜位爪状刺突列、７段横位貝殻腹縁文、縦位爪状刺突列が全周する。27は体部中位から下半にかけての破片であるが残存部位は全周する。体部中位には全周する２段縦位爪状刺突列による文様帯が設けられており、その内部を横位貝殻腹縁文で充填され、その上から斜め左下がりの平行する２本の沈線が約６㎝間隔で認められる。同様の文様帯はさらに上部にもあり、２本の沈線は右下がりである。28は口縁から体部中位まで残存する。口縁部外面は上端に２段斜位爪状刺突列、無文帯を挟んでその下部にも２段斜位爪状刺突列が並ぶ。これら爪状刺突は刺突の浅いものや深いものが混在している。また、下段のものは列を成しているが、不均等で不整な並びである。29は口縁から底部までの破片多数だが、接合しない。口縁端部は連続工具圧痕、口縁外面上端には２段横位爪状刺突列、その直下に斜位貝殻腹縁文、さらに縦位爪状刺突列、２段横位爪状刺突列と続く。体部には文様空隙を置き、２段横位爪状刺突列が巡る。その他体部には斜位擦痕文がみられ、体部下半では斜格子状に配置されている。

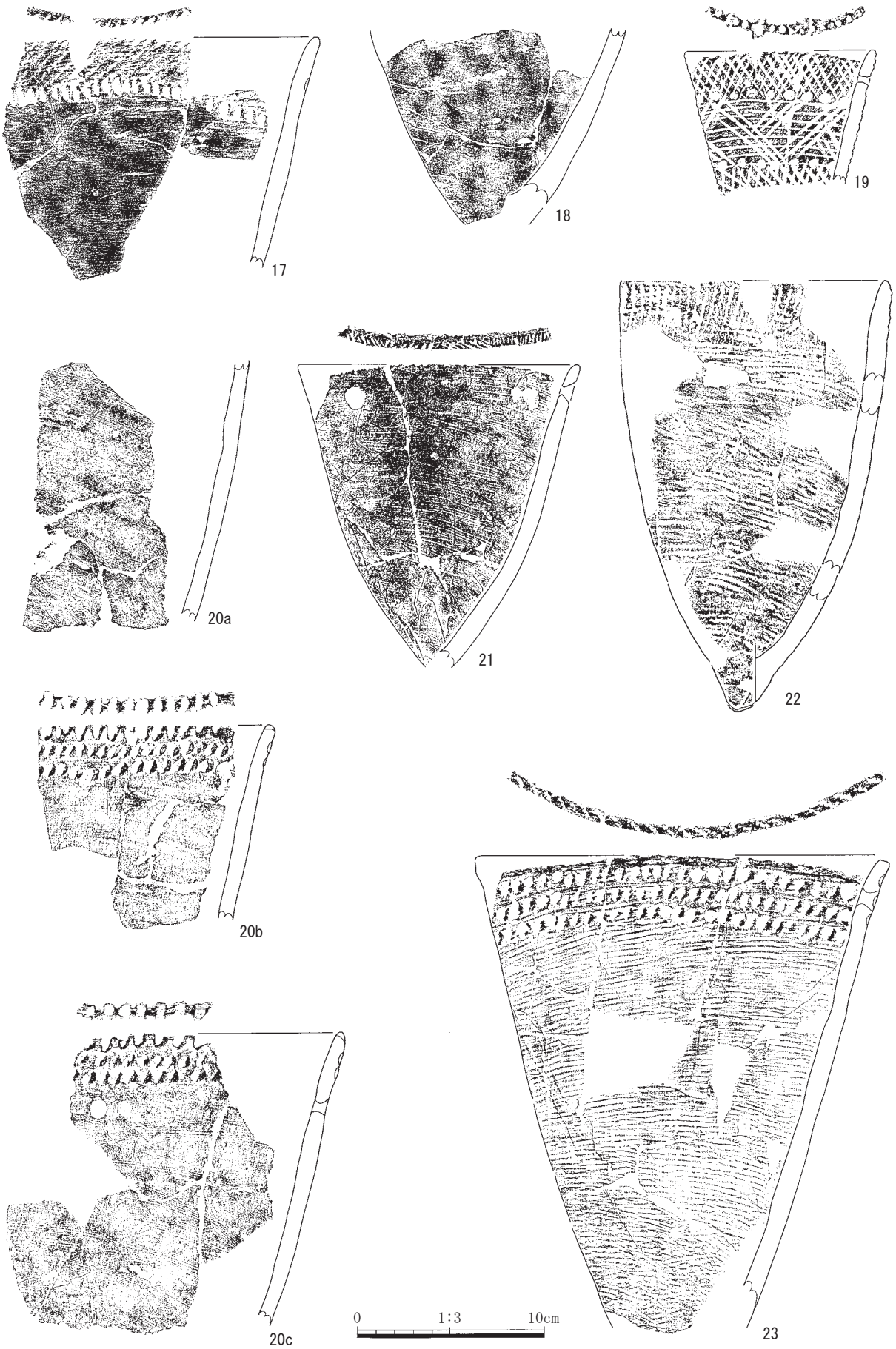
以上のように、出土した早期の土器は一部を除き、口縁部外面に文様帯が設定され、爪状刺突列や貝殻腹縁文が施されている。また、口唇部に刻みや圧痕が認められる例もあるが、口縁部の形態は水平である。体部や底部付近に文様が施される土器もあるが、その数は極めて少ない傾向である。文様下地には器面調整がなされており、二枚貝の腹縁を用いた条痕が主となる。乾燥が進んでから施された条痕の場合は、器表面が光沢を帯びたミガキ調整と化している。大半の土器の胎土は精良で焼成も良好であり、非常に緻密で丁寧な製作がなされたものと思われる。

石製品・石器（第14図、写真図版７）

１点の石製品、２点の剥片石器、３点の礫石器を選び掲載した。30は用途不明の砂岩製の石製品である。表面には溝状の凹凸があり、その裏面にも大半が欠損しているが、同様の凹凸が存在したと推測される痕跡が微かに認められる。その一方で、両側面には平滑な面がみられる。溝状の凹面を利用し、細く柔らかい対象物を研磨した可能性も考えられる。31・32は石篦である。31は頁岩製、32は風化した頁岩製である。33・34は磨石片であり、35は側縁に敲打痕のある敲磨器である。

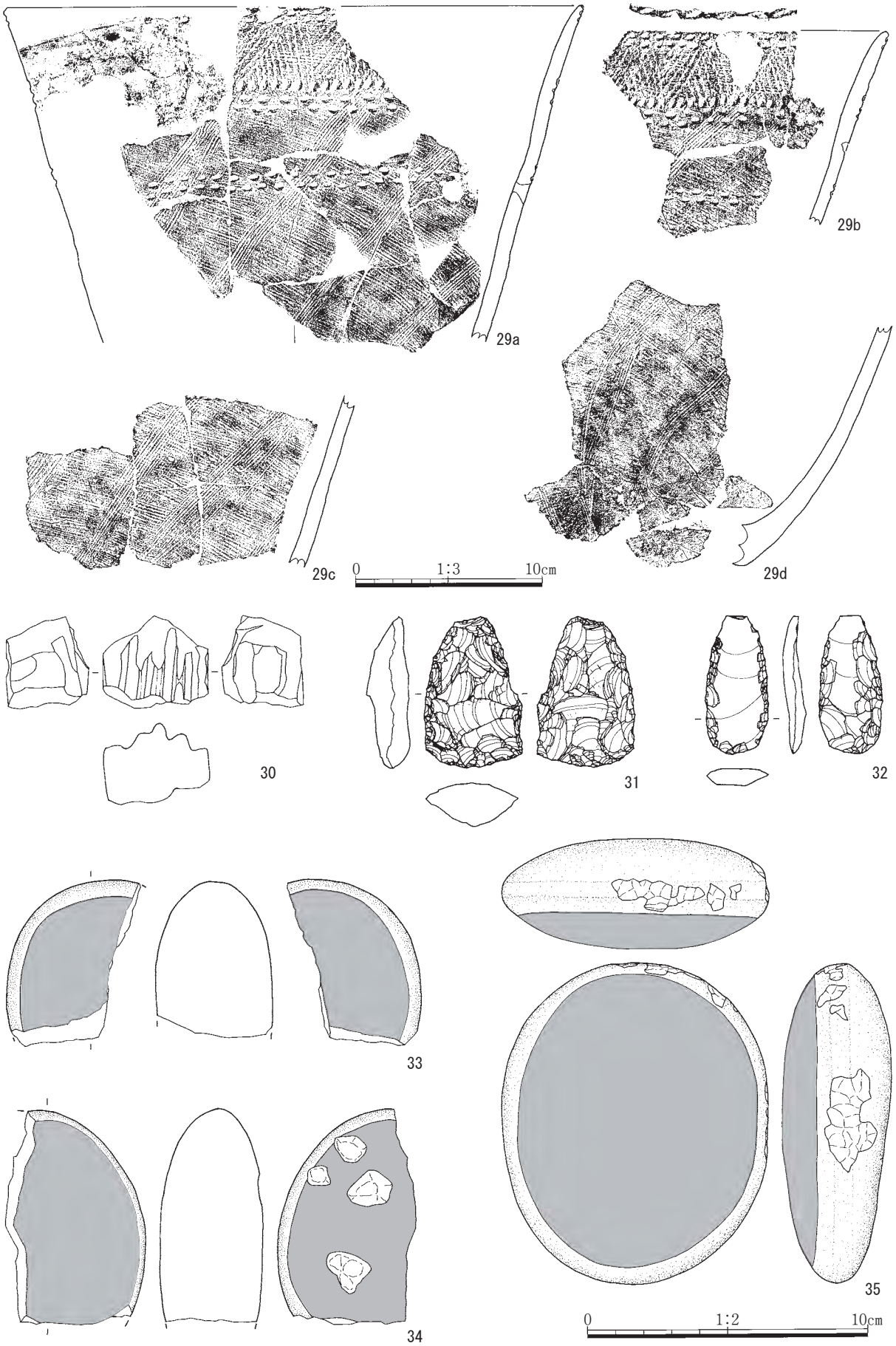


第11図　出土遺物



第12図　出土遺物

第13図　出土遺物



第14図　出土遺物

表１　中野城内遺跡掲載遺物一覧（縄文時代早期土器）

掲載No.	残存部位	出土状況	おもな文様	備考
1	口縁～体部	１e・２e区Ⅵ層	爪状刺突列・貝殻腹縁文	補修孔あり。
2	体部	２e区Ⅵ層	爪状刺突列・沈線文?	沈線は絡条体回転文の可能性あり。
3	口縁部	１d区Ⅵ層	爪状刺突列・貝殻腹縁文	
4	口縁部	１d区Ⅵ層	爪状刺突列・貝殻腹縁文	補修孔あり。
5	口縁部	１d区Ⅴ層、１d区Ⅵ層	爪状刺突列・貝殻腹縁文	
6	口縁部	２e区Ⅵ層	貝殻条痕のみ	
7	口縁部	１d区Ⅵ層	無文	
8	口縁部	２e・２f区Ⅵ層	爪状刺突列	
9	口縁部	１e区Ⅵ層、風倒木	無文	
10	口縁部	１d区Ⅵ層	無文	
11	口縁部	２e区Ⅵ層	絡条体回転文	
12	口縁部	風倒木	爪状刺突列	
13	口縁部	風倒木	絡条体回転文	
14	体部	２d区Ⅵ層	爪状刺突列・貝殻腹縁文	
15	口縁部	１e区Ⅵ層	無文	
16	底部	２d区Ⅵ層	爪状刺突列	
17	口縁～体部	１f・２e区Ⅵ層	爪状刺突列・貝殻腹縁文	
18	体部	２e区Ⅵ層	無文	
19	口縁～体部	１d区Ⅵ層	沈線文、工具刺突列	補修孔あり。
20	口～体部	２e区Ⅵ層、風倒木	爪状刺突列・擦痕文	23と同一個体？補修孔あり。
21	口縁～底部	２ｆ区Ⅵ層	貝殻腹縁文	補修孔あり。
22	口縁～底部	１d・１d・２e区他Ⅵ層	貝殻腹縁文	
23	口縁～体部	１d・２e区Ⅵ層他、土坑１	爪状刺突列・貝殻腹縁文	胎土に繊維状混和材、補修孔あり。
24	体～底部	２e区Ⅵ層	擦痕文	22と同一個体？
25	口縁～底部	１e・２e区Ⅵ層	爪状刺突列・貝殻腹縁文	
26	口縁～底部	２e区Ⅵ層	爪状刺突列・貝殻腹縁文	
27	体部	１d区Ⅵ層	爪状刺突列・貝殻腹縁文・沈線文	
28	口縁～体部	１d・２d区Ⅵ層	爪状刺突列	
29	口縁～底部	１d・１c区Ⅴ層、Ⅵ層	爪状刺突列・貝殻腹縁文・擦痕文	

表２　中野城内遺跡掲載遺物一覧（石器）

掲載No.	器種	出土状況	寸法（cm）			重さ（g）	備考
			長さ	幅	厚さ		
30	不明石製品	２e区Ⅵ層	3.75	3.3	2.85	31.8	砂岩製
31	石篦	２e区Ⅵ層	5.4	3.5	1.55	26.2	頁岩製
32	石篦	１d区Ⅴ～Ⅵ層	4.9	2.25	0.8	8.3	頁岩製？
33	磨石	１d区Ⅵ層	5.9	4.8	4.2	152.1	細粒閃緑岩
34	磨石	１e区Ⅵ層	7.7	5.0	3.7	213.2	細粒閃緑岩
35	敲磨器	１e区Ⅵ層	11.5	9.5	3.9	597.8	細粒閃緑岩
36	石核	陥し穴状遺構２埋土中位	7.1	5.2	4.2	210.0	未加工の玉髄？写真のみ掲載

５　まとめ

今回の発掘調査の結果から中野城内遺跡は縄文時代中期以降の狩猟域であると考えられる。さらに、縄文時代早期の土坑の存在から周辺に当該期の生活拠点が存在する可能性が高い。これは遺物包含層から縄文時代早期中葉の土器が多く出土していることからも言及できる。出土土器は、いわゆる白浜式の特徴を具備しており、早期中葉の古相に該当するとみられる。これらの土器および、わずかながらも同一層より出土した石器・石製品は、これまで出土数が限定的であるため貴重な出土事例である。

なお、中野城内遺跡平成29年度調査に関する報告は、これをもって全てとする。

参考文献

海峡土器編年研究会編　2006　『第４回　縄文時代早期中葉土器群の再検討－資料集－』

調査区全景（北から）

陥し穴状遺構１断面（南東から）

陥し穴状遺構２断面（南東から）

陥し穴状遺構３断面（東から）

陥し穴状遺構４断面（南から）

写真図版１　調査区全景、陥し穴状遺構１～４

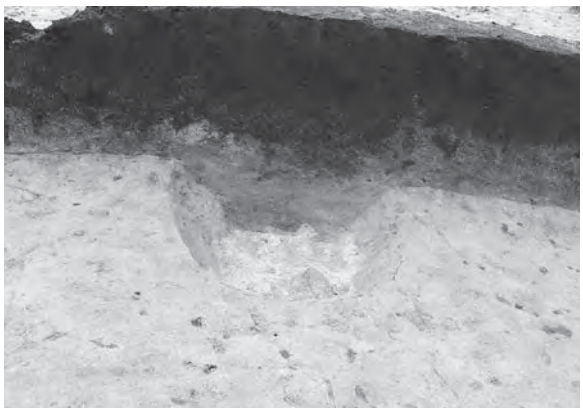
陥し穴状遺構５断面（東から）

陥し穴状遺構６断面（北東から）

陥し穴状遺構７断面（南東から）

陥し穴状遺構８断面（東から）

土坑１全景（南から）

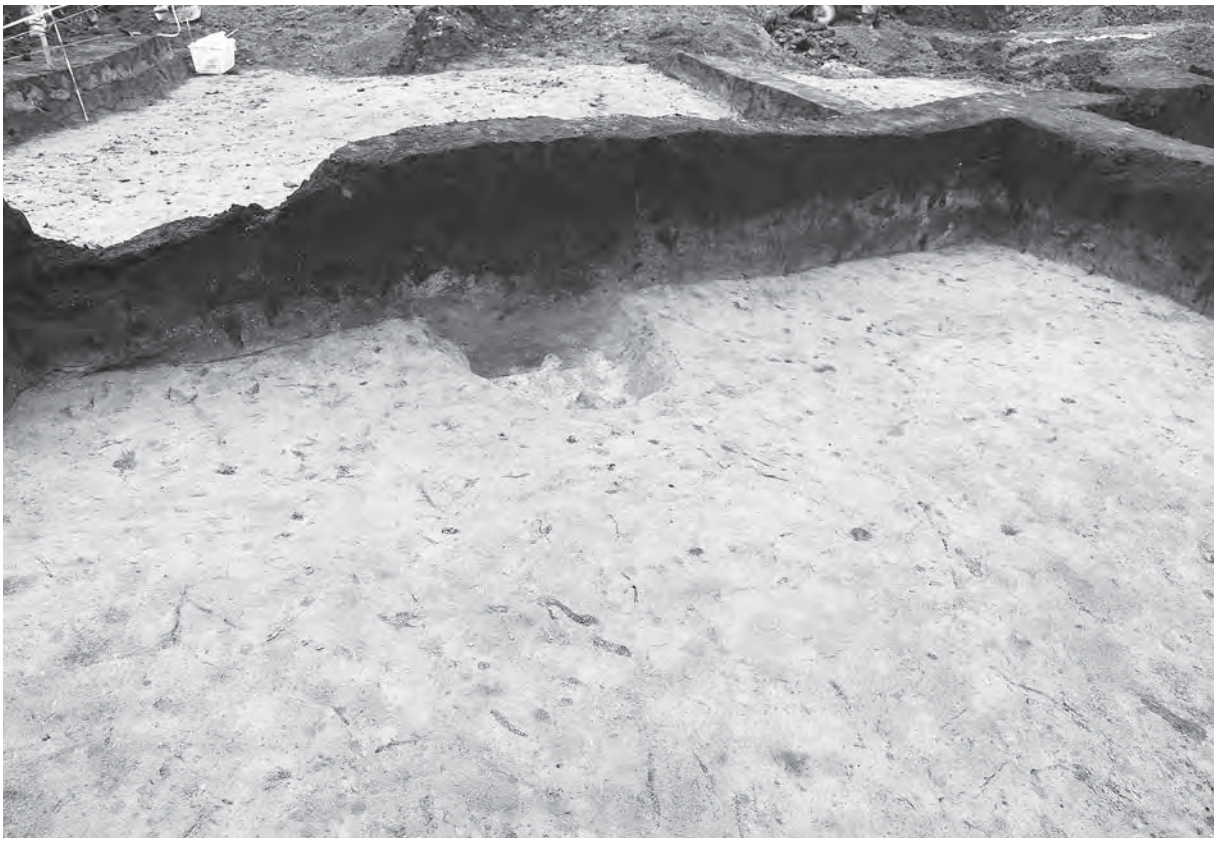


土坑１断面（南から）

土坑２全景（南から）

土坑２断面（北から）

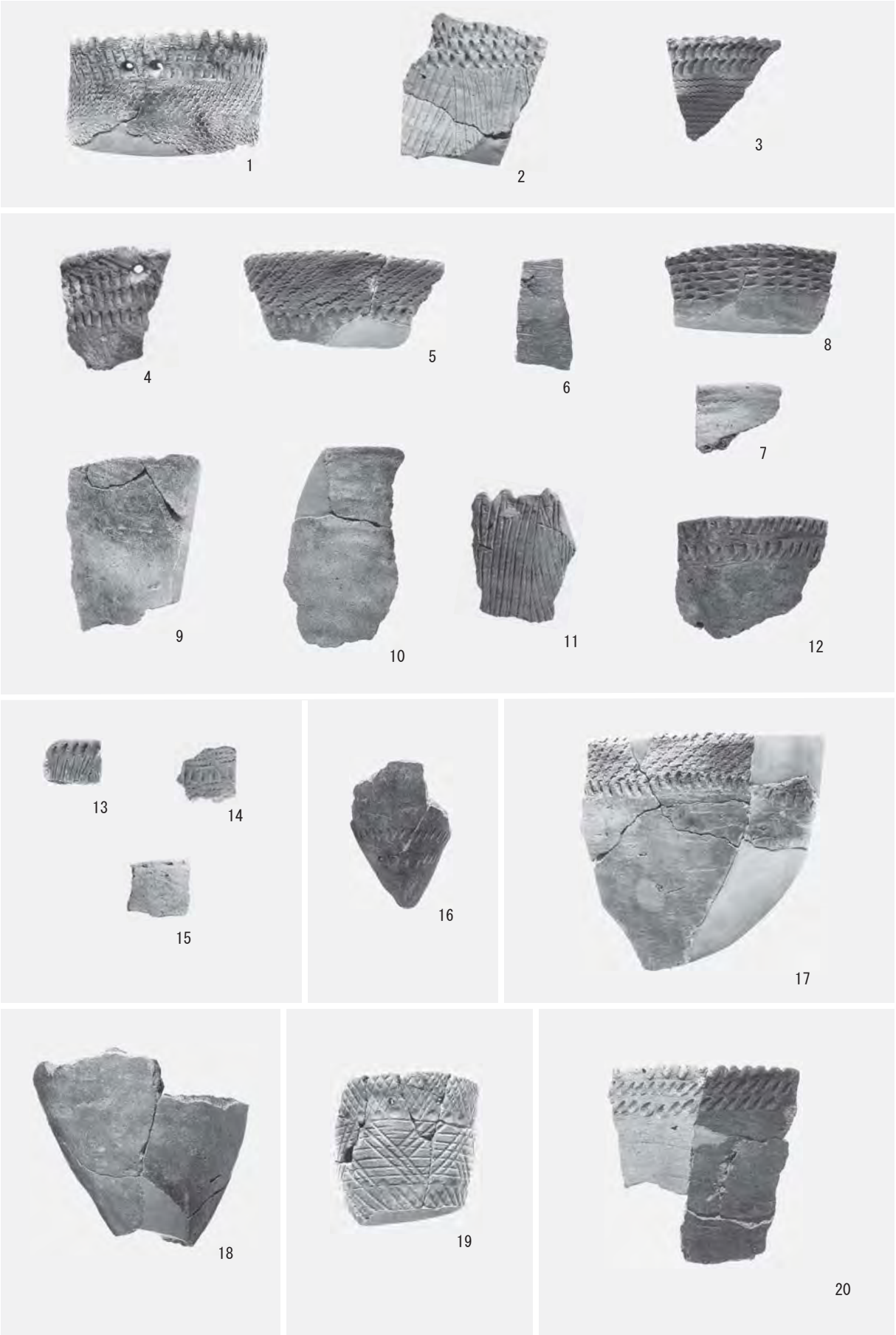
写真図版2　陥し穴状遺構５～８、土坑１・２



遺物包含層断面（南東から）

遺物包含層断面（東から）

写真図版3　遺物包含層断面



写真図版4　出土遺物

写真図版５　出土遺物

写真図版６　出土遺物

写真図版７　出土遺物

（6）沼里（ぬまり）遺跡

所在地	宮古市津軽石第４地割24-７	**遺跡コード・略号**	LG53-1225・NR-17
委託者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	**調査対象面積**	481㎡
事業名	三陸沿岸道路	**調査終了面積**	481㎡
発掘調査期間	平成29年９月19日～10月12日	**調査担当者**	菊池貴広・遠藤 修・佐々木あゆみ

１　調査に至る経過

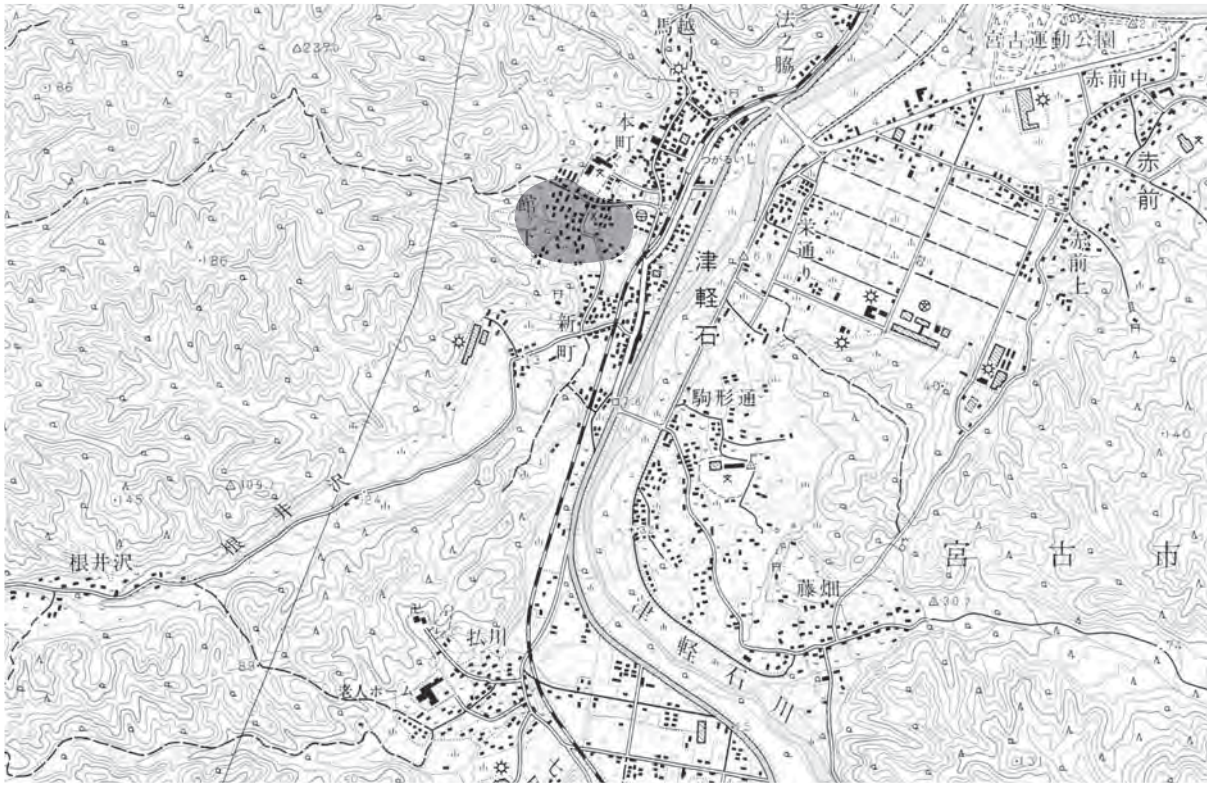
沼里遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（山田～宮古南）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年２月１日付け国東整陸一調第1102号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年２月５日～７日にわたり試掘調査を行い、平成25年２月18日付け教生第1575号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成29年４月３日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）



1：25,000　津軽石

第１図　遺跡の位置

２　遺跡の位置と立地

遺跡は、宮古市立津軽石小学校から約100m南西側の丘陵地に位置する。標高は20～30m程である。調査区の東側は小高い尾根が東西方向に延び、それに沿うような形で南北に緩斜面が広がる。この緩斜面は尾根と尾根の谷地にあたり、遺跡の北西側から北側を回り込むように沼里川が東流する。

３　グリッド設定・基本層序（第３・４図）

グリッドは平成28年度調査のグリッドに準じて、大グリッド20m、小グリッド４ｍメッシュで設定した。基本層序Ａ地点は、Ⅰａ・ｂ層が斜面から流れ込んだマサ土を含む黒褐色土・Ⅱ層が遺物包含層となっている。Ⅲ層が本遺跡の最終検出面である。基本層序Ｂ地点の表土下はマサ土、基本層序Ｃ地点の表土下は砂礫層となっている。

４　調査の概要

試掘溝を設定し、Ⅱ層面で出土遺物を確認したことから、Ⅰ層を重機によって除去しⅡ層面で検出を行った。遺構の有無を確認することが困難だったことから、Ⅱ層からⅢ層まで格子状に試掘溝を増やした。試掘溝底面（Ⅲ層）で２・３号竪穴住居のプランを想定することが出来た。竪穴住居埋土とⅡ層が近似する黒色土であったことから、埋土とⅡ層を明確に区分することが出来なかった。竪穴住居上部から出土した遺物は、遺構内出土遺物として取り上げている。遺構番号は、検出順に１号・２号と命名した。精査途中で遺構と認定できないものは、欠番とした。

（１）遺構と遺構内出土遺物

２号竪穴住居（第６図、写真図版２）

（位置・検出状況）ⅢＢ６・７グリッドに位置する。基本層序ＡのⅢ層で南側壁面プランを確認した。

（重複関係・平面形・規模・埋土）３号竪穴住居に截られる。斜面下方の壁面を確認することが出来なかった。平面形は円形を呈するものと思われる。規模は残存値径512㎝である。埋土は黒褐色土の単層である。

（壁）Ⅲ・Ⅳ層を壁とし床面から直立ぎみに外傾する。床面までの残存深度は60㎝である。

（床面）遺構構築時にⅢ・Ⅳ層まで掘り込み、ほぼ平坦で固く締まる。貼床は施されていない。

（柱穴）配置からＰ１・Ｐ２と思われる。他の床面で検出した柱穴状土坑群は、竪穴住居周辺で検出された柱穴状土坑群と埋土が同類であることから、本遺構に伴わないものと判断した。

（炉）検出されなかった。３号竪穴住居に截られた部分に設置されていたかもしれない。

（その他）床面から10～20㎝の高さで焼土・炭化物を確認した。焼失住居の可能性が考えられる。

出土遺物（第８図、写真図版５）

（出土状況）土器1232.6ｇ、石器・剥片1075.2ｇが出土した。埋土下位から10・13～15・22・23が出土している。床面からの出土遺物はない。出土した土器の大半は弥生土器である。１はＬＲ縄文に補修孔、２は隆帯が施される縄文土器である。３は縄文時代晩期末葉～弥生時代前期前半の高坏もしくは鉢と思われる。鋸歯文（５～７）、沈線内に刺突文（８～11）、連孤文（12～14）、平行沈線（４･15～17）、三角文もしくは眼鏡状文（18・19）、沈線（20・21）が施される土器は弥生時代中期の川岸場段階～兵庫館段階と思われる（石川2005）。粗製土器では口唇部に指頭圧痕が施されるもの（23）がある。石器は掻・削器（24）、石斧（25・26）、凹石（27）が出土している。

（時期）出土炭化物の放射性炭素年代測定を行った。^{14}C年代は№３が2,490±20yrBP、№４が2,450±20yrBPである。放射性炭素年代測定の結果と出土遺物から、縄文時代晩期後葉～弥生時代の遺構と考えられる（加速器分析研究所2017）。炭化物の樹種はクリである。

３号竪穴住居（第６図、写真図版２・３）

（位置・検出状況）ⅢＢ２・７グリッドに位置する。２号竪穴住居床面精査時に方形状プランとして確認した。検出面は基本層序ＡのⅢ・Ⅳ層である。

（重複関係・平面形・規模・埋土）２号竪穴住居を截る。平面形は方形状を呈する。規模は径335×316㎝である。埋土は黒褐色土の単層である。

（壁）Ⅲ・Ⅳ層を壁とし床面から直立ぎみに外傾する。床面までの残存深度は31㎝である。

（床面）遺構構築時にⅢ・Ⅳ層まで掘り込み、貼床が施される。ほぼ平坦で固く締まる。

（柱穴）貼床除去後に４個検出された。埋土は黒褐色土の単層である。深さは11～31㎝である。

（炉）地床炉である。試掘溝で一部消失したが、楕円形を呈するものと思われる。

出土遺物（第９図、写真図版６）

（出土状況）土器1232.1ｇ、石器・剥片1246.5ｇが出土した。床面から土師器の長胴甕（28）と球胴甕（29）が出土している。28は外面の口縁部・頸部ナデ、体部ミガキ、底部直上ケズリ、内面は胴部上半がナデ、下半にミガキ調整が施される。器形・調整から７世紀中葉～８世紀前葉のものと思われる。29は球胴甕の頸部から肩部である。内外面にナデ調整が施される。胴部中央付近が最大径になると思われる。器形から28と同じく７世紀中葉～８世紀前葉のものと思われる。埋土下位から、平行沈線（31）、口唇部に刻目・三角文（32）が施される弥生時代前期～中期の土器、貼床からＬＲ縄文が施される土器片（33）が出土している。石器は掻・削器１点（34）が出土している。

（時期）床面から出土した28・29に着目して７世紀中葉から８世紀前葉の遺構と思われる。

１号住居状遺構（第６図、写真図版２）

（位置・検出状況）ⅢＢ12グリッドに位置する。検出面は基本層序ＡのⅢ層である。

（重複関係・平面形・規模・埋土）試掘溝により壁・底面の一部を消失したことにより、平面形・規模の詳細を把握することは出来なかった。また、２号竪穴住居に截られる住居、あるいは２号竪穴住居に伴う施設の可能性も考えられるが、特定することはできなかった。埋土は黒色土・黒褐色土で構成される。

（壁）Ⅲ層を壁とする。床面までの残存深度は46㎝である。

（床面）遺構構築時にⅢ層まで掘り込み、ほぼ平坦で固く締まる。貼床は施されていない。

（柱穴）確認されなかった。

（出土遺物）なし。

１号土坑（第７図、写真図版４）

（検出状況）ⅢＡ13グリッドに位置する。基本層序Ｃ地点の砂礫層で検出した。黒褐色の円形プランとして確認した。

（形状・規模）円形を呈する。規模は径79×74㎝。深さは15㎝である。

（壁面・底面）砂礫層を壁及び底面とする。壁は外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

（埋土・出土遺物）３層に細分した。黒褐色土を主体に構成される。出土遺物はない。

（時期）時期を決定する資料を欠き詳細は不明である。

１号焼土遺構（第７図、写真図版４）

ⅢＢ２グリッドに位置する。基本層序ＡのⅢ層上面で検出された。形状は不整形を呈し、規模は径80×65㎝、厚さ13㎝である。時期は検出面から縄文時代と考えられる。

２号焼土遺構（第７図、写真図版４）

ⅢＡ22グリッドに位置する。基本層序Ｃの砂礫層で検出された。形状は円形を呈する。規模は径28×23㎝、厚さ４㎝である。時期は検出面から縄文時代と考えられる。

３号焼土遺構（第７図、写真図版４）

ⅢＢ11グリッドに位置する。基本層序ＡのⅢ層で検出された。窪地に形成されたもので、形状は不整形を呈する。規模は南東側54×19㎝、厚さ４㎝。北西側33×24㎝、厚さ６㎝である。時期は炭化物の放射性炭素年代測定の結果、2,480±20yrBPという^{14}C年代が得られている。周辺から遺物番号40が出土していることから、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期前半と考えられる。

柱穴状土坑群（第５図、写真図版１）

Ⅲ層上面で47基検出された。規則性のある配置を確認することは出来なかった。斜位に付設されるもの、直立に付設されるものがある。全ての柱穴状土坑は、単層で埋土はⅡ層起源の黒色土で構成される。時期を決定する資料を欠き、詳細は不明である。

（２）遺構外出土遺物

出土遺物は遺構内外合わせて、土器大コンテナ１箱、石器・剥片小コンテナ１箱が出土した。土器の大半はⅡ層と付した包含層からの出土で、弥生時代中期の土器が大半を占める。包含層から出土した土器を以下のように分類した。

Ⅰ群　縄文時代中期～後期（第９図、写真図版６　35～37）

綾絡文（35）、ＬＲ縄文（36）、磨消縄文が施されるもの（37）が出土している。38は縄文時代の透かし彫りの器台である。

Ⅱ群　大洞Ａ'式～砂沢式（第９図、写真図版６　40・41）

40・41は内外面に沈線・無文部にミガキ調整が施される高坏もしくは鉢と思われる。

Ⅲ群　弥生時代中期～後期（第９・10図、写真図版６・７　39・42～69）

ａ類　弥生時代中期中葉（第９・10図、写真図版６・７　39・42～56）

39は鉢の脚部である。４単位の脚部外面にRL縄文が施される。対になる２脚に孔が認められる。沈線内の縄文地に刺突文（42・46～48）、平行沈線間に刺突文（43～45）、連孤文（49・50）、三角文もしくは眼鏡状文（51～55）、鋸歯文（56）が施される。56は頸部の平行沈線間に鋸歯文を巡らし、体部に縄文が施されていないことから、土師器として扱うことも検討したが、頸部に段がなく、口唇部に指頭圧痕が施されている点から本類と判断した（石川2005）。川岸場式段階に相当する。

ｂ類　弥生時代中期後半（小田野編年Ⅲ期～Ⅳ期の土器）（第10図、写真図版７　58～63）

土器は沈線の太さ・文様（ａ類より沈線幅が細く、構図が稚拙）・縄文原体の節（ａ類より小さい）に着目して本類として掲載した。枠状文（58）、連孤文（60～62）、口唇部に刻目（63）が出土している小田野編年Ⅲ～Ⅳ期・兵庫館式～橋本式段階相当と思われる（石川2005、小田野1987）。

ｃ類　弥生時代中期中葉～後半（第10図、写真図版７　65ａ・ｂ）

渦文が施され、肩部付近が最大径になると思われる。ａ・ｂ類と比較して、焼成状態は良好で無文部に光沢がある。仙台平野桝形式相当、会津盆地の南御山２式、二ツ釜式相当、秋田県宇津ノ台式相当と思われる（佐藤2015）。

ｄ類　弥生時代後期（第10図、写真図版７　57）

天王山式相当の壺と思われる。

ｅ類　上記以外の土器（第10図、写真図版７　64・66～69）

64は隆帯に刻目が施される。66は口唇部に縄文、頸部に沈線が施される（外面すす付着）。67は高坏の脚部で谷起島式段階と思われる（石川2005）。その他底面が高台状のもの（69）がある。

Ⅳ群　古代の土器（第10図、写真図版７　70～73）

70は内面黒色処理、内外面ミガキ調整が施される土師器の坏、71は外面ハケメ、内面ナデ調整が施される土師器の甕である。共に８世紀代のものと思われる。72は口唇部が尖る土師器の甕である。73は外面ケズリ、内面ナデ調整が施される土師器の甕である。

石器（第10図、写真図版７　74・75）

２点出土した。74は細部加工剥離調整が表裏全面に及ぶ有茎の石鏃である。75はつまみ部が作出され、主な剥離調整は片面に施された側縁に刃部をもつ石匙である。

５　まとめ

遺構

今回の発掘調査で縄文時代晩期後葉～弥生時代の竪穴住居１棟、７～８世紀代の竪穴住居１棟が検出された。７～８世紀代として位置づけた３号竪穴住居はカマドが付設されず、床面中央部に地床炉を伴うものである。周辺の遺跡（平成28年度調査沼里遺跡、金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡、津軽石大森遺跡）の調査ではカマドが付設されない竪穴住居は検出されていない。

遺物

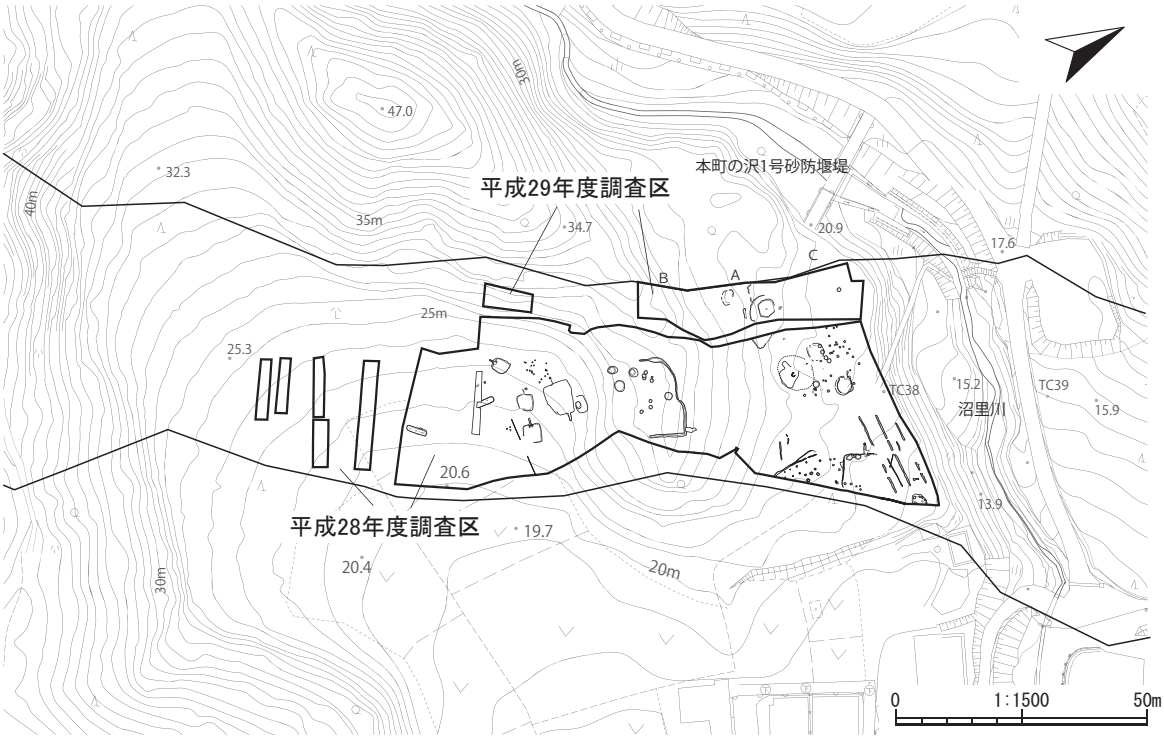
大半が弥生時代中期の土器である。弥生土器は、北上川流域に分布する川岸場段階のものが主である。県内の弥生時代中期の土器を概観すると、馬淵川流域では、北上川流域で散見される谷起島式新段階・川岸場式段階と田舎館式・二枚橋式に類似する土器が出土している。谷起島・川岸場段階の土器は節の小さいＬＲ縄文、田舎館・二枚橋式に類似する土器は節が大きいＲＬ縄文が施される傾向がある。本遺跡Ⅲ群土器の大半はＬＲ縄文が施される。

遺物番号65の渦文は東北南部、日本海側に分布の主体を持つ土器である。このことから、当地域では北上川流域と東北南部・秋田日本海側と関連の深い土器が出土する傾向が窺える。

なお、沼里遺跡平成29年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

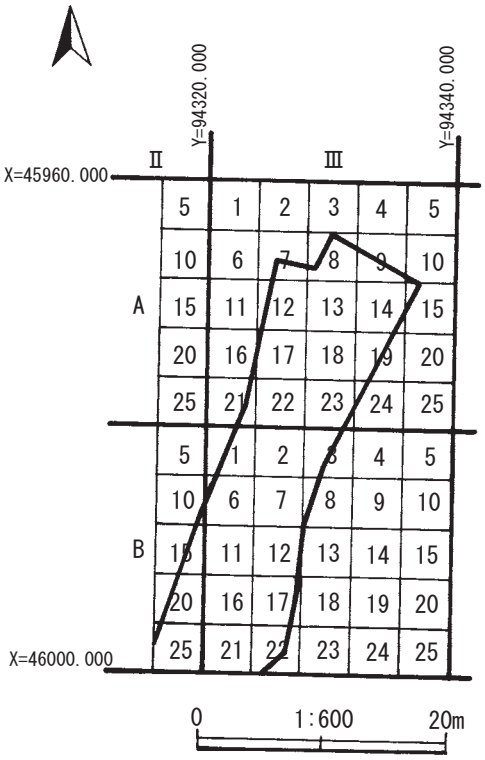
＜引用・参考文献＞

陸前高田市教育委員会　2003『川内遺跡発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告第25集
石川日出志　2005「弥生中期谷起島式に後続する磨消縄文土器群」『岩手考古学』第17号
宇部則保　2013「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『是川縄文館　研究紀要』第２号
小田野哲憲　1987「岩手の弥生土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第５号
菊池貴広　2003「二戸市浅石遺跡の弥生時代中期の土器について」『紀要』ＸＸⅡ（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
佐藤祐輔　2015「弥生土器編年」『弥生土器』ニューサイエンス社
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2000『川岸場遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第317集
2002『浅石遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第403集

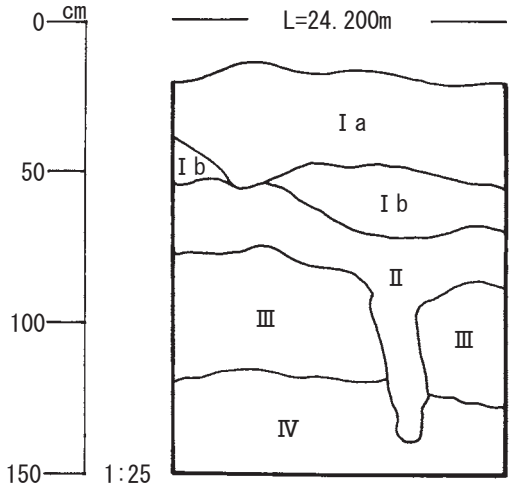


A・B・Cは基本層序地点

第２図　沼里遺跡周辺地形図

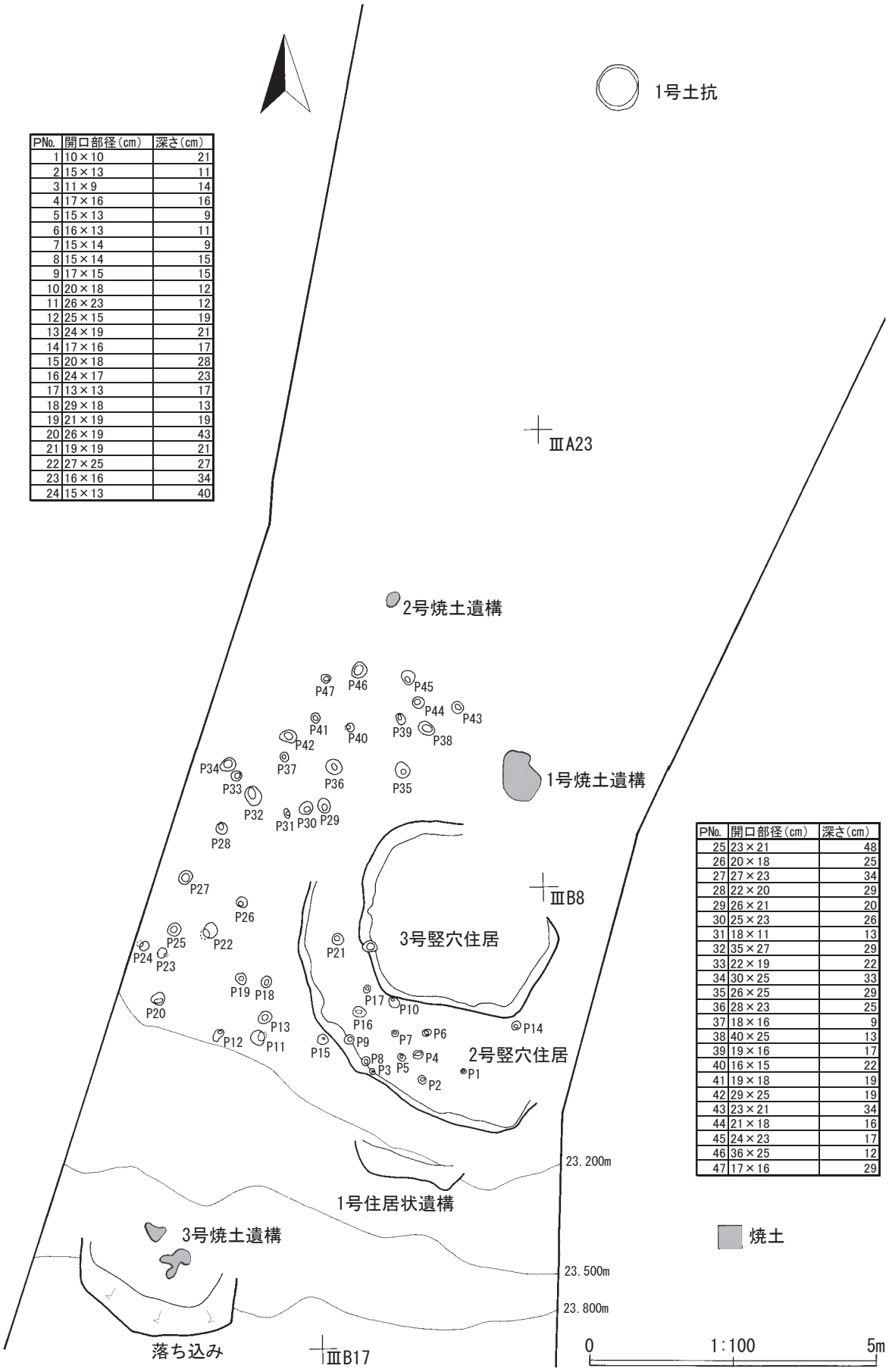


第３図　グリッド図



Ⅰａ層	10YR3/2	黒褐色土	砂質シルト	層厚20～40cm
	（現表土　マサ土再堆積層）			
Ⅰｂ層	10YR2/1	黒色土	シルト	層厚10～20cm
Ⅱ層	10YR1.7/1	黒色土	シルト	層厚20～50cm
	（遺物包含層）			
Ⅲ層	10YR3/3	暗褐色土	シルト	層厚20～40cm
	（上面遺構検出面）			
Ⅳ層	10YR5/8	黄褐色土	シルト	層厚不明

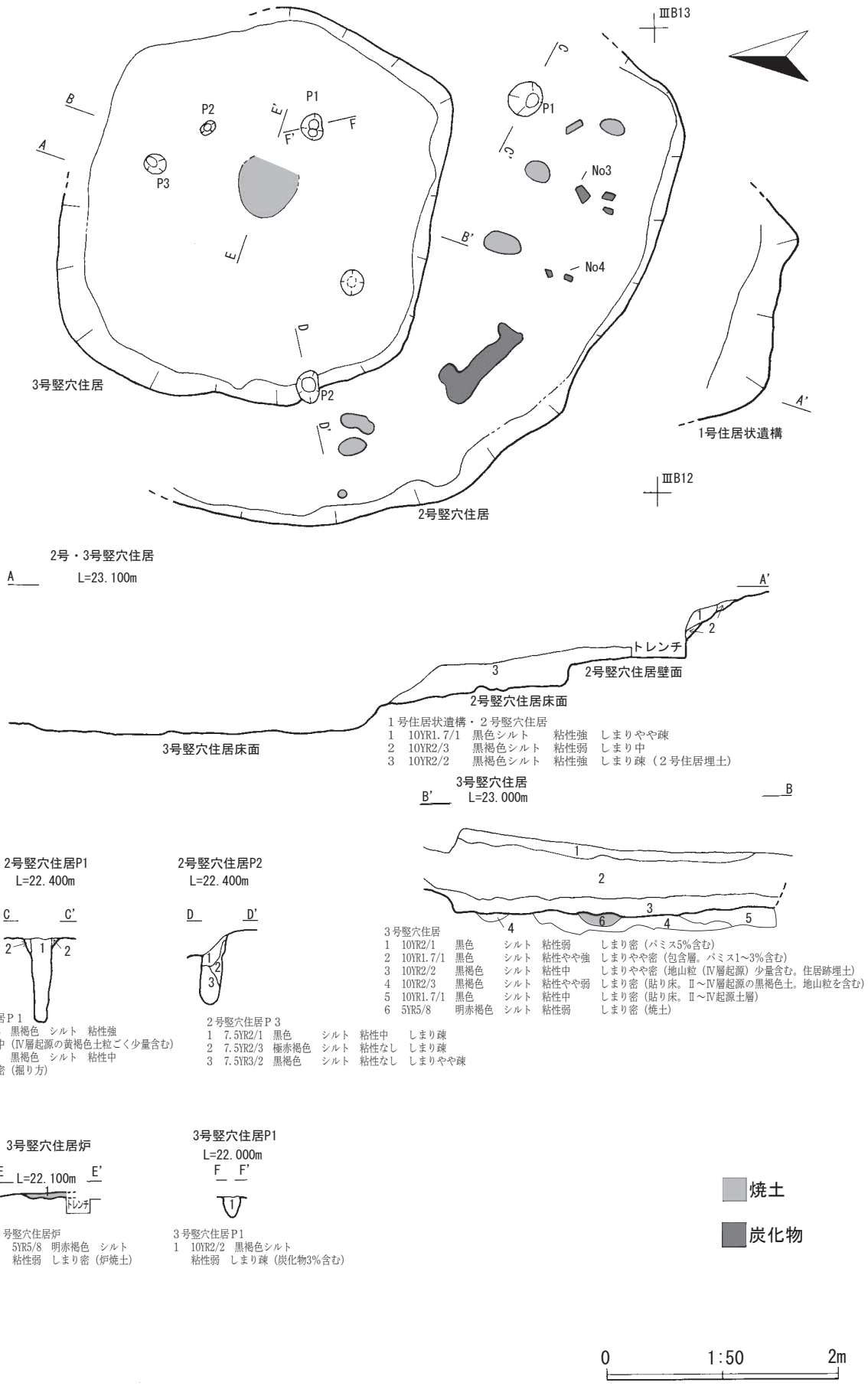
第４図　基本層序B地点



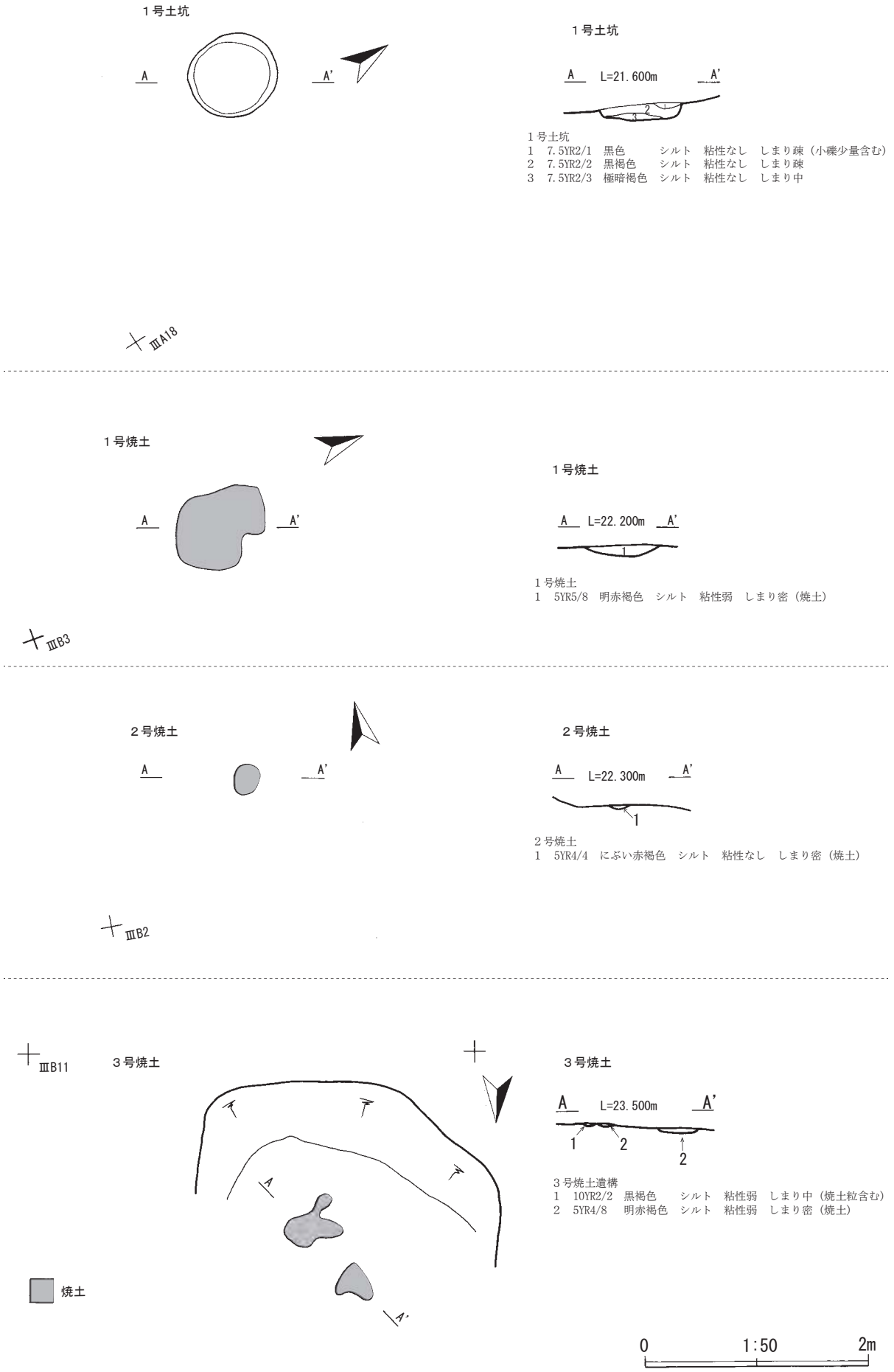
PNo.	開口部径(cm)	深さ(cm)
1	10×10	21
2	15×13	11
3	11×9	14
4	17×16	16
5	15×13	9
6	16×13	11
7	15×14	9
8	15×14	15
9	17×15	15
10	20×18	12
11	26×23	12
12	25×15	19
13	24×19	21
14	17×16	17
15	20×18	28
16	24×17	23
17	13×13	17
18	29×18	13
19	21×19	19
20	26×19	43
21	19×19	21
22	27×25	27
23	16×16	34
24	15×13	40

PNo.	開口部径(cm)	深さ(cm)
25	23×21	48
26	20×18	25
27	27×23	34
28	22×20	29
29	26×21	20
30	25×23	26
31	18×11	13
32	35×27	29
33	22×19	22
34	30×25	33
35	26×25	29
36	28×23	25
37	18×16	9
38	40×25	13
39	19×16	17
40	16×15	22
41	19×18	19
42	29×25	19
43	23×21	34
44	21×18	16
45	24×23	17
46	36×25	12
47	17×16	29

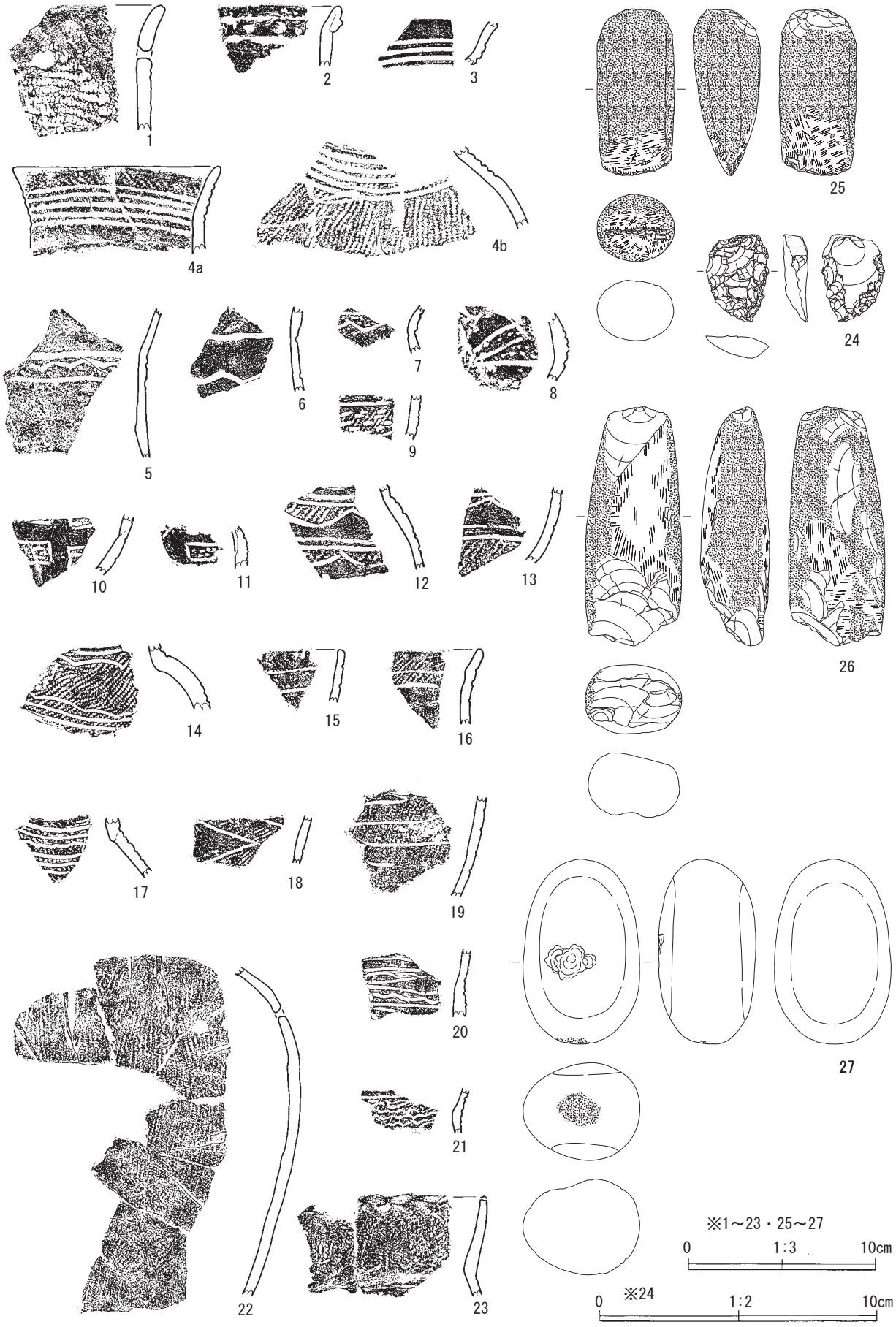
第5図　遺構配置図


ⅢB13
ⅢB12
P1
P2
P3
No3
No4
3号竪穴住居
2号竪穴住居
1号住居状遺構
2号・3号竪穴住居
L=23.100m
トレンチ
2号竪穴住居壁面
2号竪穴住居床面
3号竪穴住居床面
1号住居状遺構・2号竪穴住居
1　10YR1.7/1　黒色シルト　粘性強　しまりやや疎
2　10YR2/3　黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
3　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性強　しまり疎（2号住居埋土）
3号竪穴住居
L=23.000m
2号竪穴住居P1
L=22.400m
2号竪穴住居P2
L=22.400m
2号竪穴住居P1
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性強
しまり中（Ⅳ層起源の黄褐色土粒ごく少量含む）
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中
しまり密（掘り方）
2号竪穴住居P3
1　7.5YR2/1　黒色　シルト　粘性中　しまり疎
2　7.5YR2/3　極赤褐色　シルト　粘性なし　しまり疎
3　7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性なし　しまりやや疎
3号竪穴住居
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱　しまり密（パミス5%含む）
2　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性やや強　しまりやや密（包含層。パミス1～3%含む）
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや密（地山粒（Ⅳ層起源）少量含む。住居跡埋土）
4　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密（貼り床。Ⅱ～Ⅳ層起源の黒褐色土。地山粒を含む）
5　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中　しまり密（貼り床。Ⅱ～Ⅳ起源土層）
6　5YR5/8　明赤褐色　シルト　粘性弱　しまり密（焼土）
3号竪穴住居炉
L=22.100m
トレンチ
3号竪穴住居P1
L=22.000m
3号竪穴住居炉
1　5YR5/8　明赤褐色　シルト
粘性弱　しまり密（炉焼土）
3号竪穴住居P1
1　10YR2/2　黒褐色シルト
粘性弱　しまり疎（炭化物3%含む）
焼土
炭化物
0　1:50　2m

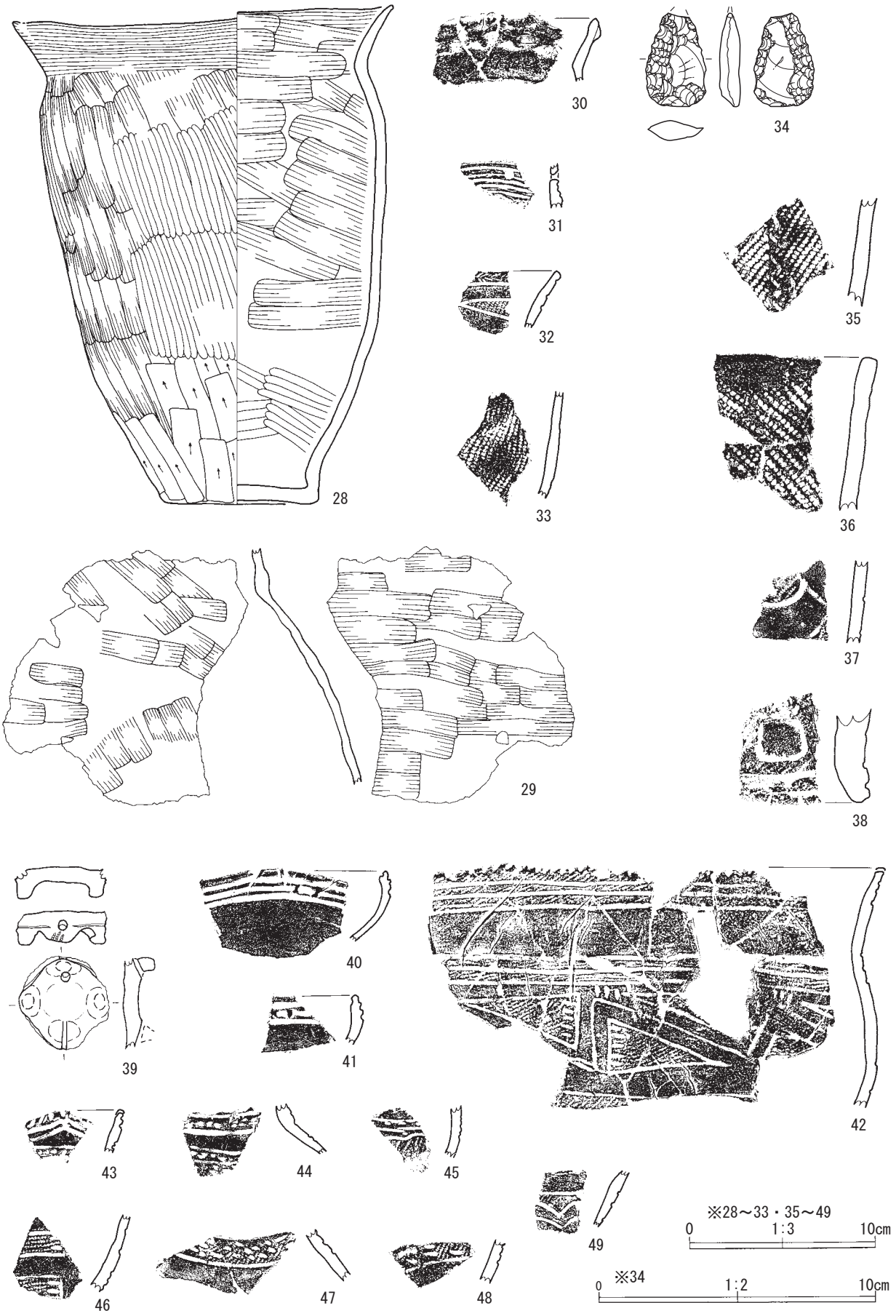
第６図　2・3号竪穴住居



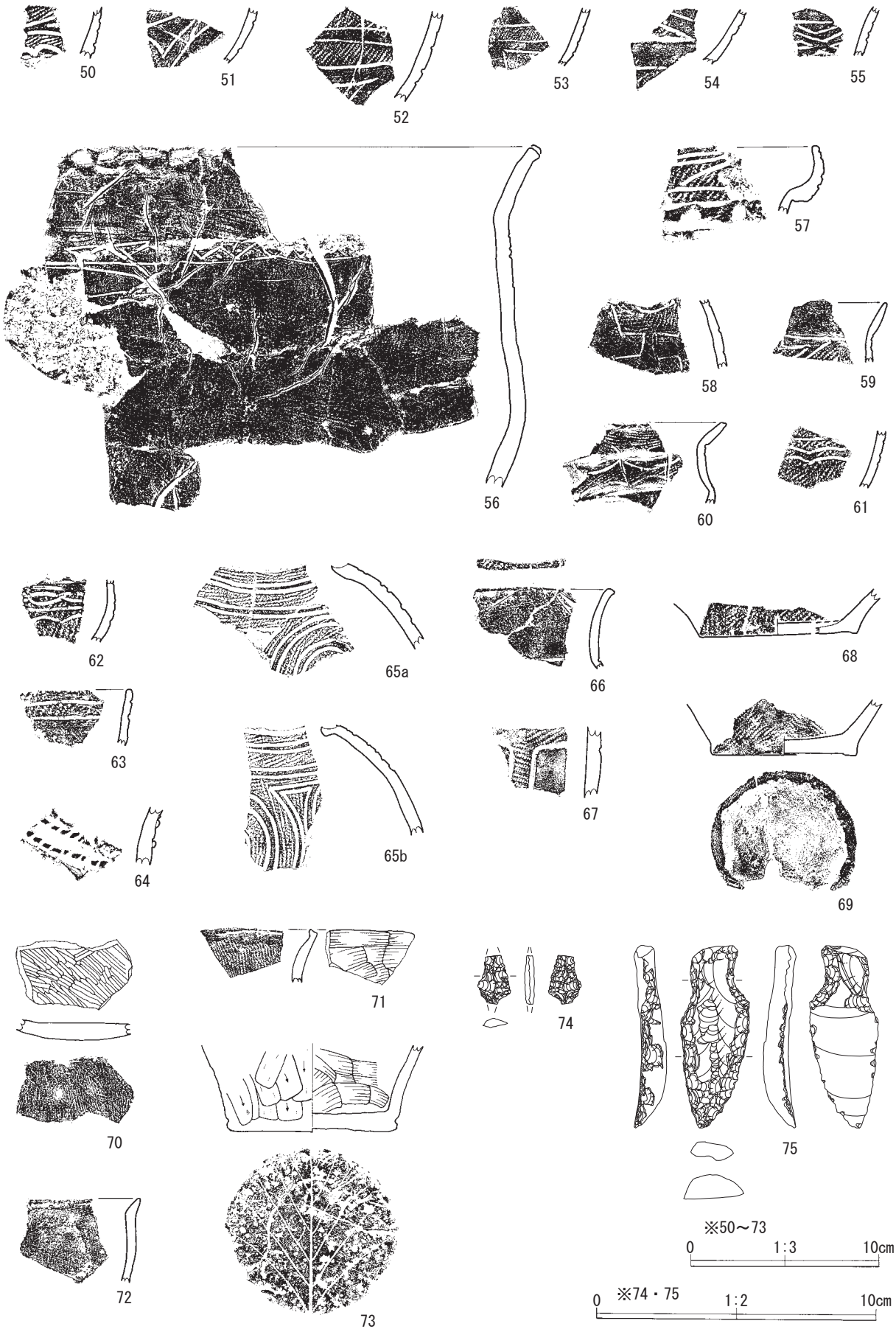
第７図　1号土坑 1～３号焼土遺構



第８図　２号竪穴住居　出土遺物



第９図　３号竪穴住居・遺構外出土遺物



第10図　遺構外出土遺物

土器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	文様・調整等	内面	備考	分類	図版	写真
1	2号竪穴住居	埋土	深鉢	口縁部	単節LR縄文・補修孔	ミガキ		Ⅰ群	8	5
2	2号竪穴住居	埋土	深鉢	口縁部	口縁部折り返し・隆帯に圧痕	ナデ	外面すす付着	Ⅰ群	8	5
3	2号竪穴住居	埋土上位～中位	高坏or鉢	頸部	平行沈線	ナデ		Ⅱ群	8	5
4a	2号竪穴住居	埋土	壺	口縁～頸部	平行沈線・単節RL縄文	ナデ		Ⅲ群a類	8	5
4b	2号竪穴住居	埋土	壺	頸～胴部	平行沈線・単節RL縄文	ナデ	赤色顔料付着	Ⅲ群a類	8	5
5	2号竪穴住居	埋土	甕	頸～胴部	鋸歯文・平行沈線	ナデ	外面すす付着	Ⅲ群a類	8	5
6	2号竪穴住居	埋土	甕	頸部	鋸歯文	ナデ		Ⅲ群a類	8	5
7	2号竪穴住居	埋土	甕？	頸部	鋸歯文	ナデ		Ⅲ群a類	8	5
8	2号竪穴住居	埋土	壺or鉢	胴部	沈線・刺突	ナデ	赤色顔料付着	Ⅲ群a類	8	5
9	2号竪穴住居	埋土	鉢？	胴部	沈線・刺突・単節LR縄文？	ナデ		Ⅲ群a類	8	5
10	2号竪穴住居	埋土下位	鉢？	胴部	沈線・刺突・単節LR縄文	ナデ		Ⅲ群a類	8	5
11	2号竪穴住居	埋土上位～中位	甕？	頸部？	沈線・刺突	ナデ		Ⅲ群a類	8	5
12	2号竪穴住居	埋土	壺or甕	頸～胴部	連孤文・平行沈線・単節LR縄文	ナデ	外面すす付着	Ⅲ群a類	8	5
13	2号竪穴住居	埋土中位～下位	鉢？	胴部	沈線・単節LR縄文・磨消縄文	ミガキ	内外面すす付着	Ⅲ群a類	8	5
14	2号竪穴住居	埋土下位	壺or甕	頸～胴部	沈線・単節LR縄文	ナデ		Ⅲ群b類	8	5
15	2号竪穴住居	埋土中位～下位	甕？	口縁部	口唇部刻目・平行沈線	ナデ	外面すす付着	Ⅲ群a類	8	5
16	2号竪穴住居	埋土	甕or壺	口縁～頸部	平行沈線・単節LR縄文？・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群a類	8	5
17	2号竪穴住居	埋土	壺？	頸部	沈線・単節縄文	ナデ		Ⅲ群a類	8	5
18	2号竪穴住居	埋土	鉢？	胴部	沈線・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群a類	8	5
19	2号竪穴住居	埋土上位～中位	甕？	胴部	沈線・単節縄文	ナデ	内面すす付着・摩滅	Ⅲ群b類	8	5
20	2号竪穴住居	埋土	甕	頸部	沈線	ナデ		Ⅲ群b類	8	5
21	2号竪穴住居	埋土上位～中位	甕	頸部	沈線	ナデ	摩滅	Ⅲ群a類	8	5
22	2号竪穴住居	埋土中位～下位	甕	頸～胴部	LR縄文	ナデ	外面すす付着	Ⅲ群a～b	8	5
23	2号竪穴住居	埋土中位～下位	甕	口縁～頸部	口唇部指頭圧痕・LR縄文	ナデ		Ⅲ群a～b	8	5
28	3号竪穴住居	床面	長胴甕	口縁～底部	口縁部・頸部ナデ・底部直上ケズリ・胴部ミガキ	ミガキ・ナデ	部分的に二次被熱による剥落が認められる	Ⅳ群	9	6
29	3号竪穴住居	床面	球胴甕	頸～肩部	ナデ	ナデ		Ⅳ群	9	6
30	3号竪穴住居	埋土下位	深鉢	口縁部	隆帯	ナデ	摩滅	Ⅰ群	9	6
31	3号竪穴住居	埋土下位	壺？	頸部？	平行沈線・補修孔	ナデ		Ⅱ群？	9	6
32	3号竪穴住居	埋土中位	鉢？	口縁部	口唇部に縄文施文・沈線・単節LR縄文・磨消縄文・補修孔？	ナデ		Ⅲ群a類	9	6
33	3号竪穴住居	貼床	甕	胴部	単節LR縄文	ナデ		Ⅱ～Ⅲ群	9	6
35	ⅢB2グリッド	Ⅱ層	深鉢	胴部	綾絡文・単節RL縄文	ナデ		Ⅰ群	9	6
36	2号焼土遺構付近	Ⅲ層	深鉢	口縁～胴部	単節LR縄文	ナデ		Ⅰ群	9	6
37	ⅢB2グリッド	Ⅱ層	深鉢	胴部	沈線・単節RL縄文？・磨消縄文	ナデ	縄文中期～後期	Ⅰ群	9	6
38	ⅢB11グリッド	Ⅱ層	器台	台部	沈線・単節LR縄文？・磨消縄文・透かし彫り	ナデ		Ⅰ群	9	6
39	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	脚付き土器	底部	単節RL縄文・沈線・孔	ナデ		Ⅲ群e類	9	6
40	3号焼土遺構周辺	Ⅲ層	高坏or鉢	口縁～胴部	平行沈線・内面沈線	ミガキ		Ⅱ群	9	6
41	ⅢB11グリッド	Ⅱ層	高坏or鉢	口縁部	平行沈線・内面沈線	ミガキ		Ⅱ群	9	6
42	ⅢB11グリッド	Ⅱ層	甕	口縁～胴部	口唇部刻目・沈線・刺突・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群a類	9	6
43	ⅢB11グリッド	Ⅱ層	甕？	口縁部	口唇部刻目・沈線・刺突	ナデ	口縁部頂部に切り込み	Ⅲ群a類	9	6
44	ⅢB12グリッド	Ⅱ層	甕or壺	頸部	沈線・刺突	ナデ	赤色顔料付着	Ⅲ群a類	9	6
45	ⅢB2グリッド	Ⅱ層	甕？	胴部	沈線・刺突・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群a類	9	6
46	ⅢB12グリッド	Ⅱ層	甕or鉢	胴部	沈線・刺突・単節LR縄文？・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群a類	9	6
47	ⅢB12グリッド	Ⅱ層	甕or鉢	頸部	沈線・刺突・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群a類	9	6
48	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	鉢？	胴部？	沈線・刺突・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ	摩滅	Ⅲ群a類	9	6
49	ⅢBFグリッド	Ⅱ層	鉢	胴部	連弧文	ナデ		Ⅲ群a類	9	6
50	ⅢB2グリッド	Ⅱ層	甕or鉢	胴部	沈線・単節LR縄文	ナデ		Ⅲ群a類	10	6

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	文様・調整等	内面	備考	分類	図版	写真
51	ⅢB11グリッド	Ⅱ層	鉢？	胴部	沈線・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群a類	10	6
52	ⅢB2グリッド	Ⅱ層	甕or鉢	胴部	沈線・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群a類	10	6
53	ⅢB11グリッド	Ⅱ層	鉢？	胴部	沈線・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群a類	10	6
54	ⅢB11グリッド	Ⅱ層	鉢？	胴部	沈線・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ	摩滅	Ⅲ群a類？	10	6
55	ⅢB2グリッド	Ⅱ層	鉢？	胴部	沈線	ナデ		Ⅲ群a類	10	6
56	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	甕	口部～胴部	口唇部指頭圧痕・平行沈線間に鋸歯文・無文部ナデ調整	ナデ	外面すす付着	Ⅲ群a類	10	6
57	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	鉢？	口縁部	沈線・隆帯・単節LR縄文	ナデ	外面すす付着	Ⅲ群d類	10	7
58	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	甕？	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群b類	10	7
59	ⅢB11グリッド	Ⅱ層	甕	頸部	沈線・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群b類	10	7
60	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	甕	口縁～胴部	連孤文・単節LR縄文？	ナデ		Ⅲ群b類	10	7
61	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	鉢？	胴部	連孤文・単節LR縄文	ナデ		Ⅲ群b類	10	7
62	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	甕？	胴部	連孤文・単節LR縄文	ナデ		Ⅲ群b類	10	7
63	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	甕or鉢	口縁部	口唇部刻目・平行沈線・単節LR縄文？	ナデ		Ⅲ群b類	10	7
64	ⅢB2グリッド	Ⅱ層	甕？	頸部？	隆帯に刻目	ナデ		Ⅲ群b類	10	7
65a	ⅢB2・10グリッド	Ⅱ層	甕or壺	頸～胴部	沈線・渦文・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群c類	10	7
65b	ⅢB2・10グリッド	Ⅱ層	甕or壺	頸～胴部	沈線・渦文・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群c類	10	7
66	ⅢB12グリッド	Ⅱ層	甕	口縁部	口唇部に縄文施文・沈線	ナデ	外面すす付着	Ⅲ群d類	10	7
67	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	高坏	脚部	沈線・単節LR縄文・磨消縄文	ナデ		Ⅲ群d類	10	7
68	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	甕	底部	単節LR縄文	ナデ		Ⅲ群d類	10	7
69	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	甕	底部	単節LR縄文	ナデ		Ⅲ群d類	10	7
70	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	坏	底部	ハケメ・ミガキ	ナデ	内面黒色処理	Ⅳ群	10	7
71	ⅢB7グリッド	Ⅱ層上位	甕	口縁部	ハケメ	ナデ	底面木葉痕	Ⅳ群	10	7
72	ⅢB12グリッド	Ⅱ層	甕	口縁部	ハケメ	ナデ	外面すす付着	Ⅳ群	10	7
73	ⅢB7グリッド	Ⅱ層	甕	底部	ケズリ	ナデ		Ⅳ群	10	7

石器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	石材	時代	産地	計測値（cm）			重量（g）	図版	写真
							長さ	幅	厚さ			
24	2号竪穴住居	埋土中位～下位	掻・削器	頁岩	中生代	北上山地	3.11	22.4	0.9	5.7	7	5
25	2号竪穴住居	埋土	石斧	細粒花崗閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	8.81	4.07	3.54	192.1	7	5
26	2号竪穴住居	埋土	石斧	細粒花崗閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	12.8	5.1	3.7	378.1	7	5
27	2号竪穴住居	埋土	凹石	花崗閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	9.92	6.25	5.24	475.8	7	5
34	3号竪穴住居	埋土下位	掻・削器	デイサイト	中生代白亜紀	原地山層	3.4	2.18	0.75	5.8	8	6
73	ⅢB12グリッド	Ⅱ層	石鏃	頁岩	中生代	北上山地	1.74	1.18	0.3	0.65	9	7
74	ⅢB12グリッド	Ⅱ層	石匙	頁岩	中生代	北上山地	6.53	2.46	1.17	15.22	9	7

沼里遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

沼里遺跡は、岩手県宮古市津軽石第４地割大森地内ほか（北緯39°34′、東経141°55′）に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡及び焼土遺構から出土した炭化物４点である（表1）。

2　測定の意義

試料が出土した竪穴住居跡の年代を把握する。

3　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ(1M) の塩酸(HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）$\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±1σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の

場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$ 補正を行い、下１桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3 較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6　測定結果

測定結果を表１、２に示す。

３号焼土遺構上面出土試料 No.1 の ^{14}C 年代は 2480±20yrBP、暦年較正年代（1σ）は 754～544cal BC の間に５つの範囲で示され、縄文時代晩期後葉頃に相当する（小林編2008）。

２号竪穴住居跡炭化物試料の ^{14}C年代は、No.2が880±20yrBP、No.3が2490±20yrBP、No.4が2450±20yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、No.2 が 1058～1207cal AD、No.3 が 761～550cal BC、No.4 が 740～431cal BC の間に各々複数の範囲で示される。No.3 は縄文時代晩期後葉頃、No.4 は晩期後葉から末葉頃に相当し(小林編 2008)、確率の高い 1σ 暦年代範囲に絞ると年代値があまり重ならないが、確率の低い範囲まで含めて 2σ で見ると重なる範囲が多く、おおむね近い年代値と言える。これらに対して、No.2 は明らかに新しく、年代の異なる炭化物が混入した可能性を考慮する必要がある。

試料の炭素含有率は、すべて 50%を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表１　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 補正値）

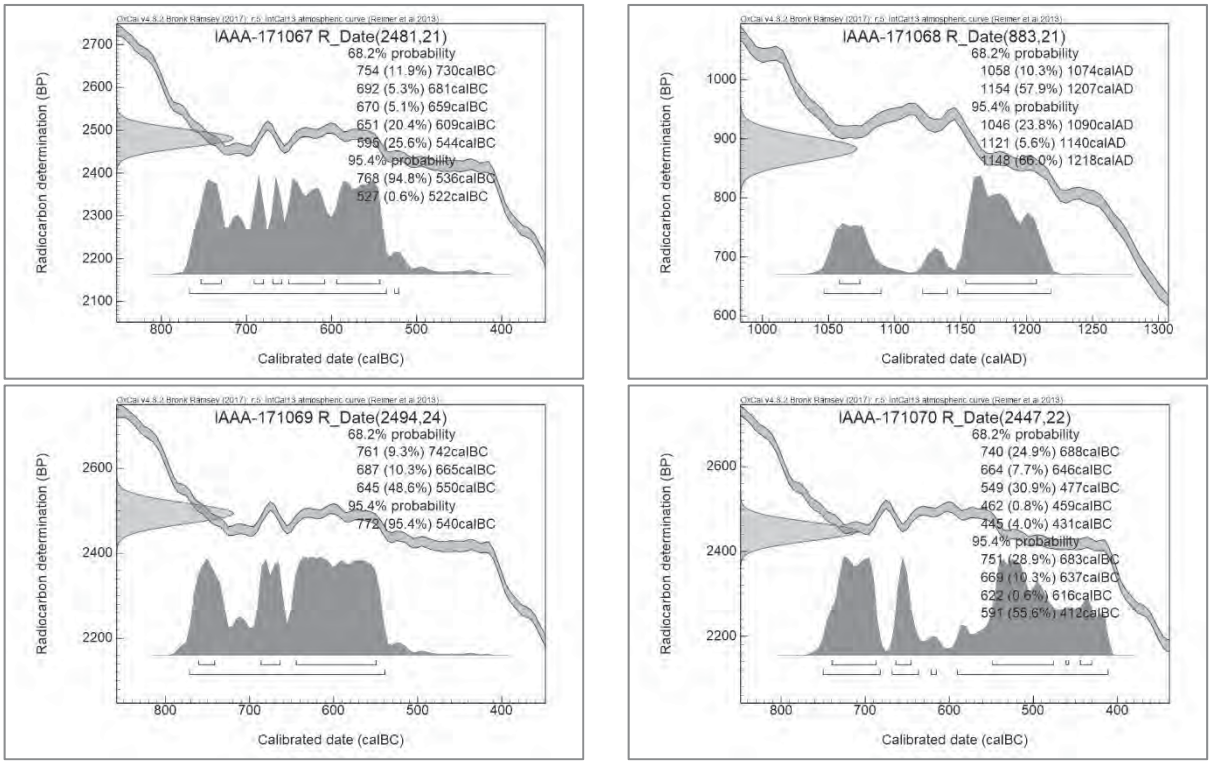
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-171067	No.1	３号焼土遺構上面	炭化物	AAA	**-24.08 ± 0.27**	**2,480 ± 20**	**73.42 ± 0.20**
IAAA-171068	No.2	２号竪穴住居跡　埋土	炭化物	AAA	**-25.86 ± 0.42**	**880 ± 20**	**89.59 ± 0.24**
IAAA-171069	No.3	２号竪穴住居跡　埋土	炭化物	AAA	**-27.07 ± 0.49**	**2,490 ± 20**	**73.30 ± 0.22**

IAAA-171070	No.4	2号竪穴住居跡　埋土	炭化物	AAA	**-25.97 ± 0.34**	**2,450 ± 20**	**73.74 ± 0.21**

[IAA 登録番号：#8694]

表 2　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）　［参考値］

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-171067	2,470 ± 20	73.56 ± 0.20	2,481 ± 21	754calBC - 730calBC (11.9%) 692calBC - 681calBC (5.3%) 670calBC - 659calBC (5.1%) 651calBC - 609calBC (20.4%) 595calBC - 544calBC (25.6%)	768calBC - 536calBC (94.8%) 527calBC - 522calBC (0.6%)
IAAA-171068	900 ± 20	89.43 ± 0.22	883 ± 21	1058calAD - 1074calAD (10.3%) 1154calAD - 1207calAD (57.9%)	1046calAD - 1090calAD (23.8%) 1121calAD - 1140calAD (5.6%) 1148calAD - 1218calAD (66.0%)
IAAA-171069	2,530 ± 20	72.99 ± 0.21	2,494 ± 24	761calBC - 742calBC (9.3%) 687calBC - 665calBC (10.3%) 645calBC - 550calBC (48.6%)	772calBC - 540calBC (95.4%)
IAAA-171070	2,460 ± 20	73.59 ± 0.20	2,447 ± 22	740calBC - 688calBC (24.9%) 664calBC - 646calBC (7.7%) 549calBC - 477calBC (30.9%) 462calBC - 459calBC (0.8%) 445calBC - 431calBC (4.0%)	751calBC - 683calBC (28.9%) 669calBC - 637calBC (10.3%) 622calBC - 616calBC (0.6%) 591calBC - 412calBC (55.6%)



［図版］暦年較正年代グラフ（参考）

調査区全景（北から）

調査前風景（北から）

基本層序B地点断面（東から）

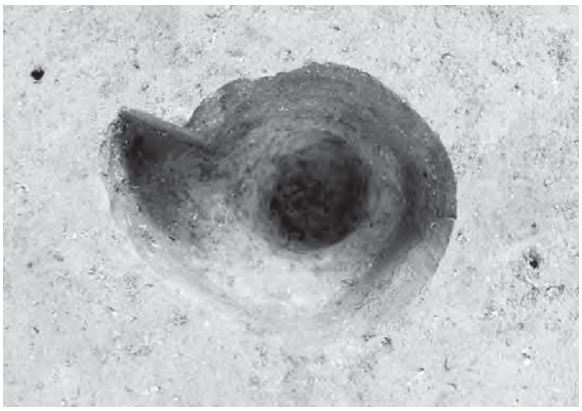
遺物出土状況

作業風景

写真図版1　調査区全景・基本土層

1号住居状遺構・２号竪穴住居・３号竪穴住居全景（北から）

1号住居状遺構・２号竪穴住居・３号竪穴住居断面（西から）

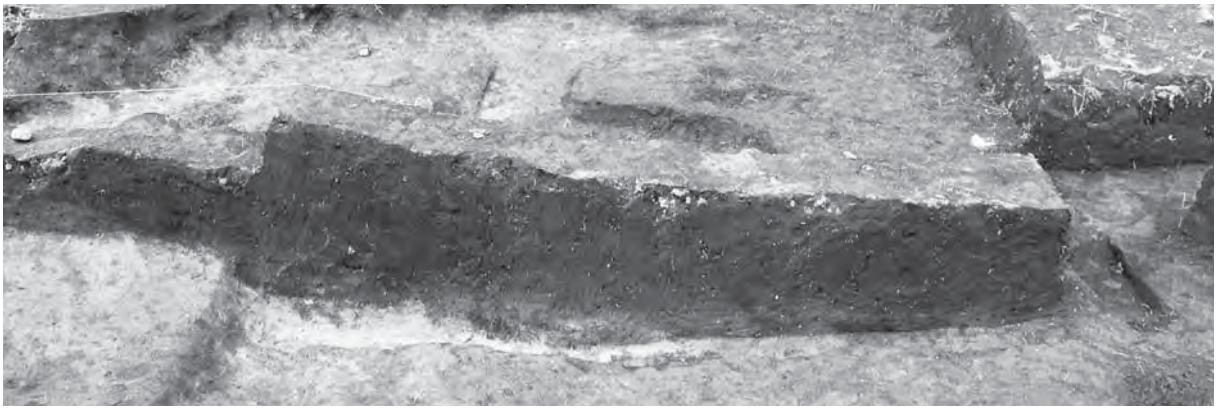


2号竪穴住居P1完掘（北から）

2号竪穴住居P1断面（北から）

写真図版2　1号住居状遺構・２号竪穴住居・３号竪穴住居

３号竪穴住居全景（北から）



３号竪穴住居断面（東から）

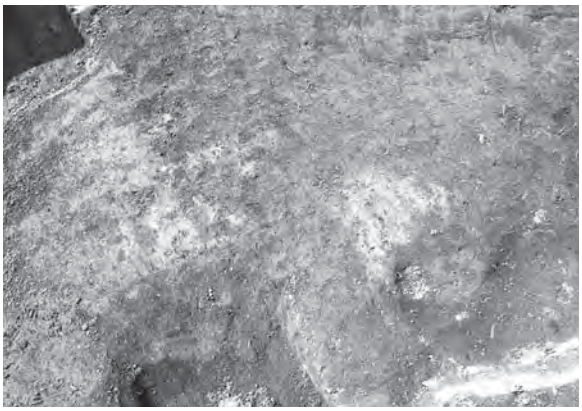
3号竪穴住居炉検出（北から）

3号竪穴住居炉断面（南から）

写真図版3　３号竪穴住居

1号焼土遺構検出状況（西から）

2号焼土遺構検出状況（南から）



3号焼土遺構検出状況（南から）

作業風景

1号土坑完掘（西から）

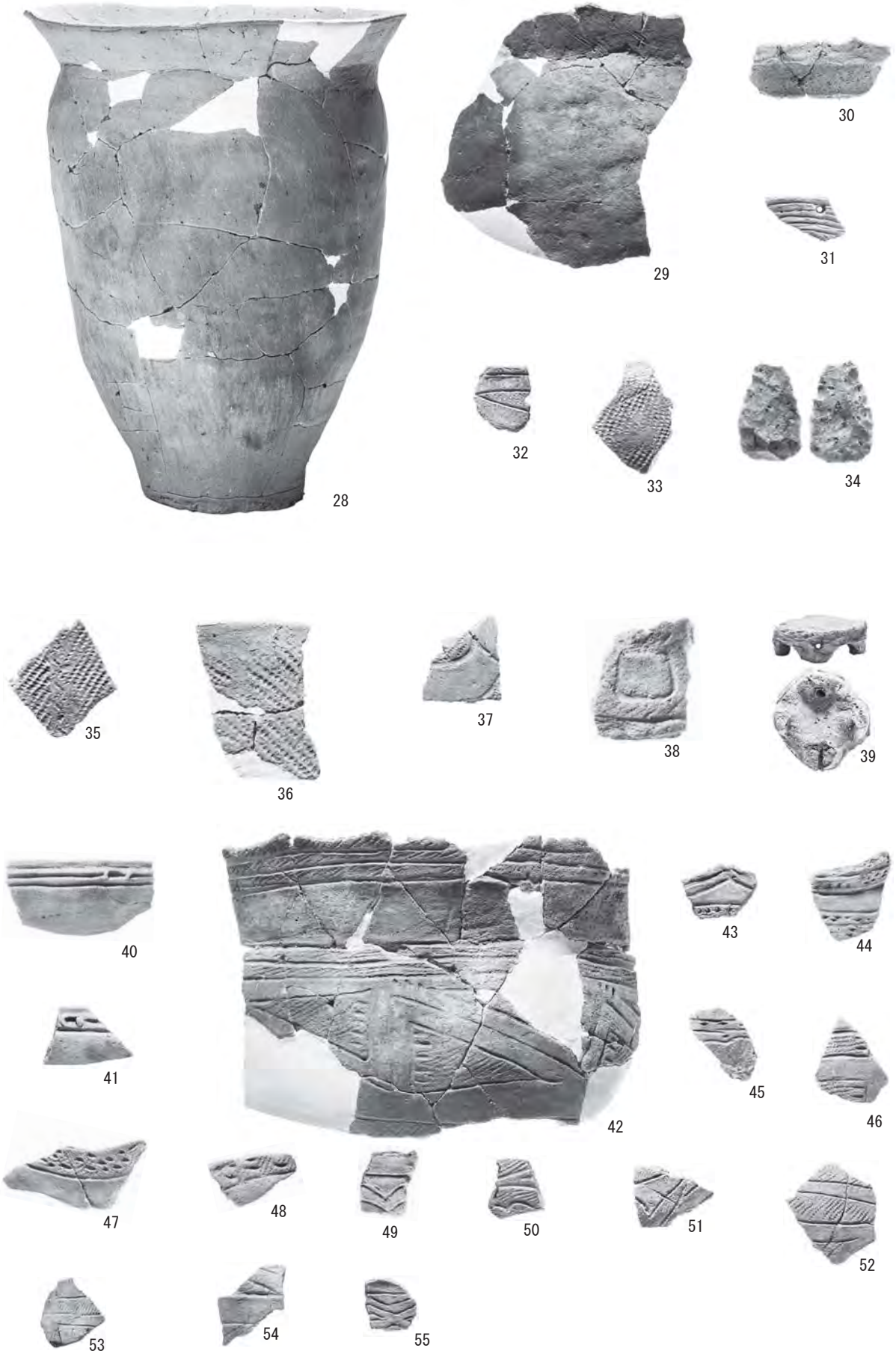
1号土坑断面（西から）

調査区全景（南から）

作業風景

写真図版4　焼土遺構・土坑・作業風景

写真図版5　2号竪穴住居出土遺物



写真図版6　3号竪穴住居・遺構外出土遺物

写真図版7　遺構外出土遺物

（７）根井沢穴田Ⅳ遺跡

所　在　地	宮古市津軽石第19地割穴田地内ほか	**遺跡コード・略号**	LG53-2201・NSAⅣ-17
委　託　者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	**調査対象面積**	340㎡
事　業　名	三陸沿岸道路	**調査終了面積**	340㎡
発掘調査期間	平成29年９月１日～９月29日	**調査担当者**	菊池貴広･遠藤 修･佐々木あゆみ

１　調査に至る経過

遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（山田～宮古南）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月９日付け国東整陸一調第1005号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年11月13日～14日にわたり試掘調査を行い、平成24年11月15日付け教生第1325号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成29年４月３日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

1：25,000　津軽石

第１図　遺跡位置図

２　遺跡の位置と立地

遺跡は、宮古市津軽石第19地割穴田地内ほかに所在し、国土地理院発行50,000分の１地形図「宮古」の図幅に含まれ、北緯39度34分30秒、東経141度55分40秒に位置する。

根井沢川によって形成された河岸段丘上に立地している。現況は森林・畑地で、標高は24～27mである。根井沢川は、そのまま東流し津軽石川に注いでいる。

３　基本層序

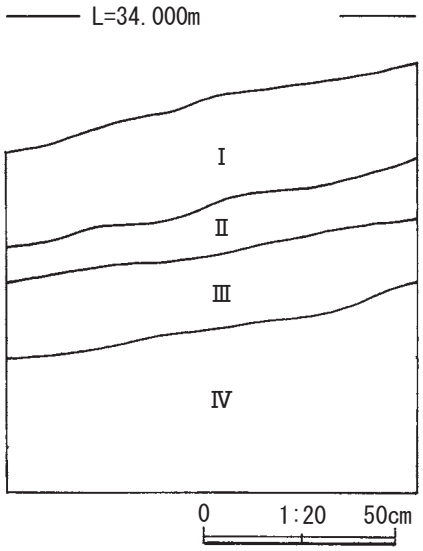
層序は、Ⅰ～Ⅳ層に大別される。Ⅰ層は調査区の北端部から中央部ではほぼ同じ層厚の堆積がみられ、南端部に向かって薄くなる様相を示している。

Ⅰ層　7.5YR　3/3　暗褐色　シルト　粘性なし
　　しまり疎　層厚は20～30cm

Ⅱ層　7.5YR　2/2　黒褐色　シルト　粘性なし
　　しまり疎　層厚は10～18cm

Ⅲ層　7.5YR　3/2　黒褐色　シルト　粘性なし
　　しまり疎　（極小の7.5YR 4/6　褐色土を含む）
　　層厚は10～30cm

Ⅳ層　7.5YR　4/6　褐色シルト　粘性なし
　　やや密（地山）



第２図　基本層序

４　調査の概要・グリッド設定

試掘溝を設定し、Ⅰ・Ⅱ層を重機によって除去し、Ⅲ～Ⅳ層で遺構検出を行った。グリッドは平成28年度調査に合致するように大グリッド100×100m、小グリッド５mに設定した。

（１）遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居１棟である。

１号竪穴住居（第５図、写真図版１）

調査区北端部のⅢＢ１Ｓグリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。形状は方形状を呈する。規模は北壁4.6m、東壁4.5m、西壁4.0mである。埋土は３層に細分した。黒色土・黒褐色土・褐色土で構成される。自然堆積と思われる。壁は北西部分から北東部分は床面からやや外傾して立ち上がる。壁高は北西壁38cm、北壁56cm、北東壁16cmである。床面はほぼ平坦で固く締まる。貼り床は施されていない。付属施設として、土坑１基検出した。底面に焼土が形成される。

柱穴は床面北側で３個検出した。柱穴の規模は、西からＰ１開口部径14cm、深さ33cm、Ｐ２開口部径14cm、深さ40cm、Ｐ３開口部径16cm、深さ33cmである。カマドは北壁中央部に位置する。芯材となる礫が確認された。煙道部は刳り貫き式である。煙出部は木根の攪乱により確認することはできなかった。煙出部と想定される位置で、焼土、炭化物のまとまりを確認した。

＜遺物・時期＞

埋土から縄文時代後期前葉の土器が出土している。流れ込みによるものと思われる。住居の形状、カマドが付設されることから、古代の竪穴住居と思われる。放射性炭素年代測定で1010±20yrBPの年代が得られている。出土炭化物の樹種はクリである。

（２）出土遺物（第６図、写真図版２）

遺物は土器小コンテナ１箱、石器小コンテナ１箱である。土器１は胴部に吊手状突起が施される縄文時代後期前葉の壺である。土器２は磨消縄文が施される縄文時代後期前葉に比定される。土器４～

17は弥生時代後期赤穴式相当の土器である。

土器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	文様・調整等	内面	備考	図版	写真
1	1号竪穴住居	埋土	壺	胴部	沈線・吊手状突起	ナデ	縄文時代後期前葉	6	2
2a	1号竪穴住居	埋土	壺？	胴部	羽状縄文・沈線	ナデ	縄文時代後期前葉	6	2
2b	1号竪穴住居	埋土	壺？	胴部	羽状縄文・沈線	ナデ	縄文時代後期前葉	6	2
3a	1号竪穴住居土坑	床面	甕？	頸部	沈線	ナデ	弥生時代	6	2
3b	1号竪穴住居土坑	床面	甕？	頸部	沈線	ミガキ	弥生時代	6	2
4	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	口縁部	交互刺突文	ミガキ	弥生時代後期後葉	6	2
5	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	頸部	交互刺突文・単節RL縄文	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
6	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	口縁部	交互刺突文・単節RL縄文	ミガキ	弥生時代後期後葉	6	2
7	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	口縁部	沈線	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
8	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	口縁部	交互刺突文・RL縄文	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
9	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	頸部	交互刺突文・単節RL縄文	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
10	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	頸部	沈線・単節RL縄文	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
11	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	口縁部	交互刺突文・単節RL縄文	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
12	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	頸部	沈線	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
13	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	頸部	交互刺突文・単節RL縄文	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
14	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	口縁部	口唇部に縄文施文・平行沈線・単節RL縄文	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
15	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	頸部	沈線・単節RL縄文	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
16	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	頸部	沈線	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2
17	ⅢB5Sグリッド	Ⅱ層落ち込み	甕	頸部	沈線	ナデ	弥生時代後期後葉	6	2

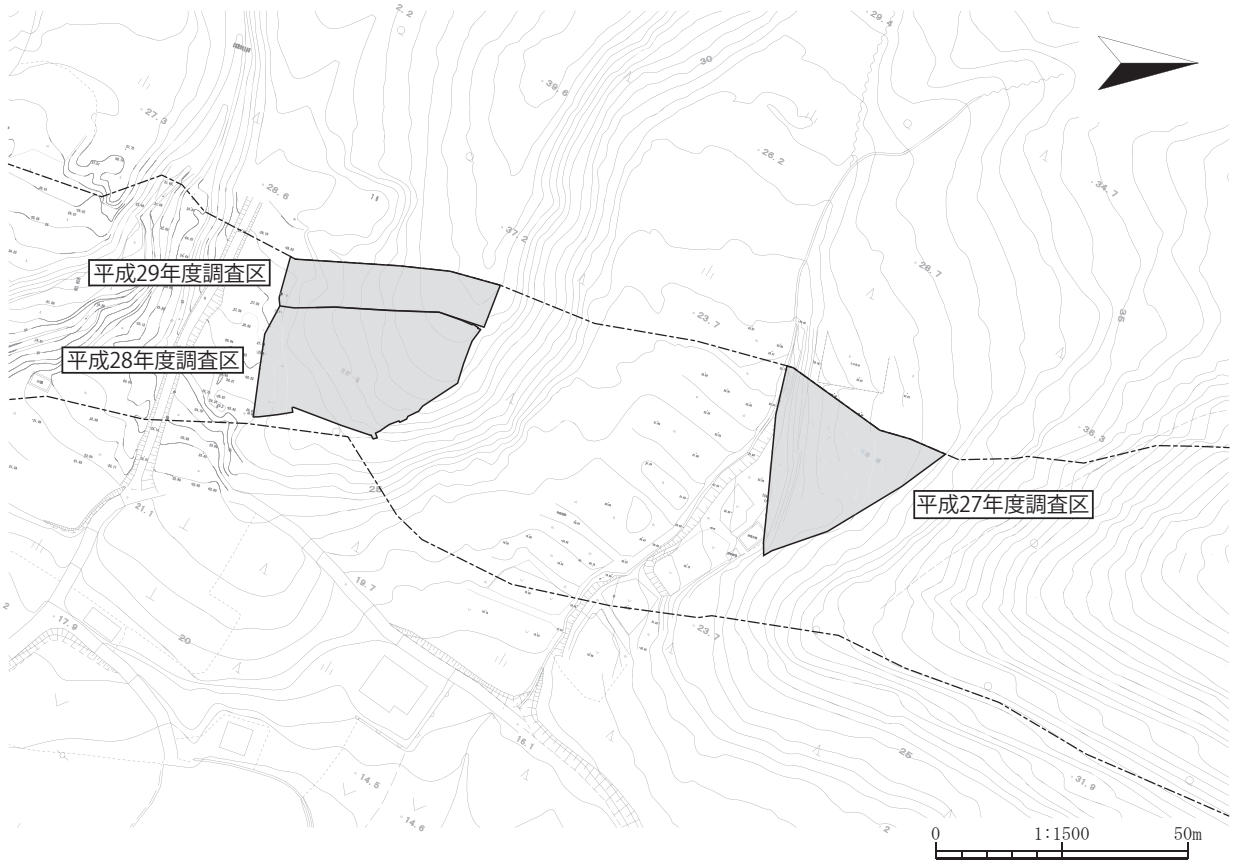
石器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	石材	時代	産地	計測値（cm）			重量（g）	図版	写真
							長さ	幅	厚さ			
1	ⅢB3Sグリッド	Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	中生代白亜紀	北上山地	4.35	4.12	0.28	7.3	6	2
2	ⅡB20Sグリッド	Ⅳ層	磨石＋敲石	細粒花崗岩	中生代白亜紀	北上山地	14.3	7.8	6.8	1294.8	6	2
3	ⅡB20Sグリッド	表採	敲石	デイサイト	中生代	北上山地	14.5	9.3	7.4	1303.4	6	2
4	住居北壁側焼土付近	Ⅳ層	磨石	細粒花崗岩	中生代	北上山地	20.3	18.6	7.8	4220.6	6	2

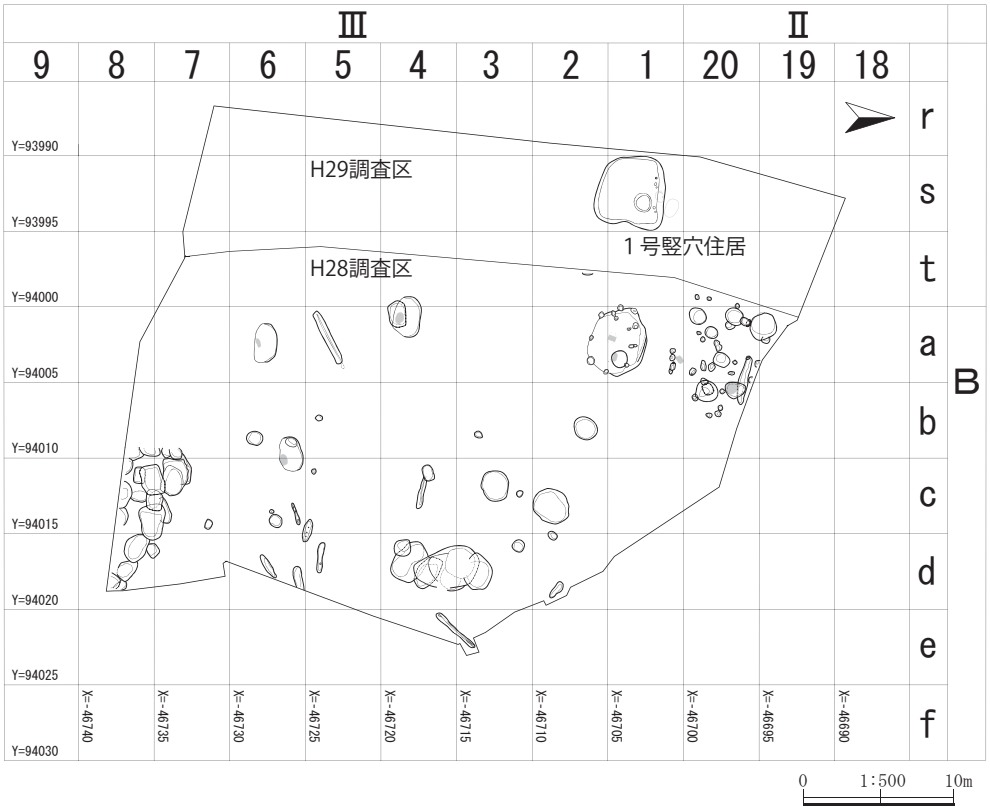
5　まとめ

今回の調査で、古代の竪穴住居１棟が検出された。また、縄文時代後期前葉・交互刺突文が施される弥生時代後期の土器が出土していることから、調査区西側に該期の集落跡が存在することが考えられる。

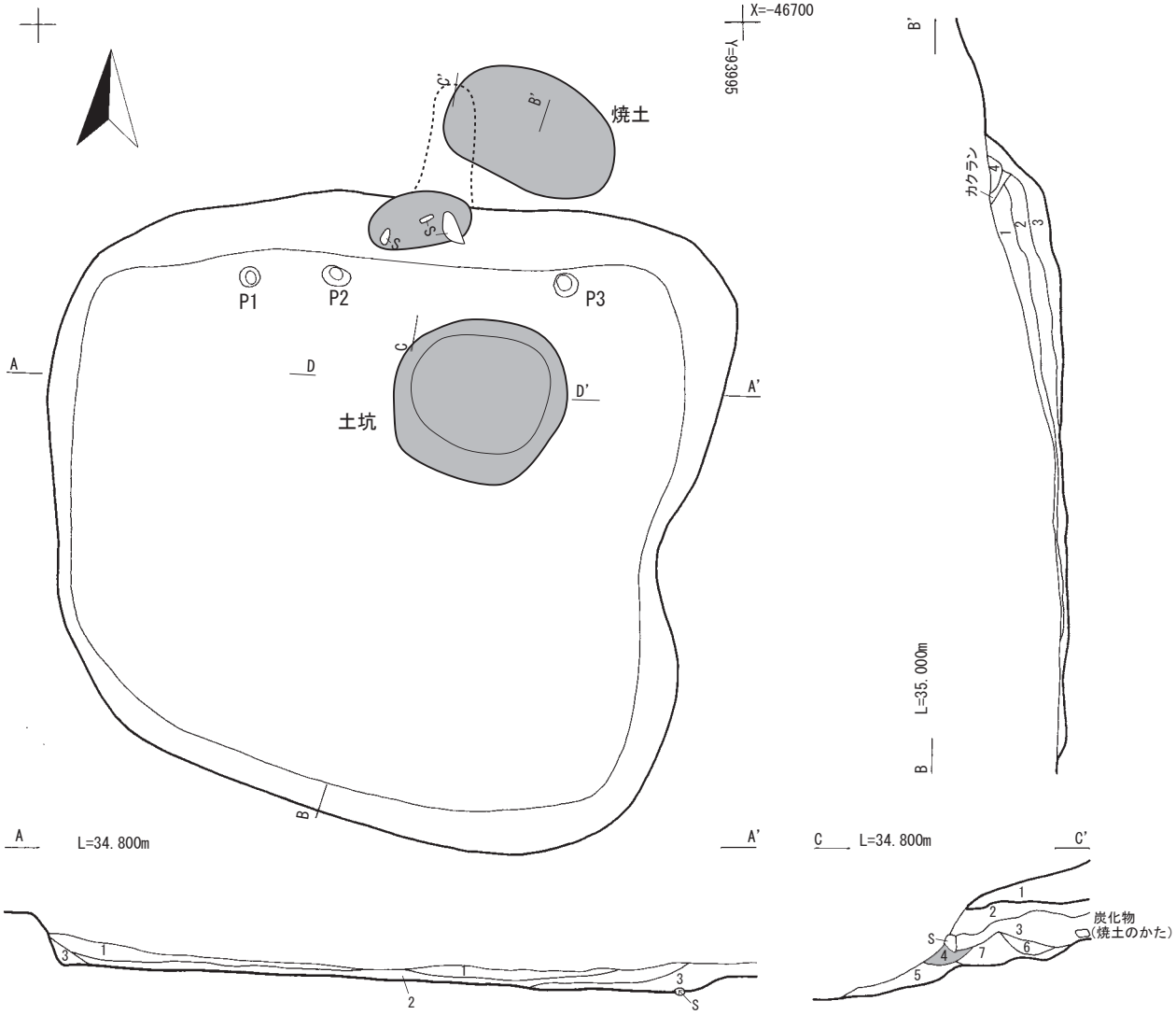
なお、根井沢穴田Ⅳ遺跡平成29年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。



第３図　周辺地形図



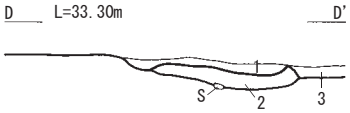
第４図　遺構配置図



1号住居ベルト断面　A-A′　B-B′
1　7.5YR2/1　黒色　シルト　粘性なし　しまり疎（極小の地山の土（7.5YR5/8橙色）が全体に混じる
2　7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性なし　しまり疎（中央部に地山の土が5㎝大で数個と極小のものが1%以下で混じる）
3　7.5YR4/4　褐色　シルト　粘性なし　しまり疎（壁の崩落土と思われる）
4　7.5YR4/4　褐色　シルト　粘性なし　しまり中（地山の土が流れ込んだと思われる。極小の炭化物が1%以下で混じる）

煙道部断面　C-C′
1　7.5YR5/6　明褐色　シルト　粘性なし　しまり密（煙道天井部・地山面）
2　7.5YR4/4　褐色　シルト　粘性なし　しまり密（北側に5㎜大の炭化物が数個混じっている）
3　7.5YR4/3　暗褐色　シルト　粘性なし　しまり密（層全体に極小の炭化物が1%以下で混じる）
4　2.5YR4/6　赤褐色　シルト　粘性なし　しまり密（全体に極小の炭化物が1%以下で混じる）
5　7.5YR5/6　明褐色　シルト　粘性なし　しまり中（4層との境もはっきりしている）
6　7.5YR4/3　褐色　シルト　粘性なし　しまり疎（極小の焼土が混じっている）
7　7.5YR4/4　褐色　シルト　粘性なし　しまりやや密（地山？）

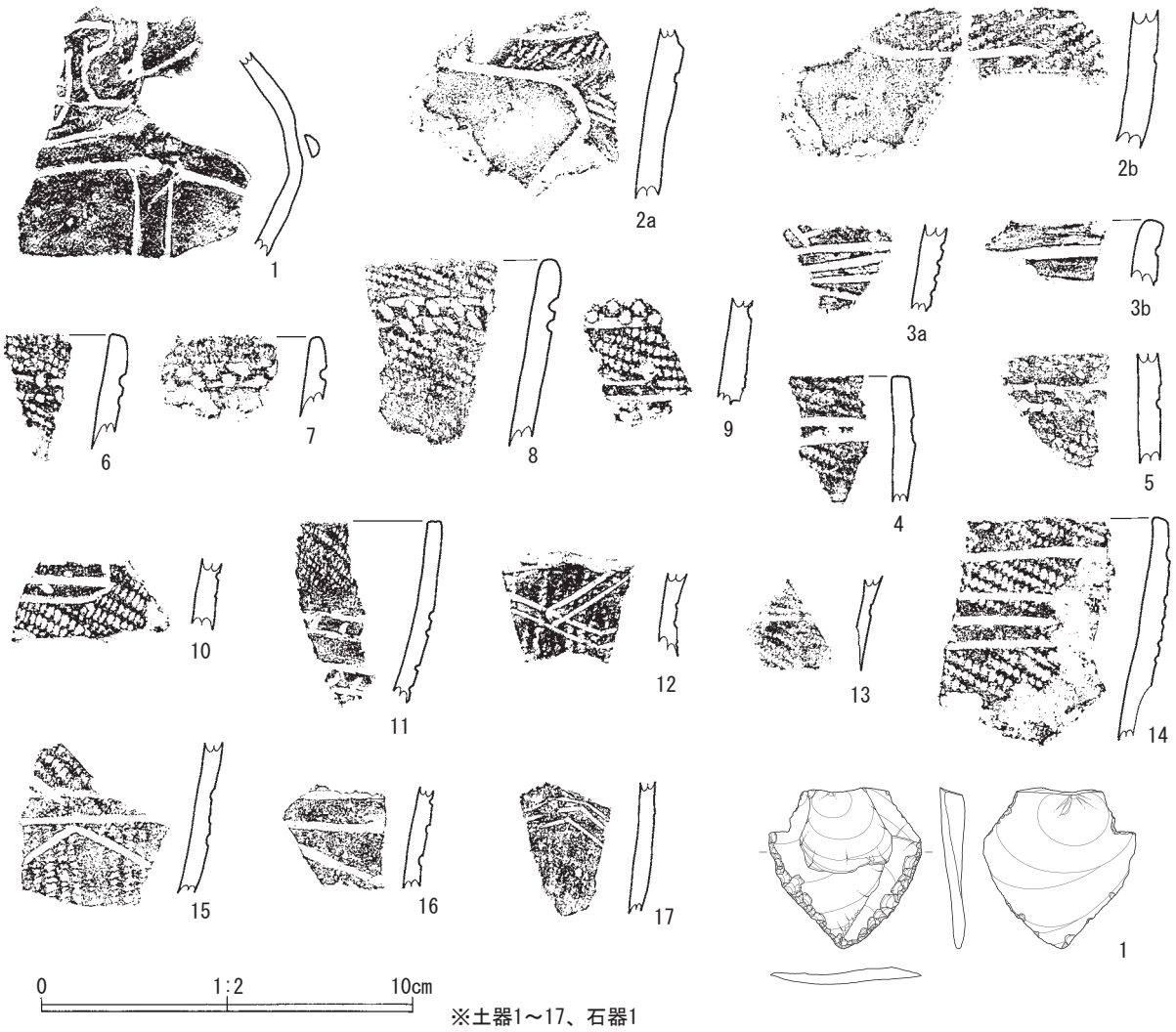
土坑　D-D′
1　7.5YR3/4　暗褐色　シルト　粘性なし　しまり密
2　2.5YR4/6　赤褐色　シルト　粘性なし　しまり疎（木根の撹乱が著しい）
3　7.5YR3/3　暗褐色　シルト　粘性なし　しまり疎（2～5㎜の炭化物含む）



焼土

0　1:50　2m

第５図　1号竪穴住居


1
2a
2b
3a
3b
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
1
0
1:2
10cm
※土器1～17、石器1

2
3
4
0
1:3
10cm
石器2・3・4
磨面
敲面

第６図　出土遺物

根井沢穴田Ⅳ遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

根井沢穴田Ⅳ遺跡は、岩手県宮古市津軽石第19地割穴田地内に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡から出土した炭化物１点である（表１）。

２　測定の意義

試料が出土した竪穴住居跡の年代を把握する。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

（１）$\delta^{13}C$は、試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代は$\delta^{13}C$によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以

上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

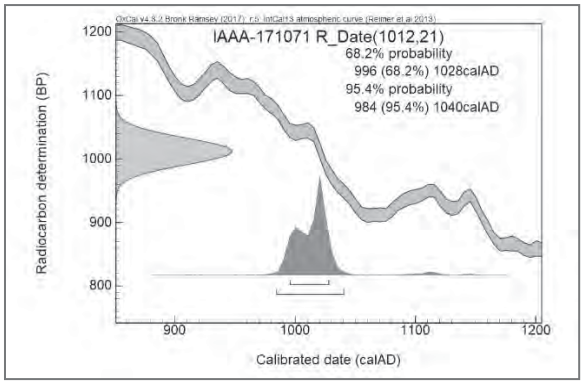
（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCal v4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

６　測定結果

測定結果を表１、２に示す。

試料No.1の^{14}C年代は1010±20yrBP、暦年較正年代（1σ）は996～1028cal ADの範囲で示される。

試料の炭素含有率は71%の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。



［図版］暦年較　正年代グラフ（参考）

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-171071	No.1	1号竪穴住居跡　炉上面	炭化物	AAA	**-25.92　± 0.35**	**1,010 ± 20**	**88.15　± 0.24**

[IAA登録番号：#8695]

表2　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-171071	1,030 ± 20	87.99 ± 0.23	1,012 ± 21	996calAD - 1028calAD (68.2%)	984calAD - 1040calAD (95.4%)

［参考値］

調査前　風景（南から）

調査後　全景（南から）

1号竪穴住居検出状況（北東から）

1号竪穴住居（南東から）

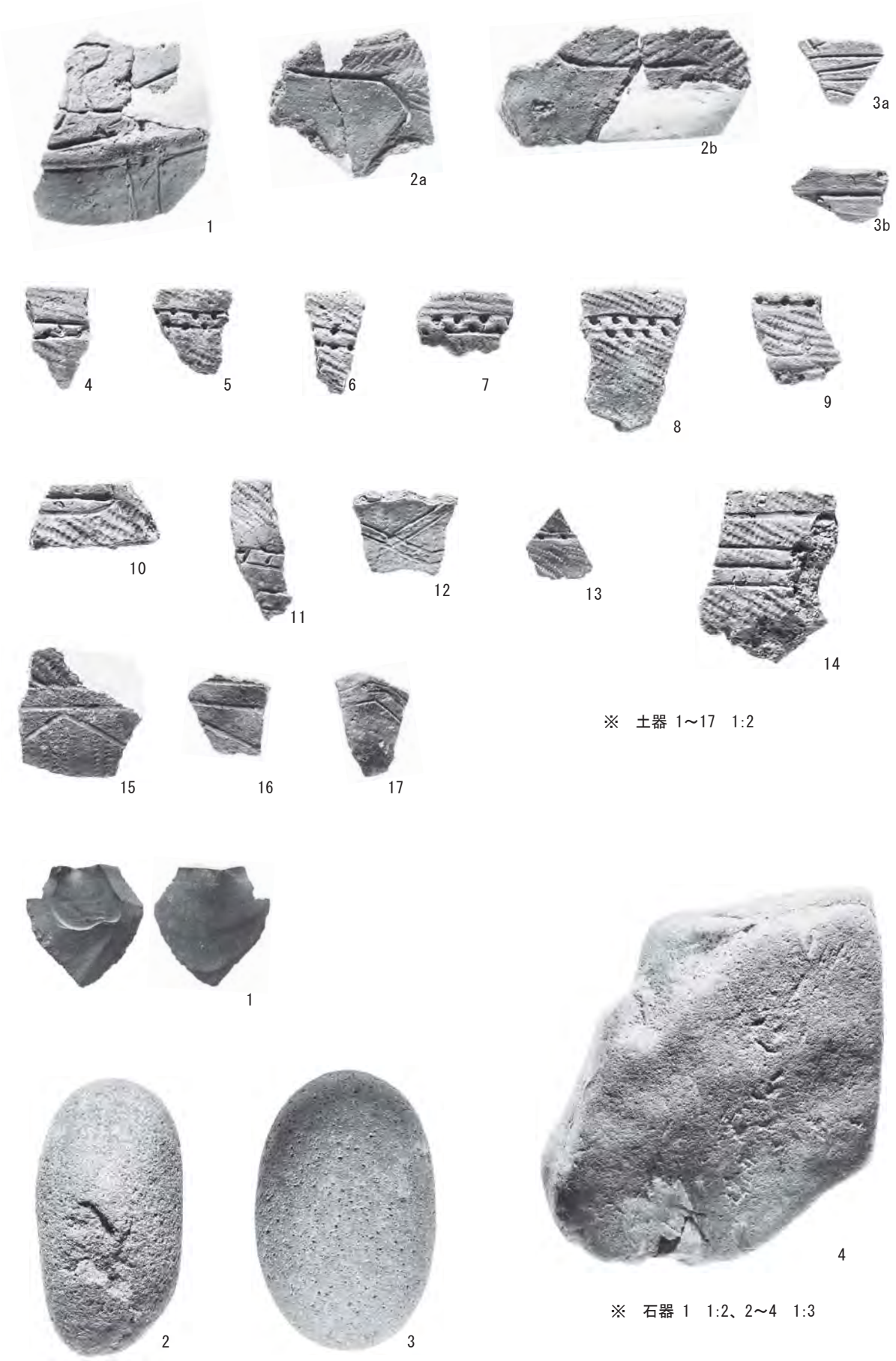
1号竪穴住居ベルト断面（東から）

カマド断面（南から）

煙道部断面（東から）

土坑断面（南から）

写真図版1　遺跡全景・検出遺構



※　土器 1～17　1:2

※　石器 1　1:2、2～4　1:3

写真図版２　出土遺物

（8）耳取（みみとり）Ⅰ遺跡

所在地	和賀郡西和賀町耳取第49地割98-5地先	**遺跡コード・略号**	ME60-0053・MTⅠ-17
委託者	県南広域振興局土木部花巻土木センター	**調査対象面積**	950㎡
事業名	地域連携道路整備事業	**調査終了面積**	950㎡
発掘調査期間	平成29年９月１日～９月15日	**調査担当者**	高木 晃・溜 浩二郎・藤田崇志

１　調査に至る経過

耳取Ⅰ遺跡は、『地域連携道路整備事業』による一般県道ゆだ錦秋湖停車場線岩滑橋の架替え及び橋梁前後の道路改良に伴い、その事業地内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

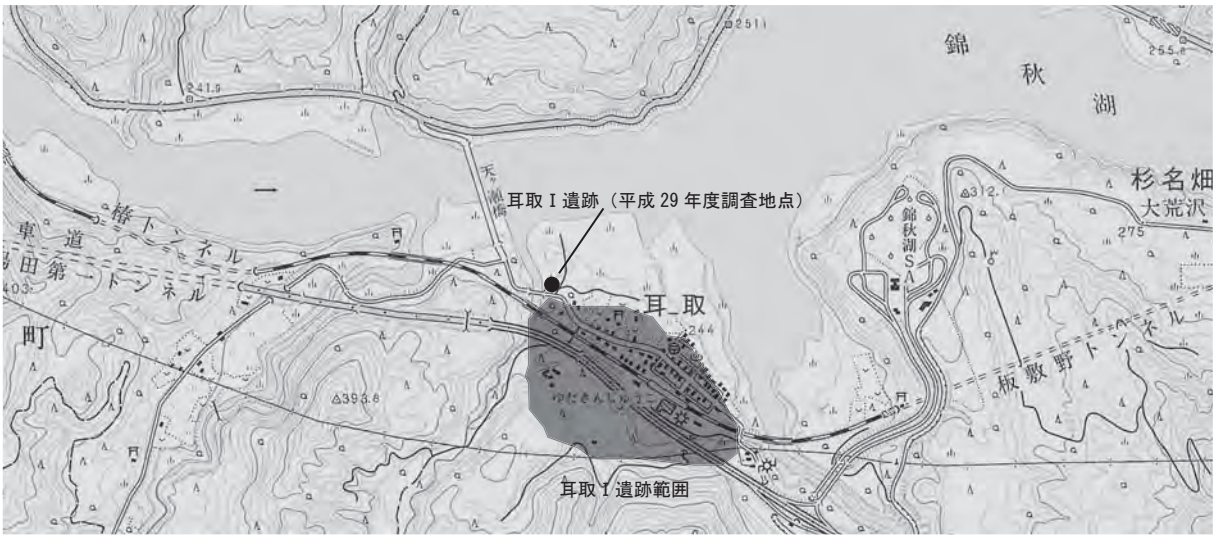
一般県道ゆだ錦秋湖停車場線は、和賀郡西和賀町の錦秋湖南側に位置し、JR 北上線ゆだ錦秋湖駅及び耳取集落と一般国道107号を結ぶ生活道路である。本路線は、駅及び集落から国道まで接続する唯一の路線であり、発災時に路線が寸断されると孤立するため、災害等に耐えうる橋梁・道路を整備するものである。

当該事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局土木部花巻土木センターから平成28年10月17日付け花土セ第297号『埋蔵文化財の試掘確認調査について（依頼）』により岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課に対して試掘調査の依頼を行なった。

依頼を受けた県教育委員会事務局は、平成28年11月24日～25日に試掘調査を実施し、工事に着手するには耳取Ⅰ遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成28年12月19日付け教生第1369号『埋蔵文化財の試掘確認調査について（回答）』により回答した。

その結果を踏まえて当所は岩手県教育委員会事務局と協議を行い、発掘調査を公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センターの受託事業とすることとした。これにより平成29年８月23日付けで県南広域振興局長と公益財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で受託事業を締結し、耳取Ⅰ遺跡の発掘調査を実施することとなった。

（県南広域振興局土木部花巻土木センター）



1：25,000　陸中川尻

第１図　遺跡位置図

２　遺跡の位置と立地

遺跡は、和賀郡西和賀町内の南部、JR北上線ゆだ錦秋湖駅から北西約700mに位置し（第１・２図）、錦秋湖に流れ込む岩滑沢沿いに立地する。調査区の標高は約232～241m、現況は山林である。

３　基本土層（第５図）

基本土層は土層が良好に観察できると推定された調査区東部斜面下で確認しⅠ～Ⅷ層に分層した。土色は表層から暗褐色→黒褐色→褐色とおおよそ推移し、遺物はⅣ層以下より出土している。

４　調査の概要

調査区東側の急斜面部下から岩滑沢へ至る緩斜面地の表土を重機で掘削、その後は人力で精査を行い、岩手県教育委員会の試掘トレンチ２本（Ｔ１・Ｔ２）を確認した。平坦面の大部分ではⅠ層を除去すると地山のⅧ層礫層が確認されることから、基本土層中のⅡ～Ⅶ層を確認できるのは東側斜面裾に限定される。遺物の取り上げには調査区に設定した４×４ｍグリッドを用いて行った。

（１）遺構

ＳＫ01土坑（第３・４図、写真図版１）

ＳＫ01は調査区中央南寄りの位置にあるＴ１の底面で検出した。平面形は不整円形で、規模は開口部が120×110cm、深さは30～40cmを測る。埋土は２層に分かれ、いずれも地山と同じ礫を多量に含む。底面は南北方向に伸びる楕円形である。出土遺物は無く、時期は不明である。

（２）遺物（第６図、表１・２、写真図版２）

今回の調査で土器片51点、石器４点、合わせて中コンテナ１箱分が出土した。選別基準として土器はおおよその年代が特定できる特徴を有するものを、石器は出土した全てを掲載した。

土器（１～９）：全て遺構外の攪乱もしくはトレンチ埋土から出土した。底部の残存する２を除き小片が殆どである。１は調整の程度や胎土に繊維を含むことから縄文早期末～前期前葉のものとみられる。２は縦長のＵ字状沈線文が４単位展開する。文様構成の特徴から大木９式と判断される。３は２と同一個体とみられ、４は無節縄文と沈線から縄文中期後葉、５は３本平行の沈線間に充填縄文が施されている特徴から縄文後期前葉、６は小片だが縄文の形状や調整痕から縄文後期～晩期と考えられる。７は肩部の破片で肩部に平行した沈線とその上部の山形沈線に沿って並ぶ円形の刺突文や附加条縄文があることから弥生中期後半～後期とみられる。８は調整や縄文から７と同一個体と推定される。９は器面が磨滅しているが、沈線や附加条縄文から弥生後期と推定される。

石器類（10～13）：10は先端を欠く無茎の石鏃とみられるが形状がやや左右非対称である。11は側縁部に二次加工が加えられる不定形石器、12は縁辺に使用による磨滅が確認される不定形石器である。13は末端部縁辺に微細剥離痕のある剥片である。

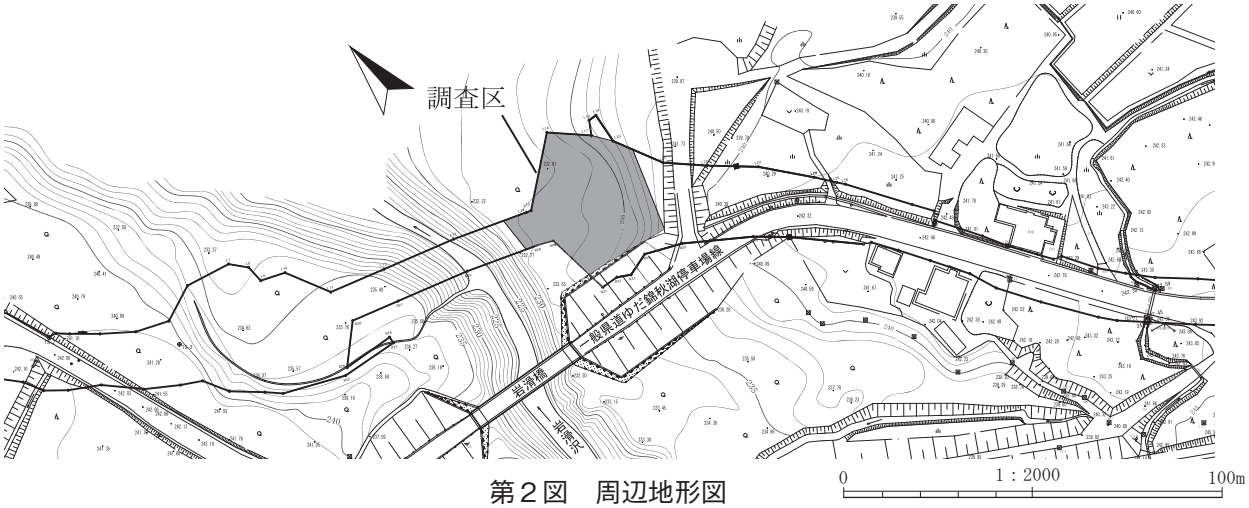
５　まとめ

今回の調査によって確認された検出遺構は時期不明の土坑１基のみ、出土遺物はごく少量ではあるが、縄文前期～弥生後期まで広い年代にまたがる。これにより、調査区周辺に同年代の居住地が存在した可能性が考えられる。

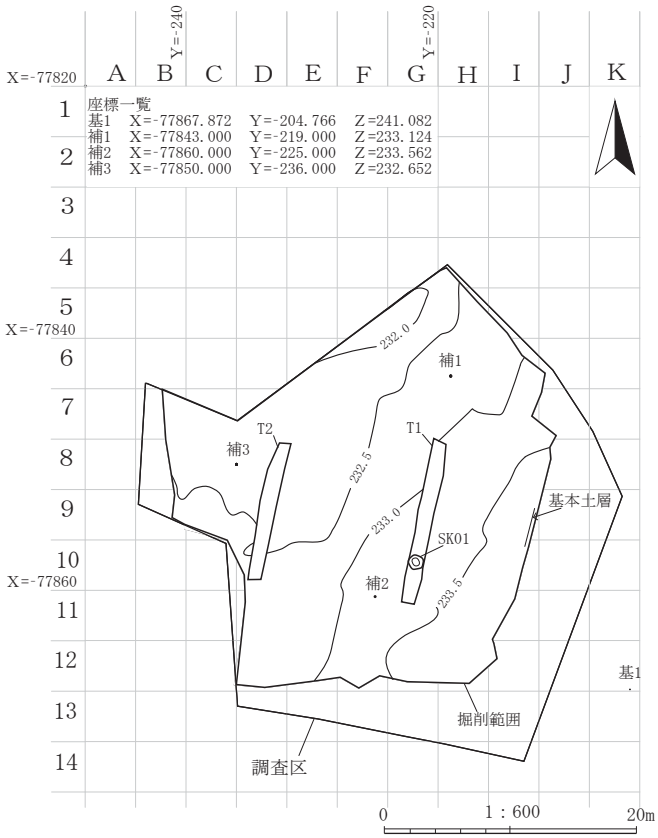
なお、耳取Ⅰ遺跡平成29年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

〈参考文献〉

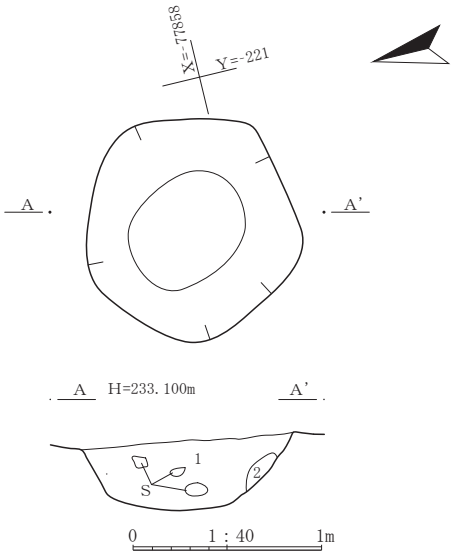
岩手県埋蔵文化財センター　1996『耳取Ⅰ遺跡Ａ地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第232集
岩手県埋蔵文化財センター　1999『耳取Ⅰ遺跡Ｂ地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第292集
佐藤由紀男　2015『考古調査ハンドブック12　弥生土器』ニューサイエンス社
鈴木克彦　2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣出版



第２図　周辺地形図

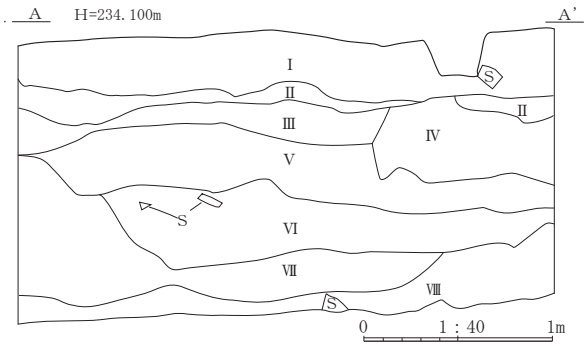


第３図　遺構配置図



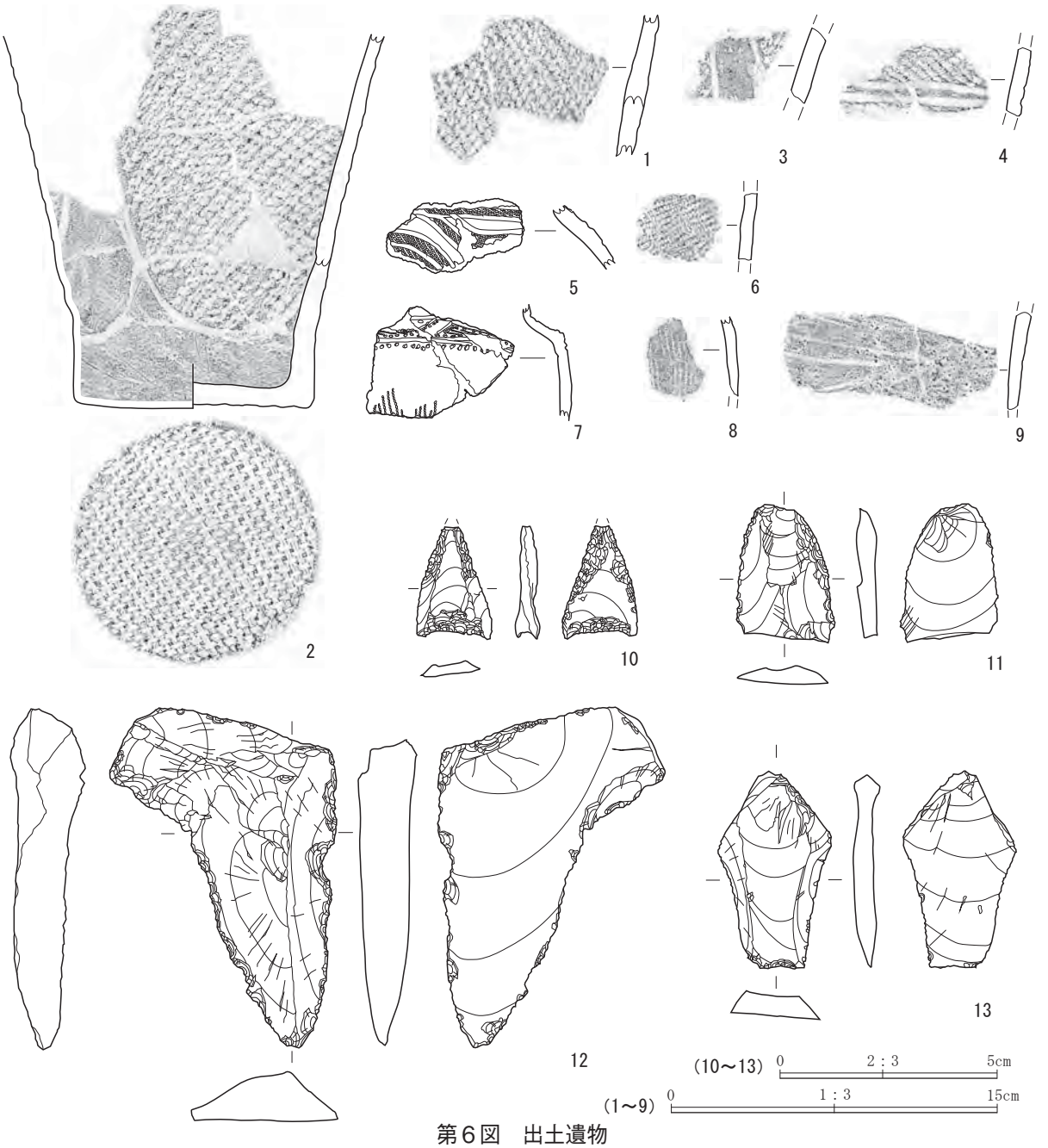
1　10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性やや有 しまりやや弱
　径10mm超の礫多量含む
2　7.5YR4/6 褐色シルト 粘性やや弱 しまり無し
　礫多量含む

第４図　ＳＫ01 土坑



Ⅰ　5YR2/1黒褐色 シルト 粘性なし しまりやや弱
　黒褐色シルト（7.5YR3/2）を30%含む 炭化粒微量 表土
Ⅱ　7.5YR3/4暗褐色 シルト 粘性やや有 しまりやや弱
　黒褐色土ブロックを10%程度・炭化粒微量含む
Ⅲ　10YR3/3暗褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや有
　径３～５mmの炭化粒微量含む
Ⅳ　7.5YR2/2黒褐色 シルト 粘性・しまりやや有 径３～５mm
　の炭化粒少量含む 暗褐色シルト（10YR3/4）10%含む
Ⅴ　10YR3/3暗褐色 シルト 粘性やや弱 しまり有 径１～３mmの
　炭化粒微量含む　褐色シルト（10YR4/6）30%含む
Ⅵ　10YR4/4褐色 シルト 粘性やや弱 しまり有 径１～３mmの
　炭化粒微量含む　径５～100mm超の礫含む
Ⅶ　7.5YR4/6褐色 シルト 粘性やや有 しまり有 炭化物微量
　含む 径５～10mmの礫含む
Ⅷ　7.5YR4/6褐色 シルト 粘性やや弱 しまり有 大礫多量含む
　地山

第５図　基本土層



第６図　出土遺物

第１表　土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	部位	特徴
1	７Ⅰ	Ⅵ層	深鉢類	胴部	ＲＬ 内面ナデ 繊維入り 縄文早期末～前期前葉
2	11G	Ⅶ層	深鉢	胴～底部	ＲＬＲ 内部ナデ Ｕ字形沈線文４単位 底面に網代痕 縄文中期後葉 大木９式
3	11G（Ｔ１）	埋土	深鉢	胴部	No.２と同一個体
4	10H	攪乱	深鉢	胴部	Ｌ（縦回転） 内面ミガキ 縄文中期後葉
5	10F	攪乱	壺類？	肩部	ＲＬ 内・外面ミガキ 充填縄文 縄文後期前葉
6	11F	攪乱	鉢類？	胴部	ＬＲ 内面ミガキ 外面に炭化物付着 縄文後期～晩期
7	11G（Ｔ１）	埋土	壺類	肩部	附加条Ｒ 内・外面ナデ ミガキ 弥生中期後半～後期
8	11G（Ｔ１）	埋土	壺類	胴部	附加条Ｒ 内・外面ナデ ミガキ 弥生中期後半～後期 No.７と同一個体
9	11G（Ｔ１）	埋土	甕類	胴部	附加条Ｒ 外面磨滅 炭化物付着 弥生後期？

第２表　石器観察表

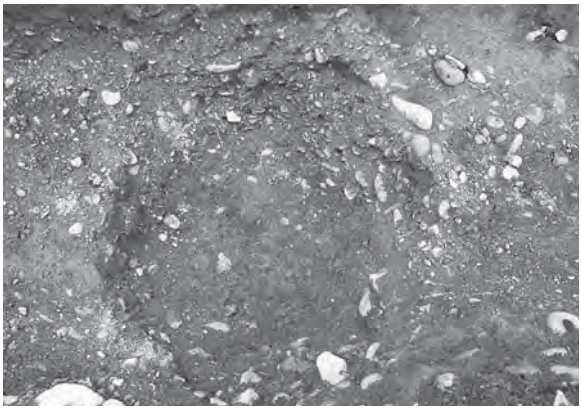
No.	出土地点	層位	器種	長・幅・厚（cm）	重量(g)	石質（年代・産地）	備考
10	11Ⅰ	Ⅳ層	石鏃？	2.5・1.5・0.6	1.4	頁岩（新生代新第三紀・奥羽山脈）	先端欠損 器体捻れ
11	９Ｅ	Ⅵ層	不定形石器	3.2・2.3・0.5	3.3	頁岩（新生代新第三紀・奥羽山脈）	２側縁に二次加工
12	７Ⅰ	Ⅳ層下	不定形石器	7.8・5.1・1.7	39.3	頁岩（新生代新第三紀・奥羽山脈）	２側縁に二次加工 磨滅あり
13	11G	Ⅶ層	剥片	4.5・2.6・0.6	6.5	頁岩（新生代新第三紀・奥羽山脈）	末端縁辺に微細剥離痕あり

調査前状況　（E→）

調査区全景　（E→）

基本土層　（W→）

土器出土状況　（E→）



SK01　完掘状況　（W→）

SK01　断面　（W→）

作業風景1　（E→）

作業風景2　（N→）

写真図版1　調査区全景・基本土層・遺構等

１～９はＳ＝約１：２
10～12はＳ＝約２：３

写真図版2　出土遺物

（9）千厩城遺跡

所在地	一関市千厩町千厩字舘山31-10地内	**遺跡コード・略号**	OF00-0359・SJ-17
事業名	県単独急傾斜地崩壊対策	**調査対象面積**	560㎡
委託者	県南広域振興局土木部千厩土木センター	**調査終了面積**	560㎡
発掘調査期間	平成29年11月１日～12月１日	**調査担当者**	西澤正晴・澤目雄大

１　発掘調査に至る経過

千厩城遺跡は、「舘山地区急傾斜地崩壊対策事業」による法面対策工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

舘山地区は、岩手県一関市千厩町市街地南部の岩手県内陸部と宮城県沿岸部を結ぶ国道284号沿線の中間点に位置し、産業・経済・観光そして文化交流に重要な役割を担った地域である。

事業対象箇所は、一関市千厩町市街地を貫流する千厩川左岸の河岸丘陵地に広がる急傾斜地に家屋連担な地区であり、平成23年３月11日に発生した東日本大震災により、傾斜地冠頭部の一部に亀裂が発生したものである。降雨浸透等により崩落の危険性が増大し、がけ下の人命及び住家を保全するため、一連区間の不安定斜面の安定を図るべく法面補強工事により整備を行うものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局土木部千厩土木センターから平成29年４月27日付け千土セ第36号「急傾斜地崩壊対策事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

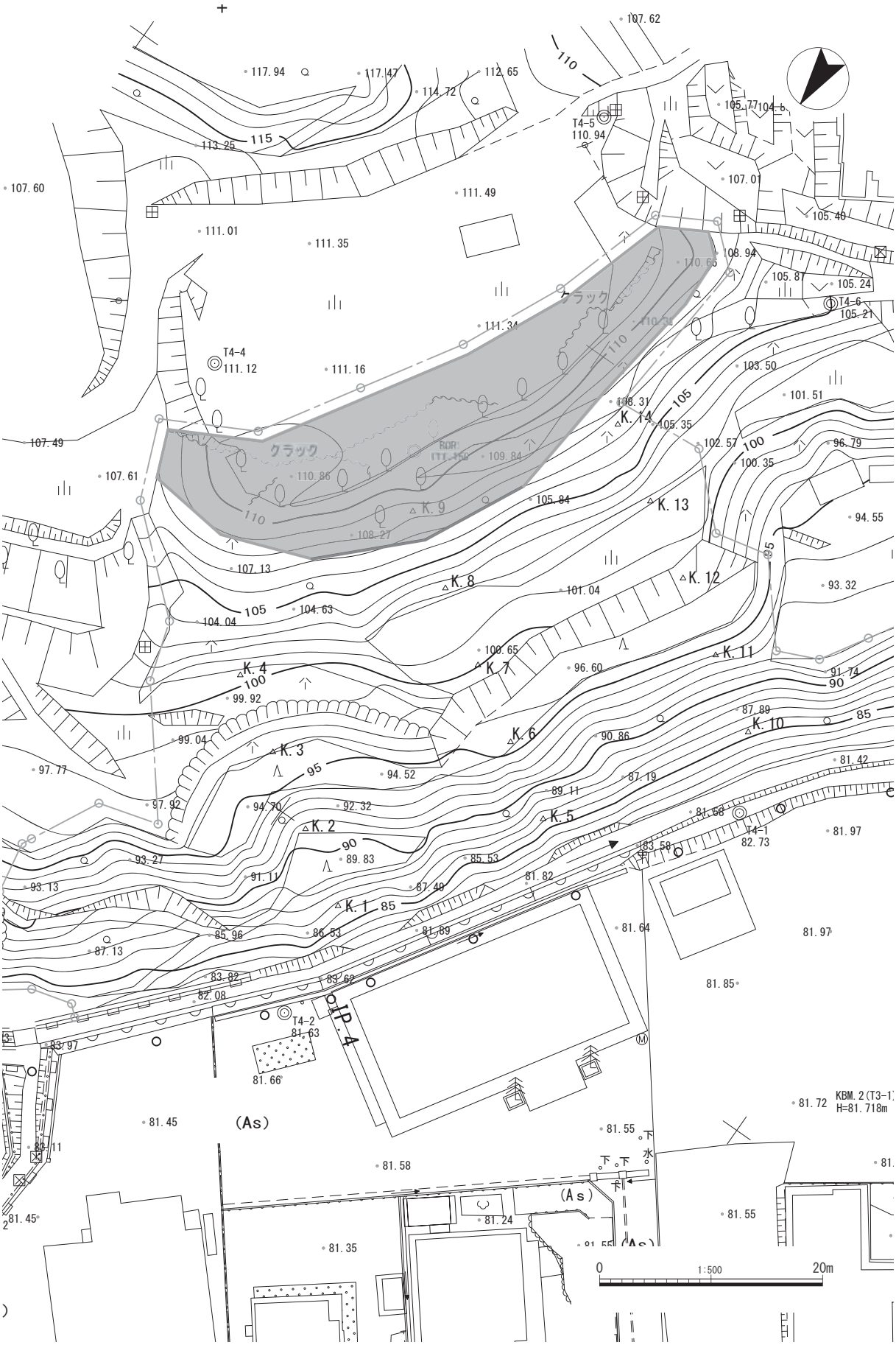
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成29年５月19日に試掘調査を実施し、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨を、平成29年６月２日付け教生第348号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答してきた。これを受けて当土木部は９月６日付け千土セ第125号で岩手県教育委員会へ発掘調査を依頼し、教育委員会から平成29年９月28日付教生第861号「平成29年度埋蔵文化財発掘調査について」により通知があった。

これを踏まえて当土木部は、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成29年10月31日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局土木部千厩土木センター）

1：25,000　千厩北部　千厩南部

第１図　遺跡の位置


クラック
K.1
K.2
K.3
K.4
K.5
K.6
K.7
K.8
K.9
K.10
K.11
K.12
K.13
K.14
T4-1
T4-2
T4-4
T4-5
T4-6
TP.4
(As)
KBM.2(T3-1)
H=81.718m
0
1:500
20m

第２図　調査区の位置

２　遺跡の位置と立地

遺跡は、一関市役所から東へ18km、JR大船渡線千厩駅より南西約1.4kmに位置する。南側から延びる丘陵上、現在の市街地を北に見下ろす台形を呈する尾根の先端に立地する。北側は高低差が30mもある急斜面になり、丘陵の下には千厩川が流れている。丘陵の北東端には体育館などの公共施設があり、南側を中心に宅地化が進み地形が激しく改変されている。

今回の調査地は、北側中央の斜面地に相当する。急斜面であるがいくつか人工的な平坦面が確認できる地点でもある。調査地点付近の標高は111mであり、斜面下の宅地では標高82m前後となる。調査前頂部は駐車場として利用され、斜面地はおもに笹竹が覆い繁っている状態であった。

３　千厩城について

現在想定されている千厩城遺跡の範囲は、東西600m、南北330mもある広大な範囲である。中央部には大きな沢が入り込み、その両側に尾根が張り出す地形である。このうち東側の尾根を主郭や二の郭として、西側の尾根を三の郭として想定されている。大手は街道側（北側）のいずれかにあり、搦手は南側で、堀切り等の痕跡が残っていたとされるが、現状では不明である。

千厩城に関わる歴史資料はあまり多くなく、仙台藩が編纂した『仙台領古城書上』には以下の記述がある。「一山　千厩城　東西三十八間　南北二十四間　二ノ丸　東西三十八間　南北二十七間　城主今野右馬丞」とある。城主と考えられる今野（金野）氏は葛西家の家臣で、中世を通してこの地を治めていたとされる。天正十八年（1590年）に豊臣秀吉による奥州仕置以降に廃城になったという。この間の金野家をはじめとする歴史については、地元の郷土史家による研究がさかんに行われている。

現在では、千厩城遺跡は、大きな改変を受けているため当時の状況を確認することは困難であるが、『岩手県中世城館分布調査報告書』（岩手県教育委員会1986）所収の縄張り図と、一関市教育委員会に所蔵されている昭和40年頃撮影の航空写真（P120）などからある程度推定できる。『岩手県中世城館分布調査報告書』によると、城のおもな構成は、東側から順に主郭、二の郭があり、中央にある沢を挟んで三の郭からなる。主郭は、帯曲輪状の平坦面が三段に重なり、その上の平坦部に主要な建物等が普請されていたと思われる。現在では、この段がすべて削平され、体育館などの公共施設が建設されている。この主郭の西側に堀切りを挟んで西側に二の郭がある。現在では一部道路等で破壊されているが、旧状を残す数少ない地点である（旧千厩町教育委員会で柱穴を確認したことがあるという）。中央にある沢には池があり、水が湧く。三の郭はその沢の西側にあり、現在では舘山公園となっている。この周辺も宅地化が進んでいるが、斜面等にいくつかの段が確認でき、旧地形を反映していると推定できる。南側は、丘陵が続くが、堀切りないしは柵などで区切られていると想定されている。北側の斜面は、四方の中でもっとも急斜面であり、なおかつそこには切岸などを複数が重なるように構築されている。さらに北にある千厩川（氾濫原を含む）で画される。北側を中心に防衛施設が整えられることから、街道が通るこの北側が正面と捉えることができよう。

昭和43年に、岩手国体のバスケットボール会場となるため町営体育館（現一関市千厩体育館）や社会福祉会館（現千厩市民センター）が建設された。これにともなって、丘陵上の平坦面はかなりの改変を受けている。その後宅地化も進み、ますます当初の地形が分からなくなってきている。斜面部のうち東側、西側、南側も宅地化が進み、いくつかの小規模な平坦面は確認できるが、判別しにくくなっている。これに対して、北側の斜面は、頂部の平坦面は削平されているとはいえ、比較的残存状態は良い。切岸とそれにともなう平坦面がいくつか確認できる。

今回の調査区は、二の郭前面にある平坦面とそこからつづく北側の斜面となる。

第３図　千厩城と周辺の遺跡

４　基本層序

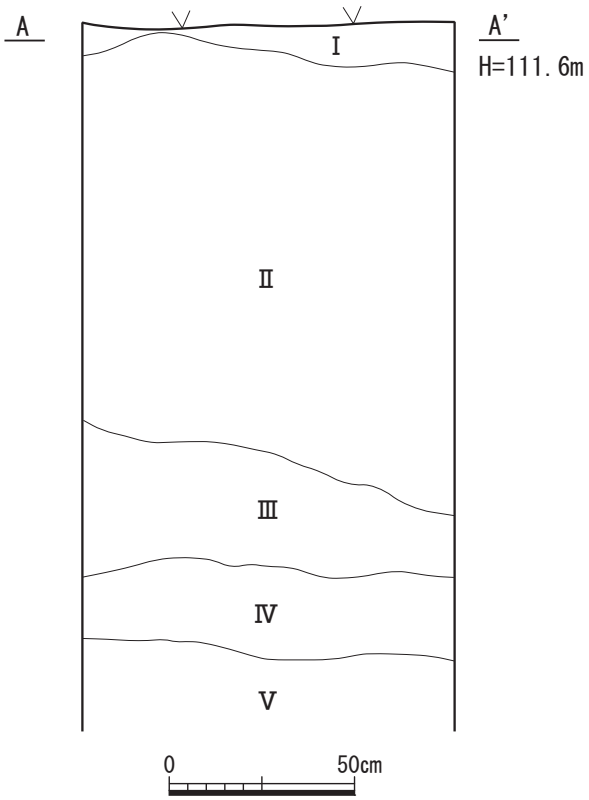
調査区内における基本層序は以下の通りである。調査区全体で、Ⅱ層が広く覆われており、削平と盛土が広範囲に行われていたことが判明している。現況と旧地形は大きく異なっている。

Ⅰ　10YR3/1黒褐色シルト　腐植土層で、現在の表土である。頂部では非常に薄い。

Ⅱ　10YR7/6明黄褐色シルト　マサ土ブロック、旧表土由来の黒褐色シルトとの混合層である。ガラスビン、ビニールを含む。昭和40年頃の造成土と考えられる。

Ⅲ　10YR4/4褐色シルト～10YR3/3暗褐色シルト　風化花崗岩のブロック（径1～2cm）を１％含む。旧表土とかつての流出土を一括している。頂部では確認できずおもに斜面部に残存している。

Ⅳ　7.5YR5/8明褐色シルト　風化花崗岩層の上部に載る。斜面部で顕著に認められる。



第４図　基本土層模式図

Ⅴ　10YR8/2灰白色中砂混じりシルト　風化花崗岩層。いわゆるマサ土である。切岸はこの面を利用している。

５　調査内容

（１）概要

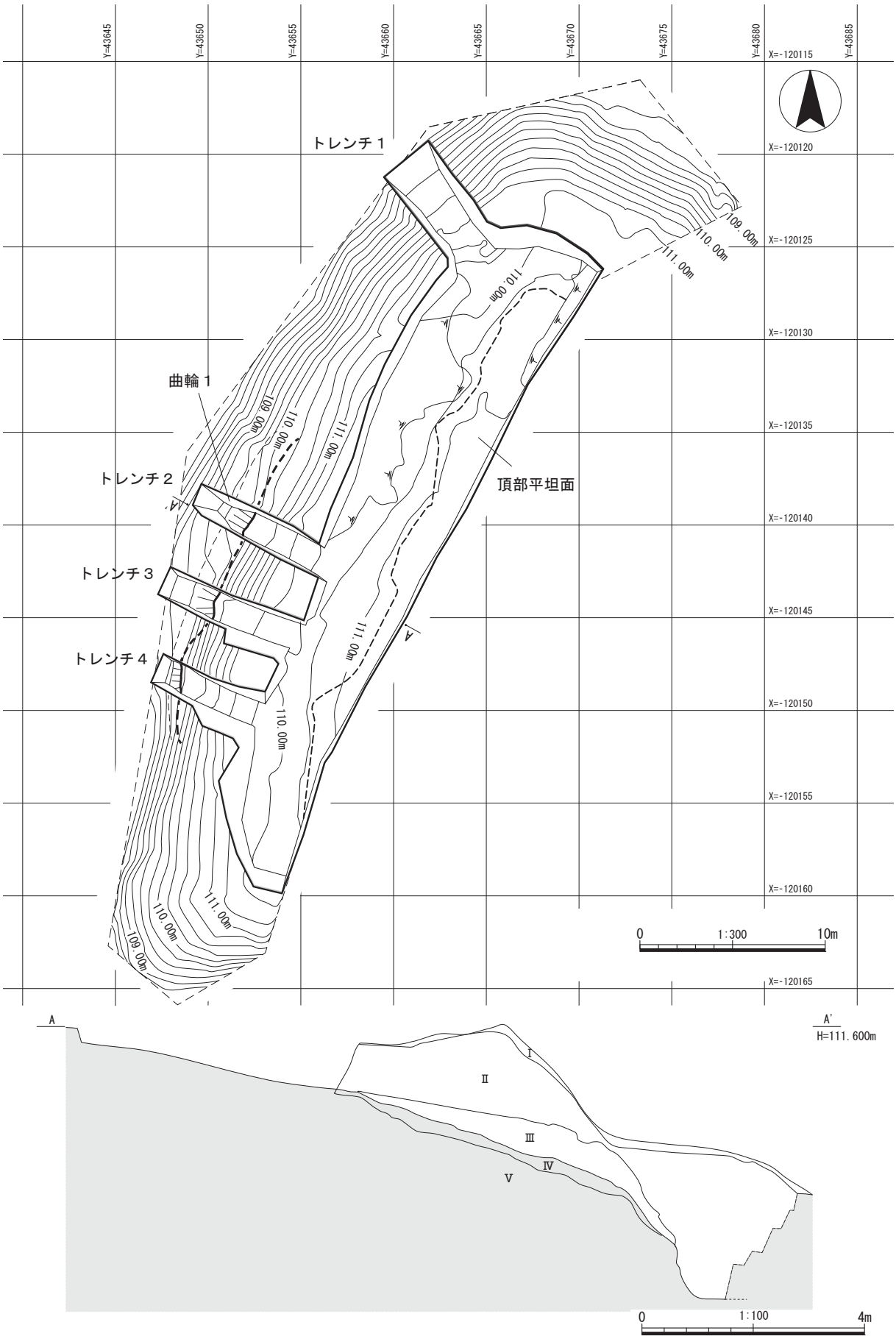
工事において掘削が及ぶ範囲が本調査の範囲となる。調査地は、現状では頂部の平坦部と斜面上方部からなっている。重機による表土除去と人力による遺構検出の結果、頂部の平坦面と切岸と平坦面からなる曲輪（以下ここでいう曲輪とはこの切岸＋平坦面からなる細長い空間を指す）が１箇所確認できた。また、調査区周辺の地形測量も行っており、あわせて報告する。

（２）検出遺構と遺物

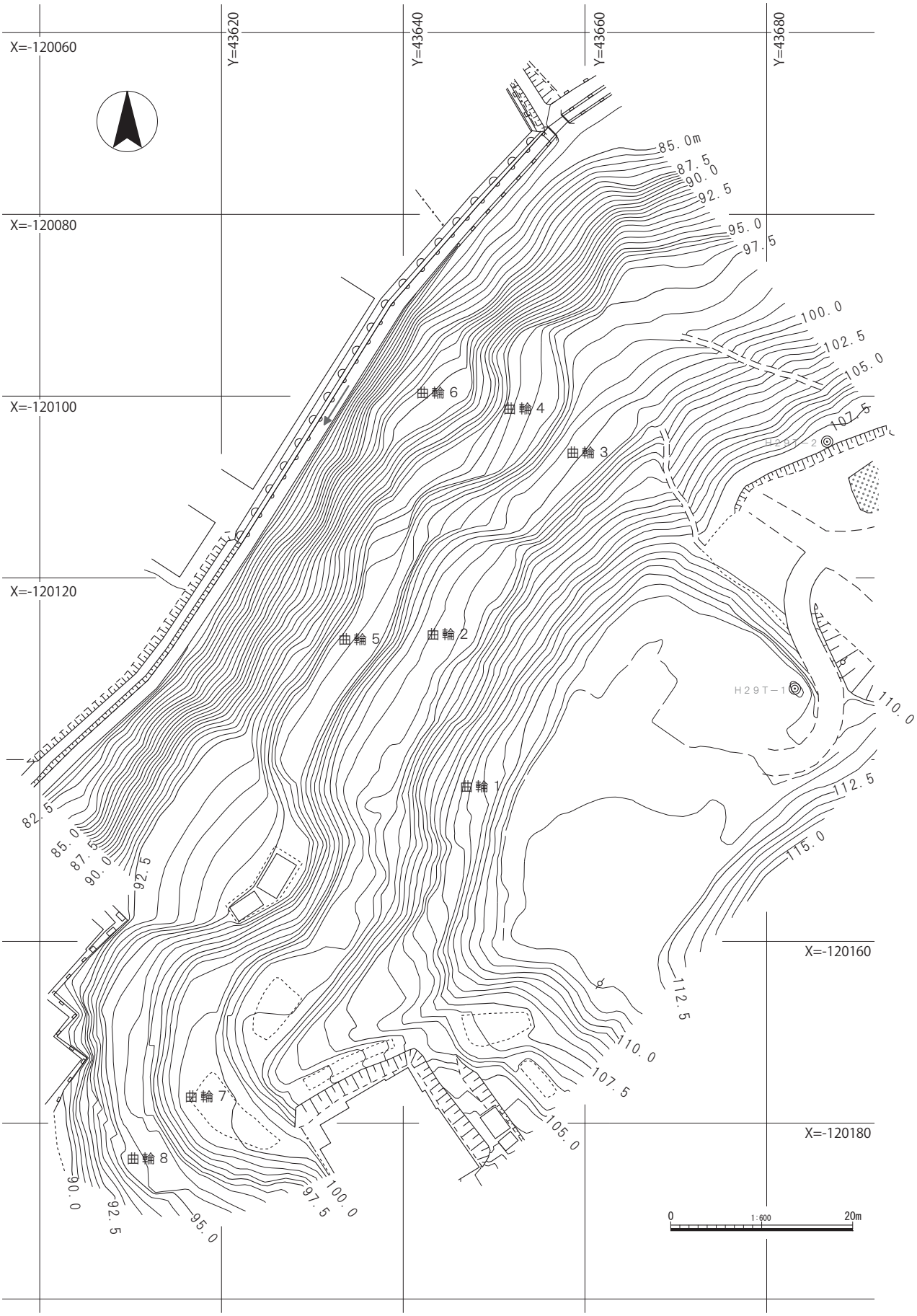
曲輪１（第５図）

調査区の西端のトレンチ２～４にかけての範囲に位置する。この遺構周辺を含めて広く、厚さ1.5～２ｍの盛土造成が行われている。地元住民の話によると、体育館建設時前後の時期に尾根を削り、斜面側に残土を移動したとのことである。この盛土除去後に曲輪１を検出した。確認できた長さは11ｍ、幅はわずか50cmほどである。平坦面の標高は106.67ｍ、切岸の角度はもっとも急なところで約70°である。トレンチ１とトレンチ２の間は、桜が植えられており、トレンチを設定することができなかった。遺構はさらに南北へ広がっているが、北はトレンチ１までは延びていない。南は調査区外へ続く。現地表面の等高線をみると、本遺構に相当する範囲に傾斜変換線が確認できる。地下にある曲輪１の影響を受けていると想定されることから、この曲輪の範囲もおおよそこの範囲と推定できる。また、昭和40年頃の航空写真には、二の郭前面にある平坦地と上から数えて１段目の曲輪が確認でき、このうち１段目の曲輪に本遺構は相当すると考えられる。

なお、遺物の出土はなかった。


Y=43645
Y=43650
Y=43655
Y=43660
Y=43665
Y=43670
Y=43675
Y=43680
Y=43685
X=-120115
X=-120120
X=-120125
X=-120130
X=-120135
X=-120140
X=-120145
X=-120150
X=-120155
X=-120160
X=-120165
トレンチ１
トレンチ２
トレンチ３
トレンチ４
曲輪１
頂部平坦面
109.00m
110.00m
111.00m
0
1:300
10m
A
A'
H=111.600m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
1:100
4m

第５図　遺構配置図


X=-120060
X=-120080
X=-120100
X=-120120
X=-120160
X=-120180
Y=43620
Y=43640
Y=43660
Y=43680
85.0m
87.5
90.0
92.5
95.0
97.5
100.0
102.5
105.0
107.5
110.0
112.5
115.0
82.5
曲輪 1
曲輪 2
曲輪 3
曲輪 4
曲輪 5
曲輪 6
曲輪 7
曲輪 8
H29T−1
H29T−2
0
1:600
20m

第６図　地形測量図

頂部平坦面について

調査区の東辺中心に確認できた平坦面である。調査区の東端に、長さ31m、最大幅３m分を確認したのみである。したがって、全容は不明と言わざるをえない。確認できた範囲では、盛土直下にＶ層（マサ土）があり、上部はかなり削平されたと考えられ、また撹乱が多くある。昭和40年頃の航空写真との比較では、二の郭前面に面積の大きな平坦地があり、今回確認した頂部平坦面は削平されているものの、この一部に相当すると考えている。厳密には、この頂部平坦面は遺構そのものではないが、旧地形の影響は受けていると考えている。

（３）調査区外の状況

調査区の北西側、斜面中位から下位にかけては複数の段差が確認できた。これらは、斜面の崩落や一部畑として改変を受けているとはいえ、切岸とそれに対応する平坦面（曲輪）と考えられる。トレンチなど実際には表土を除去する作業は行っていないが、地表面の観察と測量調査を行っている。

曲輪１の下方、標高100～101m付近には長い帯曲輪状の平坦面が２箇所ある（曲輪２・３）。

曲輪２は、上部は盛土によって埋もれていると想定されるが、長さは、崩れた斜面を挟んで約55mは確認できる。幅（奥行）は盛土のため不明である。

曲輪３は、曲輪２の東側に一段低くある。長さは28m、幅は最大で４mである。次の段も２箇所の曲輪がある（曲輪４・５）。標高は95～96m付近に相当する。

曲輪４は長さ25m、幅５m程である。曲輪５は、それよりもやや高い位置にあり、長さ32m、幅が３m程である。曲輪４の下段にはさらにもう１箇所の曲輪がある（曲輪６）。標高が90m付近であり、上の段とは５mを超える差がある。かなり急な切岸である。長さ15m、幅５mである。それより下は河川等の浸食を受け崖となっている。

また、西側には半円形を呈する曲輪が二段にわたって構築されており、北側斜面を中心に防衛施設がよく残存している。

６　総括

これまで触れたように、今回の千厩城遺跡の調査からは、二の郭の前面の平坦地と埋もれた曲輪が１箇所ずつ確認できたのみであるが、この北側斜面一帯には小さな曲輪が連続して構築されていることが改めて判明した。また、地形が改変されており今後確認することは難しいが、縄張り図や昭和40年頃の航空写真から読み取れる二の郭前面（北側）にある空閑地については課題となる。航空写真が撮影された頃にはすでに地形が改変されていた可能性もあるが、面積もあり平坦に見えることから郭として利用されていたかもしれない。

なお、本遺跡に関わる報告はこれを以てすべてとする。

謝辞　野外調査や報告書作成に関わり下位の機関・個人には多大な協力を得た。記して感謝申し上げます（五十音順・敬称略）。
一関市教育委員会　一般社団法人一関市体育協会　菅原孝明　二階堂里絵　畠山篤雄（一関市教育委員会）
熊谷美和子（せんまや街角資料館）　佐藤敬悦（千厩市民センター）　村田光一（東磐史学会）

引用・参考文献

岩手県教育委員会　1986『岩手県中世城館分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
紫桃正隆　1972『史料　仙台領内古城・館』第一巻　仙台　宝文堂
仙台叢書刊行会　1923「仙臺領古城書上」『仙臺叢書』第四巻
千厩町教育委員会　1974『千厩町史資料』第２集
宮城県　1970「仙台領古城書立之覚」『宮城縣史32』資料集Ⅲ　風土記補遺

近景写真1（直上から）

近景写真2（西から）

写真図版１　航空写真（1）

平成29年の千厩城（北から）

昭和40年頃の千厩城（写真上が南）　一関市教育委員会所蔵

※▲ 主郭の位置　△調査地点

写真図版２　航空写真（2）

調査区全景1　（直上から）

調査区全景2　（北から）

写真図版３　調査区全景

曲輪1（トレンチ2）　東から

曲輪1（トレンチ3）　北東から

曲輪1（トレンチ4）　南東から

調査前現況1　（北から）

調査前現況2　（南から）

曲輪2・3の状況　（東から）

曲輪2の状況　北東から

曲輪4の状況　北東から

写真図版４　曲輪の状況

Ⅱ　発掘調査概報

凡例

・遺跡位置図は、1:50,000である。国土地理院2001『数値地図－岩手』を使用した。

・本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30㎝

中コンテナ：42×32×20㎝

小コンテナ：42×32×10㎝

・本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。

（例）竪穴住居跡→竪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

(10) 町屋敷（まちやしき）遺跡

所在地	奥州市水沢区真城字町屋敷 64-1 ほか
委託者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事業名	一般国道４号水沢東バイパス
発掘調査期間	平成 29 年７月４日～ 11 月 30 日
調査終了面積	5,020㎡
調査担当者	羽柴直人・對馬利彦・出町拓也
主要な時代	近世・奈良

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線水沢駅の南東約2.1㎞に位置する。胆沢扇状地の東端部を構成する水沢高位段丘上に立地し、標高は約41ｍである。調査前は住宅、及び果樹の畑として利用されていた。

調査の概要

検出遺構は、奈良時代の竪穴住居３棟、近世の掘立柱建物52棟、柱列５条、土坑135基、溝５条、及び縄文時代の陥し穴状遺構３基である。出土遺物は奈良時代の土師器小コンテナ１箱、近世～近代の陶磁器中コンテナ10箱、石製品（砥石、挽臼など）中コンテナ４箱、土製品など小コンテナ１箱である。

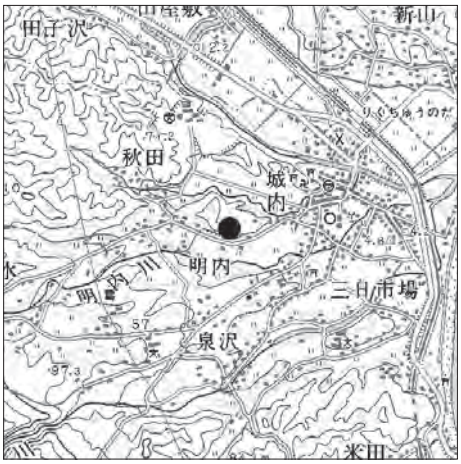
遺跡の主体をなすものは近世の屋敷跡である。町屋敷地区には道路に沿って規格的に屋敷を配置した近世の「街村」の痕跡が見出され、これが「町屋敷」の地名の由来となっている。今回の調査範囲も「町屋敷」の一部分であり、近世以来踏襲されている市道町屋敷３号線に面する形で、南北それぞれで２箇所ずつ、合計４箇所の屋敷が検出されている。それぞれの屋敷では、掘立柱建物で構成される主屋、附属屋の配置が見て取れ、屋敷地同士を区分する溝跡も検出されている。「町屋敷」の成立は今回出土した陶磁器の年代観から17世紀中頃と推測される。

また、南側調査区では、屋敷を構成する掘立柱建物より古い、調査区外東側に連続する大規模な溝が検出されており、調査区外東側に所在したとされる「瀬台野御蔵場」に関連する区画溝と推測される。瀬台野御蔵場は享保３年（1718年）に廃止されており、南側調査区東側の屋敷については、その後に成立したと理解される。

調査区全景（上が西）

掘立柱建物の主屋と附属屋

（11）伏津館跡（ふしつだてあと）



所　在　地　九戸郡野田村大字野田第 21 地割字日向下 79-7
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年 10 月 16 日～ 12 月 7 日
調査終了面積　850㎡
調査担当者　北田 勲・藤田崇志・佐藤桃子
主要な時代　弥生・古墳末～奈良

遺跡の立地

伏津館跡は野田村北部に位置しており、野田村役場の西約800mの独立丘陵に立地している。現況は山林で、標高は26～33mである。

調査の概要

平成25・26年度に続き、３箇年目の調査である。確認された遺構は、弥生時代前期の竪穴住居１棟・土坑１基・遺物包含層300㎡、古墳時代末～奈良時代の竪穴住居４棟・焼土１基・溝１条、出土した遺物は弥生土器小コンテナ0.5箱・石器小コンテナ１箱、古墳時代末～奈良時代の土師器大コンテナ２箱・土製紡錘車７点・有孔石製品１点・コハク４点・炭化材中コンテナ１箱である。

前回の調査成果から伏津館跡は、室町時代前半（15世紀）に造営された城館あることが分かっているが、今回の調査範囲は城館縄張りの南端に位置する堀より南に立地していることから、中世に関する遺構は検出されなかった。遺跡の内容は、野田村の台地上に立地する中平や上泉沢など古代の遺跡に類似しており、該期の集落が台地上に広く営まれていたことが分かってきた。

調査区全景（北西から）

(12) 田ノ端Ⅱ遺跡

所　在　地　九戸郡洋野町種市第42地割田ノ端地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成29年10月16日～12月15日
調査終了面積　1,000㎡
調査担当者　村木 敬・山川純一・佐々木昭太・佐々木あゆみ
主要な時代　縄文

遺跡の立地

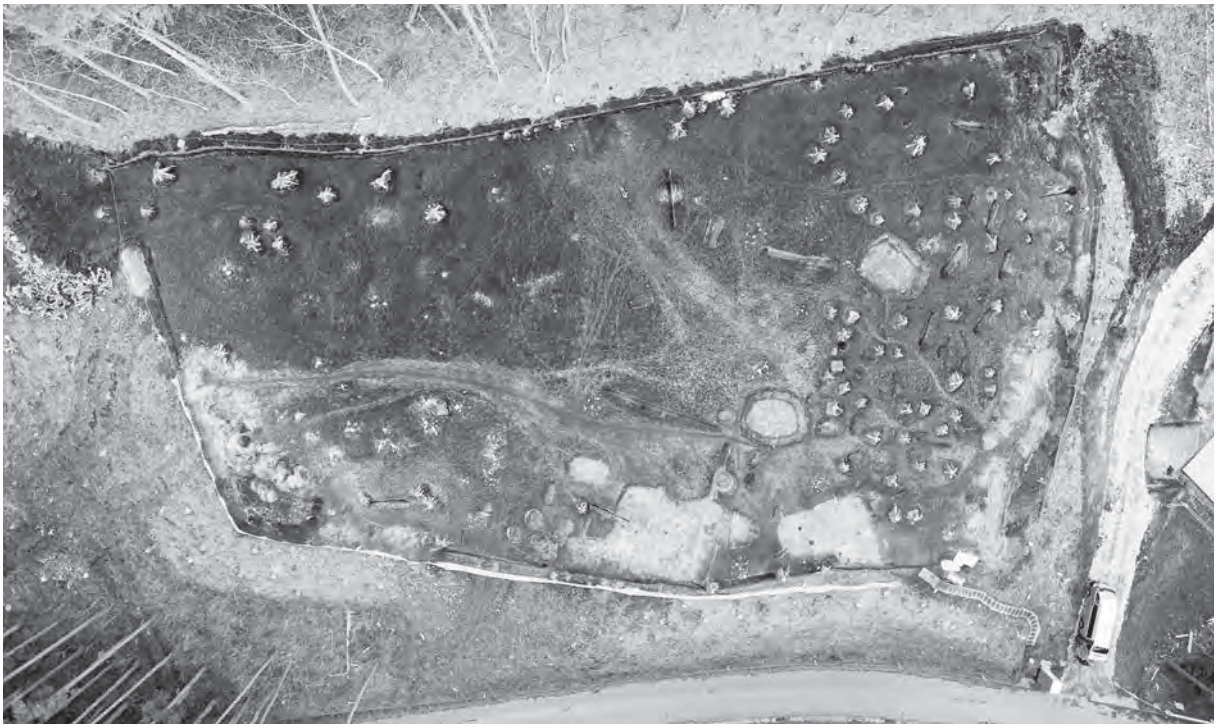
遺跡は、洋野町役場の北西約５㎞に位置する。東流する二十一川右岸の段丘に形成されており、標高89m前後の斜面上に立地している。調査前の現況は山林である。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代前期から後期にかけての竪穴住居６棟、竪穴状遺構14基、土坑46基、埋設土器１基、陥し穴状遺構10基、柱穴４個である。

出土遺物は、縄文時代前期の土器が大コンテナ４箱、石器が中コンテナ７箱である。

今回の調査からは、丘陵頂部に竪穴住居、東斜面に土坑が形成されている縄文時代前期から後期にかけての集落であることが明らかとなった。来年度以降も調査を継続する予定である。



調査区全景

(13) サンニヤⅢ遺跡

所　在　地　九戸郡洋野町種市第 25 地割地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年 4 月 7 日～ 11 月 30 日
調査終了面積　17,200 ㎡
調査担当者　菊池貴広・川又 晋・遠藤 修・中村隼人・佐々木あゆみ
主要な時代　縄文

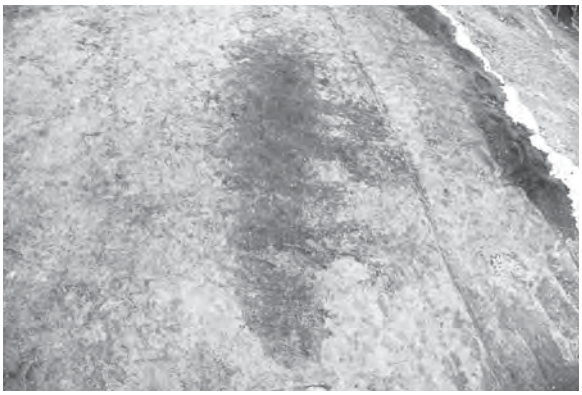
遺跡の立地

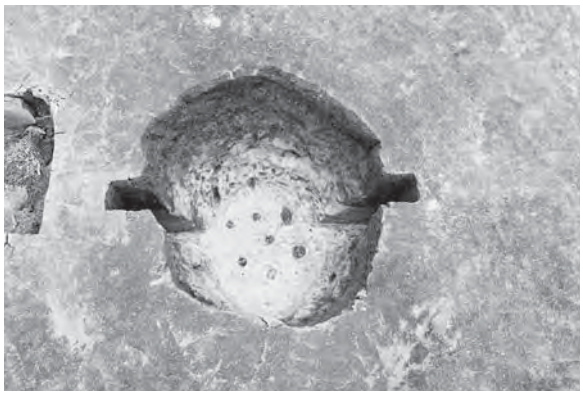
遺跡は、洋野町役場の西約1.5㎞に位置し、川尻川右岸の標高52～65m地点に立地する。遺跡中央部は谷底、南端は斜面地、南北端は平坦面となっている。今年度は中央部・南端部の17,200㎡を調査し、来年度は南西端を調査する予定である。

調査の概要

検出遺構は、陥し穴状遺構43基である。出土遺物は縄文時代早期～中期、晩期の土器片小コンテナ１箱、石器類小コンテナ１箱である。石器は石錐・凹石・磨製石斧などが出土している。

43基の陥し穴状遺構のうち、形状は円形14基と溝状29基の２種がある。円形の陥し穴状遺構埋土の上部に十和田中掫テフラが認められることから、縄文時代前期前半の遺構と思われる。溝状陥し穴状遺構は調査区南端の標高57～62m付近で列状に配列するものがある。


溝状陥し穴状遺構検出状況


円形陥し穴状遺構完掘

溝状陥し穴状遺構長軸断面

十和田中掫テフラが堆積する円形の陥し穴状遺構

(14) 荒津内遺跡

所　在　地　九戸郡洋野町種市第 20 地割ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年 4 月 17 日～ 9 月 15 日
調査終了面積　10,770㎡
調査担当者　西澤正晴・大泰司 統・澤目雄大・佐々木昭太
主要な時代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場より南西約1.3kmの場所に位置し、隣接してオーシャン･ビュー･スタジアムがある。海岸線から数えると３段目の段丘に立地する。標高は70～72m付近である。調査前の状況は松林であった。

調査の概要

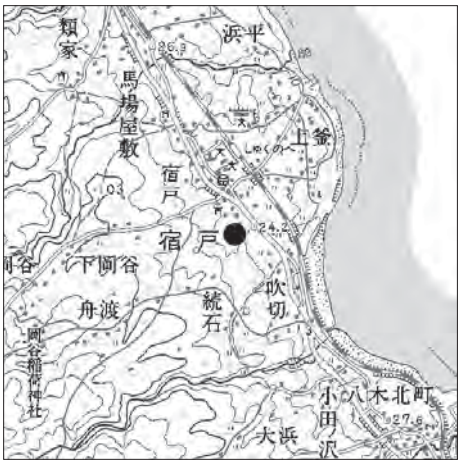
検出した遺構には、陥し穴状遺構17基、フラスコ状土坑９基、土坑28基、溝跡１条がある。陥し穴状遺構は並んでいるわけでなく、調査区全体に散在している状態で見つかっている。時期は遺物が伴う例が少なく判然としないが、縄文時代後期頃と想定している。

遺物は、縄文土器が中コンテナ１箱、石器が小コンテナ１箱分出土している。いずれも少数であり、面積の割には少ない出土量となっている。

以上のような陥し穴状遺構が散在するような遺構のあり方は、洋野町内にある比較的高い段丘に立地する遺跡の内容と同様の傾向を示している。

調査区全景

（15）宿戸（しゅくのへ）遺跡



所　在　地　九戸郡洋野町種市第６地割地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年４月 10 日～ 11 月 30 日
調査終了面積　11,360 ㎡
調査担当者　八木勝枝・大泰司 統・佐々木隆英・森 裕樹・高木 晃・羽柴直人・對馬利彦・出町拓也・佐藤桃子
主要な時代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、JR八戸線宿戸駅の西約500mに位置し、海岸から450m、標高35～53mの丘陵上に立地する。現況は山林である。今年度は11,360㎡の精査を終えた。来年度調査継続予定である。

調査の概要

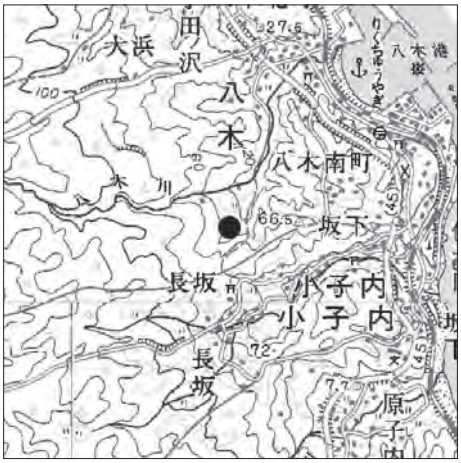
精査終了遺構は、縄文時代の竪穴住居25棟・焼土遺構20基・埋設土器４基・土坑67基・陥し穴状遺構22基・配石遺構２基、昭和時代の炭窯１基である。

出土遺物は、縄文時代早期～後期土器破片大コンテナ73箱、石器類中コンテナ389箱である。石器は石鏃、石匙などがあり、片面調整打製石器が多い。この他、コハク原石が出土している。

調査区は太平洋を望む丘陵上（南区・中央区）と北向き斜面～低位面（北区）の２箇所に分かれている。南区・中央区の丘陵上高位面には縄文時代早期～前期初頭の竪穴住居が多く、丘陵に浅く入りこんだ谷には陥し穴状遺構が配置されていた。北区は後期初頭の竪穴住居及び中期埋設土器を検出した。来年度は北区の残り6,040㎡の調査を行う予定である。

遺跡遠景

(16) 南八木（みなみやぎ）遺跡



所　在　地　九戸郡洋野町種市第１地割地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年７月３日～９月 15 日
調査終了面積　700 ㎡
調 査 担 当 者　福島正和・光井文行・舩渡耕己
主 要 な 時 代　縄文・古代・中世

遺跡の立地

遺跡は、JR八戸線陸中八木駅の西約１kmに位置し、概ね西から東へ流れる八木川と呼ばれる小河川西岸に接する段丘上に立地する。調査前の現況は山林であり、標高は約27mである。

調査の概要

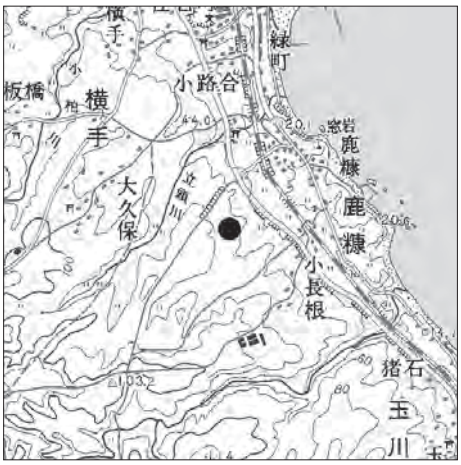
遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構１基・土坑２基、古代～中世の鉄生産遺構５基、廃滓場１箇所、粘土採掘坑２基、時代不明の炭窯１基である。廃滓場は、炉が多く検出された高位面よりもやや低位に広がっており、鉄生産によって生じた鉄滓等の廃棄物が多量に出土した。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ１箱、石器中コンテナ１箱、鉄滓等中コンテナ96箱である。また、鍛冶炉と思われる炉の前庭部埋土を洗浄して鍛造剥片および粒状滓を多数抽出した。

今回の調査によって縄文時代は狩猟域であったと考えられる。さらに、詳細な時代は不明ながら、古代～中世にかけての鉄生産がおこなわれていたことが明らかになった。鉄生産は廃滓場出土の鉄滓や炉の特徴からみて製鉄（製練）工程から鍛錬工程までおこなわれたと考えられる。今後、分析等によって時代や内容について具体的に明らかにしていきたい。

調査区全景

（17）南鹿糠（みなみかぬか）Ⅰ遺跡



所　在　地　九戸郡洋野町種市第 16 地割地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年 4 月 7 日～ 5 月 22 日
調査終了面積　2,100 ㎡
調査担当者　小林弘卓・高木 晃・佐藤奈津季・中島康佑
主要な時代　縄文・奈良

遺跡の立地

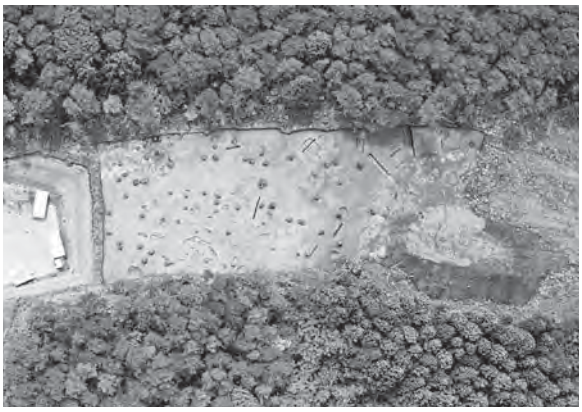
遺跡は、洋野町役場から南へ約1.8kmの地点にあり、西から東へ緩やかに下る海岸段丘上に立地する。調査区の標高は60～75mで、現況は山林である。調査は平成26・27年度に行われており、今回で３箇年目となる。

調査の概要

今年度の調査区は、遺跡全体の北側部分にあたる。検出遺構は、竪穴住居２棟、土坑５基、陥し穴状遺構６基である。竪穴住居は、縄文時代前期と奈良時代のものである。縄文前期の住居は、約8.5×6.5mの大型住居で楕円形を呈する。炉は確認できなかったが、埋土中から黒曜石を含む石器の剥片が大量に出土した。奈良時代の住居は、多くの炭化材や土師器が良好な状態で出土した。焼失住居と考えられるが、当該地域での奈良時代の遺構・遺物が確認された例は少なく、貴重な発見となった。陥し穴状遺構は６基すべてが溝状のものである。分布等に傾向はあまり見られないが、状況的に今回の調査区外にも広く分布するものと考えられる。

出土遺物は、土器中コンテナ１箱、石器中コンテナ３箱、土製紡錘車１点である。土器の大半は奈良時代の住居から出土した土師器である。石器は石鏃・石匙のほか、剥片が最も多く出土している。

３箇年にわたる調査の結果、縄文時代早期末～前期前葉を主体とする集落遺跡であることが明らかとなった。また、時期は不明であるが、陥し穴状遺構が点在することから、特定の時期においては狩猟場として利用さていたこと、加えて、今年度の調査で奈良時代の竪穴住居が確認されたことから、当該期においても集落が営まれていたことが推察される。


調査区全景（直上から）

奈良時代の竪穴住居（南から）

(18) 鹿糠浜（かぬかはま）Ⅰ遺跡

所　在　地　九戸郡洋野町種市15地割字鹿糠浜地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成29年6月1日～12月15日
調査終了面積　6,450㎡
調査担当者　杉沢昭太郎・趙 哲済・村木 敬・西澤正晴・河本純一・光井文行・山川純一・中村隼人・中島康佑・河村美佳・藤田崇志
主要な時代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場から南方向へ約３kmの丘陵頂部にあり、標高は約65～57mを測る。和座川の北岸に立地しており調査前は山林であった。

調査の概要

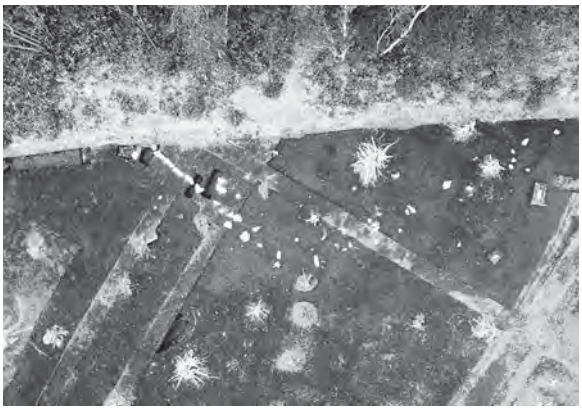
検出遺構は、何れも縄文時代の配石遺構１基、竪穴建物２棟、住居状遺構１棟、陥し穴状遺構７基、土坑29基、炉跡３基、捨て場２箇所、集石１基、柱穴状土坑16個である。

出土遺物は、縄文時代の土器が大コンテナ133箱、弥生土器小コンテナ0.1箱、石器が大コンテナ100箱、コハク原石が小コンテナ0.2箱である。

調査区は遺跡の中央やや東側にあたる。検出された配石遺構は、出土する土器の特徴から縄文時代後期の可能性が高い。簡素な構造であることや周囲の状況から外帯の石列と考えている。縄文時代前期の捨て場は北側斜面と南側平坦面に形成されている。十和田中掫テフラの降下より古いことも明らかになった。その場で潰れた状態で出土する土器も多くみられ、この時期の捨て場としては規模が大きく、後世の撹乱も殆ど受けていない。

他に北側の斜面部には貯蔵穴が、南側の丘陵頂部の平坦面には陥し穴状遺構が見つかっている。

出土遺物は縄文時代前期の土器と石器が主体であるが、後期前葉や晩期、弥生時代の土器も少量出土している。他にコハクや石製耳飾り等がある。石斧製作も盛んで、大量の円礫が持ち込まれ、石斧未完成品が数多く出土している。


配石遺構（上が西）

捨て場出土土器

（19）鹿糠浜（かぬかはま）Ⅱ遺跡

所　在　地　九戸郡洋野町種市第15地割地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成29年4月19日～9月15日
調査終了面積　8,900㎡
調査担当者　村木 敬・河本純一・佐藤桃子・佐々木あゆみ
高木 晃・米田 寛・小林弘卓・白戸このみ
佐藤奈津季・中島康佑・山川純一
主要な時代　縄文・奈良

遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場の南約２kmに位置する。東流する２条の沢に挟まれた段丘に形成されており、標高49～62m前後の斜面上に立地している。調査前の現況は山林である。北側には南鹿糠Ⅰ遺跡、南側には鹿糠浜Ⅰ遺跡が隣接している。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代後期の竪穴住居15棟、土坑67基、埋設土器２基、陥し穴状遺構７基、柱穴49個、性格不明遺構４基、遺物集中部２カ所、奈良時代の竪穴住居１棟である。

出土遺物は、縄文時代後期と奈良時代の土器が大コンテナ４箱、石器が大コンテナ14箱である。

今回の調査で、丘陵頂部に縄文時代後期を中心とした竪穴住居、それ以外の斜面にはフラスコ状土坑などが形成されている集落であることが判明した。それ以前は陥し穴状遺構などが形成される狩り場であったことが確認できている。

竪穴住居群全景

(20) 北玉川遺跡（きたたまがわ）

所　在　地　九戸郡洋野町種市第 14 地割北玉川地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年 10 月 2 日～ 12 月 5 日
調査終了面積　5,400 ㎡
調 査 担 当 者　須原 拓・立花雄太郎・戦場由裕
主 要 な 時 代　縄文・近代

遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場から南約2.7kmに位置し、太平洋へと流れる和座川の南岸、舌状にひろがる丘陵末端の緩斜面地に立地する。標高は60～70mである。調査前は杉林であった。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代後期前葉の竪穴住居３棟、土坑38基（うち貯蔵穴13基）、詳細な時期は不明な縄文時代の陥し穴状遺構５基、また近代（明治時代以降）の炭窯４基、時期不明の柱穴状土坑150個である。調査区は南北に長い中央が高く、南北両側はやや急に傾斜し低くなる地形である。遺構はほぼ全域に分布するが、竪穴住居と貯蔵穴は南側斜面に集中する。

竪穴住居は残りが悪く、いずれも床面の４分の１程度と壁の一部を検出したのみであるが、完形の縄文土器（深鉢）が出土している竪穴住居もある。貯蔵穴は竪穴住居の周辺に分布しており、竪穴住居と貯蔵穴は共伴関係にあると推測する。

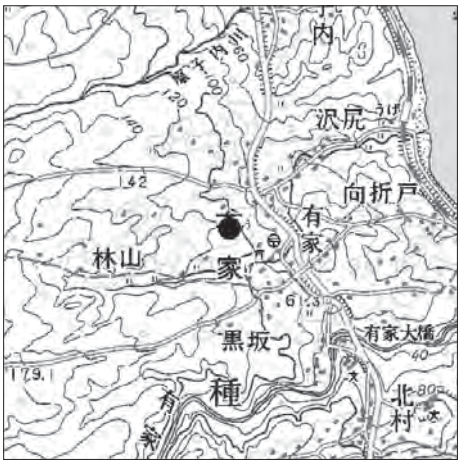
炭窯は奥行きが３ｍを超える大型のもので、平面形は円形や卵形を呈する。底面や壁は焼成により激しく硬化し、黒色あるいは橙色に還元している。形態から明治時代から大正時代にかけて使用された炭窯と推測する。

出土遺物は縄文土器が大コンテナ0.5箱と石器大コンテナ７箱である。縄文土器は上記の竪穴住居から出土した深鉢以外は小片で、前期と後期の土器がある。石器はほとんどが礫石器である。

竪穴住居から出土した縄文土器（北西から）

貯蔵穴全景（西から）

(21) 上のマッカ遺跡



所　在　地　九戸郡洋野町有家第５地割林山地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年６月５日～６月 30 日
調査終了面積　450 ㎡
調 査 担 当 者　福島正和・光井文行・舩渡耕己
主 要 な 時 代　縄文・平安

遺跡の立地

遺跡は、JR八戸線有家駅の南西約１㎞に位置し、東西方向に伸びる段丘上に立地する。調査区の標高は約90mであり、調査前の現況は山林である。以前に調査がおこなわれた上のマッカ遺跡は同一遺跡であるが、今回の調査区とは接していない。

調査の概要

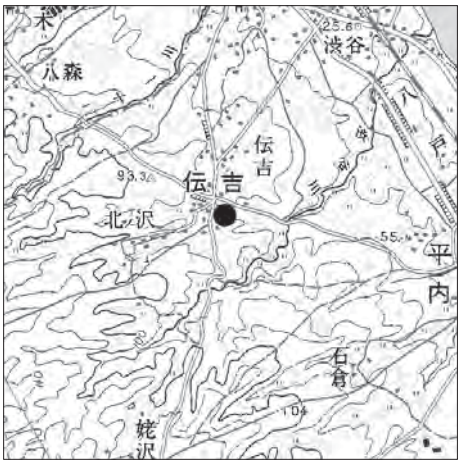
検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構１基、平安時代の工房と考えられる竪穴建物１棟、近世以降の炭窯１基、時期不明の土坑４基である。平安時代の竪穴建物は平面方形で、床面に２基の炉が認められた。建物出土遺物に製塩土器が１個体含まれていることから、炉は製塩炉の可能性が高い。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ１箱、石器小コンテナ１箱、製塩土器を含む平安時代の土師器小コンテナ１箱である。

今回の調査によって縄文時代の狩猟域であることが判明した。平安時代には竪穴建物内の製塩炉で、製塩土器を用いた塩作りがおこなわれていたと想定される。

調査区全景

(22) 北ノ沢Ⅰ遺跡



所　在　地　九戸郡洋野町種市第 45 地割地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年 4 月 7 日～5 月 15 日
調査終了面積　850 ㎡
調査担当者　村木 敬・河本純一・佐藤桃子
主要な時代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場の北西約 4 kmに位置する。東流する沢の右岸に形成されており、標高50m前後の斜面上に立地している。現河床との比高は0.5～３mである。調査前の現況は山林である。

調査の概要

検出遺構は、埋設土器13基、土器捨て場１箇所である。

出土遺物は、縄文時代前期から中期にかけての土器が大コンテナ70箱、石器が大コンテナ15箱である。２箇年分を合わせると、土器は大コンテナ145箱、石器は大コンテナ40箱である。

今回、調査で見つかった土器捨て場の存在から、斜面上方の平坦部には縄文時代前期から中期にかけての集落の主体部が存在するものと思われる

土器捨て場　断面

（23）千徳城遺跡群（せんとくじょう）

所　在　地　宮古市千徳町地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年 7 月 18 日～ 12 月 15 日
調査終了面積　2,800 ㎡
調 査 担 当 者　野中裕貴・阿部勝則・直江康雄・川村 英・大泰司 統・西澤正晴・澤目雄大
主 要 な 時 代　古代・中世

遺跡の立地

遺跡は、JR山田線千徳駅から北東約1.0㎞の場所に位置し、閉伊川・近内川・神田沢などの河川や低湿地に囲まれた丘陵上に立地する。丘陵は南端を千徳沢と呼ばれる谷地形によって東西に隔てられており、東側に千徳城跡、西側に古館跡・堀合館跡が位置する。これら３つの館跡をまとめて千徳城遺跡群と呼称されている。今年度は、昨年度調査に引き続き、堀合館跡に含まれる2,800㎡の調査を行った。調査区は、丘陵の東側に張り出した尾根上で、堀合館の東端にあたる。標高は、約10～40mである。現況は山林である。

調査の概要

検出遺構は、古代の竪穴住居13棟、土坑５基、中世の竪穴建物５棟、土坑１基、堀・溝２条、道路状遺構２箇所、柱穴状土坑36個、近世～近代の墓壙１基などである。

出土遺物は、土師器・須恵器大コンテナ３箱、石器中コンテナ５箱、陶磁器小コンテナ0.5箱、鉄製品小コンテナ１箱、羽口片２点、鉄滓類小コンテナ0.5箱、銭貨16点などである。

遺構の配置は、古代の竪穴住居と土坑が頂上部の平坦面の下がり際から南側の斜面部にかけて集中する。このエリアに中世の竪穴建物と堀・溝も確認しており、斜面に沿って両時期の遺構が雛壇状に重複する。他の中世の遺構は、頂上部の平坦面に掘立柱建物とみられる柱穴状土坑群、南側と東側斜面中腹に頂上部へ向かう道路状遺構が確認された。古代の遺構は中世の遺構に壊され、いずれも残りが悪いため、中世に城館としての機能を持たせるため土地を大きく改変したと考えられる。古代の集落から中世の城館へと場の移り変りを色濃く反映した遺跡であることが判明した。

古代の焼失住居

南側斜面部に重複する古代・中世の住居群

(24) 青猿（あおざる）Ⅰ遺跡

所　在　地　宮古市近内第２地割 46 ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年４月６日～ 12 月 15 日
調査終了面積　1,400 ㎡
調査担当者　阿部勝則・野中裕貴・直江康雄・川村 英
主要な時代　縄文・古代

遺跡の立地

遺跡は、JR山田線千徳駅から北東約1.8㎞に位置し、近内川とその支流によって形成された丘陵地の縁部に立地する南東向きの緩斜面である。調査区の微地形は、三つの尾根と二つの谷から構成される。標高は約30～80ｍで、現況は山林である。今年度は、南側の尾根を主とする1,400㎡について調査を行った。

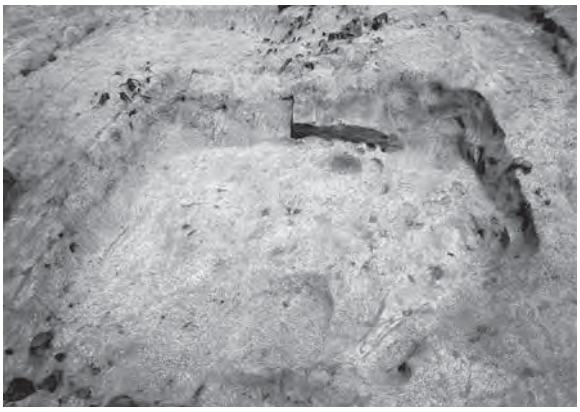
調査の概要

検出遺構は、古代の竪穴住居６棟、竪穴状遺構２棟、鉄生産に関連する工房１棟、土坑34基、炭窯２基、近代の家畜埋葬墓壙７基である。

出土遺物は、縄文土器数点、土師器・須恵器大コンテナ１箱、石器大コンテナ１箱、鉄製品小コンテナ１箱、鉄滓類小コンテナ１箱、牛馬等の獣骨大コンテナ５箱である。

竪穴住居は、尾根の頂部から南側の斜面部にかけて確認した。平面形は、いずれも隅丸方形で、規模は一辺約４ｍである。カマドは北側や西側に設けられており、煙道も確認できた。

工房は、斜面の等高線に沿って長軸を設定して竪穴状に掘り込まれ、床面で地床炉を確認した。遺構の形状と出土遺物から鍛冶などの鉄生産に関連する工房の可能性がある。土坑は、尾根の頂部から南側や東側の緩斜面で確認した。平面形は円形で、大きさは径1.0～2.0m、深さ0.4～2.0mである。埋土から土師器・須恵器などの土器、鉄滓類、貝殻などの動物遺存体が出土している。土坑同士や竪穴住居と重複する事例も多い。炭窯は、平面形は円形で、底面が被熱しており、炭化材が出土している。いずれの遺構も、古代の集落の様子を知ることのできる良好な資料である。


古代の竪穴住居

重複する古代の土坑

（25）中平（なかたい）遺跡

所　在　地　九戸郡野田村大字野田第13地割字大平野地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成29年11月1日～12月7日
調査終了面積　552㎡
調査担当者　北田 勲・藤田崇志・佐藤桃子
主要な時代　縄文・古墳末～奈良

遺跡の立地

遺跡は、野田村役場から南西約800mに位置しており、明内川と泉沢川によって形成された河岸段丘上に立地している。現況は道路で、標高は21.5～24.5mである。

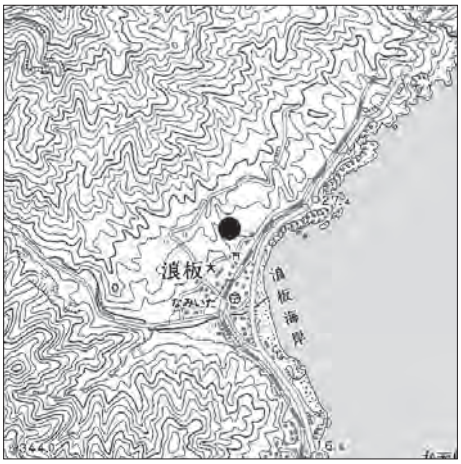
調査の概要

平成26・27年度に引き続き、３箇年目の調査である。検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構６基・土坑１基、古墳時代末～奈良時代の竪穴住居２棟・方形周溝１基、近現代の溝１条、出土遺物は縄文土器ビニール１袋、古墳時代末～奈良時代の土師器中コンテナ１箱・コハク９点である。

前年度の調査成果と合わせて、縄文時代の狩り場と古代の集落が広がっていることが分かった。次年度も調査を継続する予定である。

調査区全景（西から）

(26) 田屋（たや）遺跡



所　在　地　上閉伊郡大槌町吉里々々第11地割字田屋９ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成29年４月６日～５月31日
調査終了面積　2,550㎡
調査担当者　米田 寛・山川純一・白戸このみ
主要な時代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、JR山田線旧浪板駅から北へ約500mの緩斜面地に位置する。遺跡背後の鯨山（標高610m）から注ぐ沢流路によって形成された小支谷に数多くの遺構・遺物が分布し、調査区は谷底地形の拡がる緩斜面地に位置する。

調査の概要

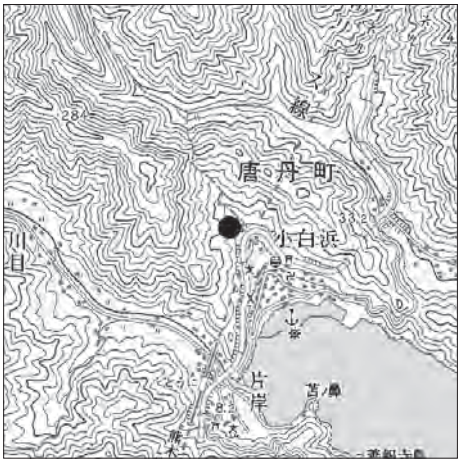
検出遺構は、焼土１基（時期不明）、性格不明遺構１基である。本年度調査区は、古代製鉄関連遺構の確認された平成26・28年度調査区に隣接するが、古代の遺構・遺物はない。

出土遺物は、縄文土器が大コンテナ3.5箱（早期数点、前期３箱、中期0.5箱、後期数点）、石器が小コンテナ１箱（剥片石器数点、磨石・敲石等の礫石器１箱）である。

本年度調査区には、黄褐色シルト質土と十和田中掫テフラ（To-Cu）の混合土層（To-Cu二次堆積層）が面的な広がりを持って堆積していた。この地層より上位では、通常To-Cuより下位層で出土する大木２a式土器が多量に出土し、下位では遺物量が激減する。また、この層内及び同地点の上下層では土器は著しく摩耗しており、典型的な二次堆積層出土資料が主体を占めた。

調査区全景（南西から）

（27）小白浜（こじらはま）遺跡



所　在　地　釜石市唐丹町字小白浜 385 ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年 4 月 10 日～ 6 月 6 日
調査終了面積　1,142 ㎡
調 査 担 当 者　北村忠昭・川村 英
主 要 な 時 代　縄文

遺跡の立地

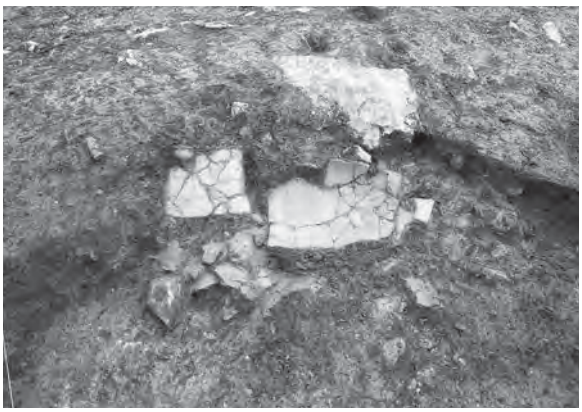
遺跡は、三陸鉄道南リアス線唐丹駅から北へ約1.1kmの斜面地に位置する。遺跡両側を背後の丘陵から続く尾根線に挟まれており、調査区北側に唐丹湾へ注ぐ沢が東流する。調査区現況は宅地である。

調査の概要

検出遺構は竪穴住居８棟、焼土１基、埋設土器１基、土坑１基、柱穴１個である。出土遺物は縄文土器大コンテナ５箱、石器大コンテナ１箱、石製品１点、陶磁器５点、金属製品２点、鉄滓１点である。平成27年度に発掘調査された成果を補完するように、縄文時代中期後葉の竪穴住居が確認された。当該期の集落は北側（斜面上方）へ広がり、東西を沢で挟まれた南（唐丹湾）向きの緩斜面部に営まれていると判明した。

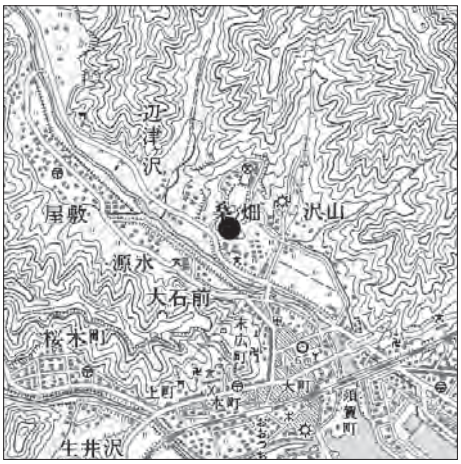
縄文時代の竪穴住居（南東から）

左写真竪穴住居の炉（南東から）


竪穴住居内遺物出土状況（南東から）

縄文時代の竪穴住居（南東から）

(28) 挟田館跡（はさまだだて）



所　在　地　上閉伊郡大槌町大槌第15地割字迫田94 - 96ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　平成 29 年４月６日～６月２日
調査終了面積　4,016 ㎡
調査担当者　羽柴直人・對馬利彦・出町拓也
主要な時代　中世

遺跡の立地

遺跡は、岩手県立大槌高等学校の南約350m、大槌川北岸に位置する。北側から延びる丘陵端部を造成した中世城館である。城館の頂部の標高は50m、調査区麓の標高は６ｍで、比高は44m程となる。調査前の状況は山林であった。調査区は城館の頂部も含む南西斜面部及び北西斜面山麓部である。平成28年度からの継続調査で、今年度の調査範囲は南西斜面中腹部分から頂部と、北西斜面山麓部が相当する。平成28年度の調査範囲と今年度の調査範囲の合計面積は7,010㎡となる。

調査の概要

検出遺構は、中世城館を構成する平場９箇所と「犬走」２条、竪穴建物１棟である。「犬走」２条は28年度終了範囲に含まれる。出土遺物は15～16世紀の中国産磁器（青磁碗、青磁皿、白磁碗、染付碗、国産陶器（瀬戸産折縁深皿、花瓶、卸皿）、鉄製品（鉄鏃、小札）がある。南西斜面部調査区は全体的に急峻な切岸と腰曲輪で構成されており、防御機能を重視した区域と理解できる。今年度調査の中腹から頂部にかけては、９箇所の平場が存在し、防御の足場としての「腰曲輪」の機能が想定される。また頂部の南端部には竪穴建物が１棟構築されている。北西斜面山麓部では、人為的に構築された平場等は検出されなかった。

遺跡遠景（西から）

竪穴建物全景

鉄製品（雁股鉄鏃）出土状況

（29）内田貝塚（うちだかいづか）

所　在　地　大船渡市末崎町字内田54番地６ほか
委　託　者　沿岸広域振興局土木部大船渡土木センター
事　業　名　主要地方道大船渡広田陸前高田線
発掘調査期間　平成 29 年６月１日～９月 29 日
調査終了面積　3,027 ㎡
調査担当者　須原 拓・立花雄太郎・戦場由裕
主要な時代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、大船渡湾の南西岸から約500mに位置し、湾へと張り出す丘陵末端の斜面地に立地する。標高は40～45mである。調査前は荒れ地であり、以前は畑地として利用されていたと聞く。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期初頭の竪穴住居１棟、縄文時代前期中葉の土坑９基と貝層１箇所、また時期不明の柱穴状土坑30個である。調査区は南北に長い。中央が高く、南北両側はやや急に傾斜し低くなる地形で、高い中央に縄文時代前期中葉の土坑や貝層が、また南端、斜面下の低い場所には中期初頭の竪穴住居が位置しており、縄文時代の前期と中期とで遺構の立地場所が異なる。また調査区北側の広い範囲には、斜面地形に沿って縄文時代前期から中期の包含層が形成されている。

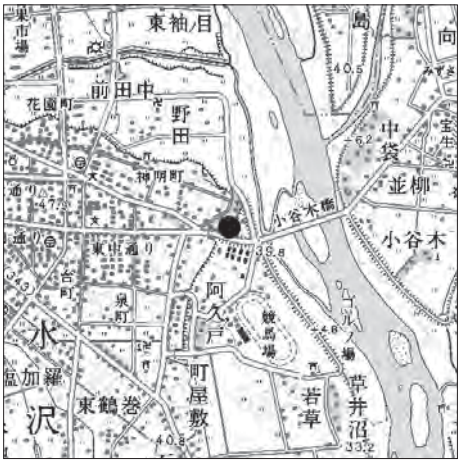
貝層は、面積約50㎡を測る。時期は出土した土器から大木３～４式期と推定される。貝層はすべて混貝土層で、貝は６割以上が破砕貝である。スガイやレイシなどの岩礁性の巻貝を主体とし、また魚骨ではマグロが非常に多い。他にイルカやアシカの骨が混じる。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ32箱（前期～中期）、石器大コンテナ31箱などで、主に貝層や遺物包含層から出土している。また貝層からは、縄文時代前期中葉の骨角器（釣針・骨針・刺突具）や貝輪がみつかっており、他にも自然遺物（貝、獣・魚骨）が多数出土している。

貝層全景（南西から）

貝層内魚骨出土状況（東から）

(30) 杉の堂遺跡



所　在　地　奥州市水沢区佐倉河字杉の堂 23-1 番地ほか
委　託　者　県南広域振興局土木部道路整備課
事　業　名　一般国道 397 号小谷木橋地区
発掘調査期間　平成 29 年 6 月 16 日～ 10 月 13 日
調査終了面積　1,160 ㎡
調査担当者　米田 寛・山川純一・白戸このみ
主要な時代　縄文・古代

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線水沢駅から東へ約1.6㎞、県営水沢競馬場から北西へ約600ｍの河岸段丘上に位置する。これまで38次に及ぶ発掘調査が実施されており、39次調査にあたる今年度調査区は遺跡範囲の南東端に位置する。遺跡からは、東に北上川と北上山地系、西に奥羽山脈系の焼石岳を視認できる。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居13棟（縄文５棟、奈良２棟、平安６棟）、竪穴状遺構１棟（奈良）、掘立柱建物６棟（縄文５棟、時期不明１棟）、焼土６基（縄文）、炉跡１基（縄文）、墓壙11基（縄文）、土坑47基（縄文・時期不明）、柱穴状土坑245個、性格不明遺構６基、遺物包含層１箇所（縄文）である。

出土遺物は、縄文土器が大コンテナ92箱（中期0.5箱、晩期93.5箱）、須恵器・土師器が大コンテナ３箱、石器が中コンテナ39箱（剥片石器中コンテナ３箱、礫石器中コンテナ36箱）、土偶・舟形土製品・板状土製品等の土製品が小コンテナ0.5箱、石棒類・板状石製品・垂飾品等の石製品が小コンテナ１箱、鉄滓数点、埋設土器内出土人骨片数点などである。

調査区全景（東から）

(31) 田鎖車堂前遺跡（たくさりくるまどうまえ）

所　在　地　宮古市田鎖第 11 地割 46-2 ほか
委　託　者　沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
事　業　名　宮古西道路
発掘調査期間　平成 29 年 4 月 4 日～6 月 2 日
調査終了面積　3,105 ㎡
調査担当者　福島正和・西澤正晴・須原 拓・村田 淳・光井文行・中村隼人・澤目雄大・舩渡耕己・立花雄太郎・佐々木昭太・戦場由裕
主要な時代　縄文・弥生・奈良～平安

遺跡の立地

田鎖車堂前遺跡はJR山田線千徳駅の南西約1.5kmの閉伊川とその支流である長沢川によって開析された平野部に位置する。遺跡の標高は６m前後であり、周囲は水田域であるが、調査した地点はその中でも微高地に立地しており、調査前は畑地が広がっていた。今年度は主に昨年度調査区の下面に存在する縄文時代の遺構面を調査した。

調査の概要

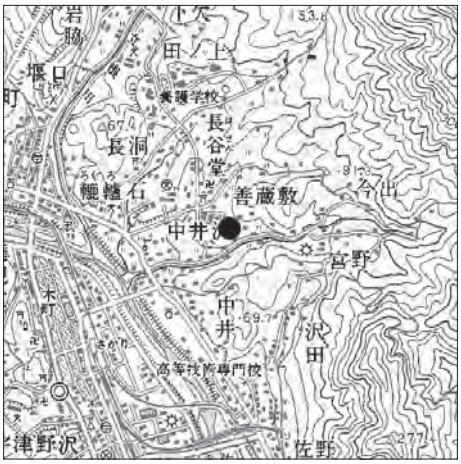
昨年度完了できなかった古代・弥生時代面の調査では、奈良～平安時代の竪穴住居40棟、弥生～平安時代の土坑19基を検出した。さらに下位にある縄文時代の遺構も多数検出した。縄文時代の遺構は早期末の竪穴住居４棟、前期の竪穴住居１棟、中期の竪穴住居46棟・土坑71基・中期末～後期の配石遺構である。縄文時代の土坑にはフラスコ状土坑・陥し穴状遺構・粘土採掘坑などを含む。

出土遺物は縄文土器大コンテナ63箱・石器中コンテナ49箱、土師器および須恵器大コンテナ６箱、縄文時代土製品小コンテナ１箱、古代の金属製品小コンテナ１箱などである。

田鎖車堂前遺跡は、これまでの調査で古代～中世において地域の一大拠点であったことが判明していたが、今年度の調査によって、縄文時代早期末から集落として利用され、縄文時代中期には、やはり拠点的な集落であったと考えられ、この地域の歴史に重要な意味を持つ遺跡であることが改めて明らかになった。

調査区全景

(32) 長谷堂貝塚（はせどうかいづか）



所　在　地　大船渡市猪川町字長谷堂183番地ほか
委　託　者　大船渡市都市整備部建設課
事　業　名　市道猿石線道路改良事業
発掘調査期間　平成29年6月1日～12月14日
調査終了面積　800㎡
調査担当者　高木 晃・小林弘卓・佐藤奈津季・中島康佑
主要な時代　縄文・近世

遺跡の立地

遺跡は、盛川の東岸に形成された河岸段丘上、今出山の山麓緩斜面に立地し、約300m四方の広がりを持つ。過去15回の発掘調査が実施され、縄文時代中期から平安時代にかけての遺跡であることが判明している。今年度実施した第17次調査は遺跡の東縁にある市道の拡幅に伴うもので、平成28年度に行った第16次調査区の北側隣接地を対象としている。調査区標高は30m前後である。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居９棟、土坑82基、焼土遺構３基、配石遺構５基、埋設土器１基、柱穴状土坑239基、貝層２箇所、遺物包含層約300㎡、近世の竪穴状遺構１基、配石遺構２基、溝２条である。縄文時代の遺構群は過年度の調査成果と合わせて判断すると、遺跡の東半で環状構造となる中期後葉集落の一画を形成すると捉えられる。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ57箱、石器中コンテナ21箱、土製品・石製品小コンテナ３箱、動物遺存体大コンテナ202箱等である。

貝層は径約６ｍの規模でアサリを主体とし、哺乳類・魚類等の骨も良好な状態で出土している。特筆されるのは貝層下位から検出されたイヌ集骨で、10頭分以上を確認した。解剖学的な位置関係にないため、他所で遊離した骨を集めたものと考えられる。

調査区中央部の遺構群

縄文中期末の配石遺構

貝層下位のイヌ集骨検出状況

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成29年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第692集
編著者名	西澤正晴・佐々木昭太・澤目雄大
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	西暦2018年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
がんどうこあいいせき 岩洞湖Ｉ遺跡 がんどうこえいちいせき 岩洞湖Ｈ遺跡	いわてけんもりおかしたまやまく 岩手県盛岡市玉山区 やぶかわあざかめばしちない 薮川字亀橋地内	03201	KF61-0251 KF61-0029	39度50分10秒, 39度50分9秒	141度22分02秒, 141度21分20秒	2017.09.19 ～ 2017.10.13	850㎡ 1,360㎡	岩洞ダム貯水池護岸工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩洞湖Ｉ遺跡	散布地	縄文時代	なし		
岩洞湖Ｈ遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代 平安時代 江戸時代	陥し穴状遺構　１基	縄文土器 弥生土器 土師器	

要約	岩洞湖Ｉ遺跡からは、遺構・遺物とも出土しなかったが、調査区周辺には遺構が地表面に露出している。岩洞湖Ｈ遺跡からは、陥し穴状遺構１基を確認したが、Ｉ遺跡と同様に、周辺には各時代の遺構が露出している。また、Ｈ遺跡からは多数の遺物片を採取した。

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成29年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第692集
編著者名	杉沢昭太郎・趙　哲済・河村美佳
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	西暦2018年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
わのにいほりじんじゃ 和野新墾神社 いせき 遺跡	いわてけんしもへいぐん 岩手県下閉伊郡 たのはたむらわの 田野畑村和野 502-7ほか	03484	KG22-1262	39度55分42秒	141度53分46秒	2017.04.10 ～ 2017.04.27	1,000㎡	三陸沿岸道路関連発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和野新墾神社遺跡	散布地	縄文時代	土坑　１基	土器	土器　小0.1箱
			焼土遺構　１基		
		現代	炭窯　１基		
		不明	土坑　１基		

要約	今回の調査区は遺跡の西端部にあたる。遺構や遺物が多くなかったのも遺跡縁辺という立地によるものと考えている。

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成29年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第692集
編著者名	福島正和・舩渡耕己
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	西暦2018年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
北野(きたの)Ⅻ(12)遺跡(いせき)	岩手県(いわてけん)久慈市(くじし)侍浜町(さむらいはまちょう) 堀切第10地割(ほりきりだいちわり)、夏井(なついちょう) 町鳥谷第４地割(ちょうとりたにだいちわり)ほか	03207	JG00-1088	40度 15分 12秒	141度 46分 51秒	2017.09.19 ～ 2017.10.13	1,120㎡	三陸沿岸 道路関連 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北野Ⅻ遺跡	その他	縄文時代 弥生時代	陥し穴状遺構　３基	土器 石器 土器	

要約	縄文時代の陥し穴状遺構を３基検出した。いずれも溝状の平面形態で、検出層位から縄文時代中期以降の狩猟域であったことが判明した。また、縄文時代早期や弥生時代後期の遺物を含む遺物包含層が部分的に残存しており、周辺に当該期の居住域が存在することを示唆している。

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成29年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第692集
編著者名	杉沢昭太郎・趙　哲済・河村美佳
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	西暦2018年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
木戸場(きどば)遺跡(いせき)	岩手県(いわてけん)久慈市(くじし)侍浜町(さむらいはまちょう) 本町(ほんちょう)第９地割(だいちわり)地内(ちない)	03207	JG00-0135	40度 15分 47秒	141度 47分 25秒	2017.05.01 ～ 2017.05.31	580㎡	三陸沿岸 道路関連 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木戸場遺跡	その他	縄文時代	土坑　２基 焼土遺構　１基	石鏃 寛永通宝	

要約	検出された縄文時代の陥し穴状遺構は、中掘火山灰の上面から掘り込まれており、縄文時代前期よりも新しい。焼土についてはその場で火を炊いた炉跡ではなかった。集落ではなく狩猟の場であったといえる。

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成29年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第692集
編著者名	福島正和・白戸このみ・舩渡耕己
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	西暦2018年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
中野城内遺跡 (なかのじょうないいせき)	岩手県九戸郡洋野町 (いわてけんくのへぐんひろのちょう) 中野第１地割下向地内 (なかのだいちわりしもむかいちない)	03507	IF89-2323	40度 18分 13秒	141度 45分 50秒	2017.10.16 ～ 2017.11.29	700㎡	三陸沿岸 道路関連 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野城内遺跡	その他	縄文時代	土坑　２基 陥し穴状遺構　８基	土器 石器	

要約	縄文時代の陥し穴状遺構を８基検出した。８基はすべて溝状の平面形態で、検出層位から縄文時代中期以降の狩猟域であったことが判明した。また、縄文時代早期中葉の遺物を多く含む遺物包含層や土坑を検出しており、周辺に当該期の居住域が存在することを示唆している。

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成29年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第692集
編著者名	菊池貴広・遠藤　修・佐々木あゆみ
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	西暦2018年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
沼里遺跡 (ぬまりいせき)	岩手県宮古市津軽石 (いわてけんみやこしつがるいし) 第４地割24-7 (だいちわり)	03202	LG53-1225	39度 34分 49秒	141度 55分 52秒	2017.09.19 ～ 2017.10.12	481㎡	三陸沿岸 道路関連 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沼里遺跡	集落	縄文時代 古代 縄文時代 弥生時代	竪穴住居　１棟 竪穴住居　１棟 焼土遺構　２基 焼土遺構　１基 柱穴状土坑　47基	土器 石器	

要約	今回の調査で、縄文時代晩期末葉～弥生時代の竪穴住居１棟、古代の竪穴住居１棟が検出された。平成28年度調査の結果と考え合わせると、縄文時代前期～古代にかけて集落が継続して営まれていることが明らかになった。

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成29年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第692集
編著者名	菊池貴広・遠藤　修・佐々木あゆみ
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	西暦2018年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
根井沢穴田Ⅳ遺跡（ねいさわあなた4 いせき）	岩手県宮古市津軽石第19地割穴田地内（いわてけんみやこしつがるいし だいちわりあなたちない）	03202	LG53-2201	39度 34分 30秒	141度 55分 40秒	2017.09.01 ～ 2017.09.29	340㎡	三陸沿岸 道路関連 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根井沢穴田Ⅳ遺跡	集落	縄文・弥生時代 古代	竪穴住居　1棟	土器・石器	

要約	今回の調査で、古代の竪穴住居１棟が検出された。また、縄文時代後期前葉、弥生時代後期の土器が出土していることから、調査区西側に該期集落跡の存在が推定できる。

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成29年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第692集
編著者名	藤田崇志
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	西暦2018年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
耳取Ⅰ遺跡（みみとり1 いせき）	岩手県和賀郡西和賀町耳取第49地割98-5地先（いわてけんわがぐんにしわがまち みみとりだいちわりちさき）	03366	ME60-0053	39度 17分 54秒	140度 49分 51秒	2017.09.01 ～ 2017.09.15	950㎡	地域連携 道路整備 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
耳取Ⅰ遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代 不明	土坑　1基	縄文土器、石器 弥生土器	

要約	今回の調査では出土遺構は時期不明の土坑１基に留まったが、出土量は少量であるものの縄文時代前期から弥生時代後期までの土器や石器が発見されており、調査区周辺に同時期の居住地が存在した可能性が考えられる。

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうくねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成29年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第692集
編著者名	西澤正晴・澤目雄大
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	西暦2018年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
せんまやじょういせき 千厩城遺跡	いわてけんいちのせきしせんまやちょう 岩手県一関市千厩町 せんまやあざたてやまちない 千厩字舘山31-10地内	03209	OF00-0359	38度 54分 59秒	141度 20分 09秒	2017.11.01 ～ 2017.12.01	560㎡	県単独 急傾斜地 崩壊対策

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千厩城遺跡	城館跡	中世	曲輪（切岸と平坦面）　１箇所		

要約	今回の調査では、切岸と平坦面からなる曲輪を１箇所検出した。周辺の地形測量から複数の曲輪が残存していることがあらためて判明した。過去の写真と比べると地形改変が著しい千厩城のなかで、斜面部を中心に残存している部分は重要といえよう。

※緯度・経度は世界測地系による数値である。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第692集

平成29年度発掘調査報告書

印　刷　平成 30 年３月 15 日
発　行　平成 30 年３月 22 日

編　集　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　(019)638-9001
ＦＡＸ　(019)638-8563

発　行　(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番1号
電　話　(019)654-2235
ＦＡＸ　(019)625-3595

印　刷　鈴木印刷株式会社
〒023-1101　岩手県奥州市江刺区岩谷堂字松長根15番5号
電　話　(0197)35-4515
ＦＡＸ　(0197)35-4518

© (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2018